文化財サービス発掘調査報告書 第30集

長岡京左京一条四坊四町跡・東土川遺跡発掘調査報告書

２０２３

株式会社　文化財サービス

1．調査地遠景（調査地上空より北西方向を望む）

2．調査地周辺遠景（調査地上空より名神高速桂川パーキングエリア方向を望む）

例　言

1　本書は、京都市南区久世東土川町350番地10で実施した、長岡京左京一条四坊四町跡・東土川遺跡の発掘調査成果報告書である。（京都市番号　22NG179）

2　調査は、株式会社日産電機製作所の工場建設に伴い、長岡京左京678次調査として実施した。

3　現地調査は、開発原因者より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、辰巳陽一（文化財サービス）が担当した。

4　調査期間は令和５年３月22日～７月４日である。

5　調査面積は717.0㎡である。

6　調査は、掘削残土の仮置き場を確保するため、調査区を東西に二分割して実施したが、本報告書では調査区平面図について、東西両調査区を接合したものを掲載した。

7　本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はＴ.Ｐ.（東京湾平均海面高度）である。

8　土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9　本書の執筆は辰巳が行い、編集は辰巳、吉川絵里、中西佳奈江（文化財サービス）が行った。

10　現地での記録写真撮影は辰巳が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。

11　現地での重機掘削は株式会社一誠建設に依頼した。

12　調査に係る資機材のリースおよび仮設工事は株式会社Soidに依頼した。

13　調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。

14　発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕菅田　薫、大西晃靖、田邉貴教、望月麻佑、田中慎一、小林一浩、上田智也、吉岡創平、清須慶太、田頭　香（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕望月麻佑、多賀摩耶、吉川絵里、森下直子、中　優作、場勝由紀菜、野地ますみ、神野いくみ、甲田春奈、西尾知子、若山美帆、田頭　香、下市紗耶香、鈴村　巴、内牧明彦、溝川珠樹（以上、文化財サービス）

15　出土遺物の年代観は、森岡秀人 「山城地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社　1990年

國下多美樹・中島信親・清水みゆき 「鶏冠井遺跡」『向日市埋蔵文化財調査報告書　第45集』 財団法人向日市埋蔵文化財センター　1997年

奥村清一郎・岩松　保・森島康雄・野水　永・高野陽子 「市田斉当坊遺跡」『京都府遺跡調査報告書　第36冊』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2004年

平尾政幸　「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

中世土器研究会　『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　2022年

に依った。

16　現地調査、整理作業において、國下多美樹氏（龍谷大学）から御教示をいただいた。記して感謝いたします。

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の経過…… 1
3　測量基準点の設置と地区割り…… 3
4　整理作業・報告書作成…… 3

第Ⅱ章　位置と環境
1　位置と環境…… 5
2　既往の調査…… 5

第Ⅲ章　調査成果
1　基本層序…… 11
（1）東区 …… 11
（2）西区 …… 11
2　検出遺構…… 12
（1）東区第１－１面 …… 12
（2）東区第１－２面 …… 12
（3）東区第２面 …… 12
（4）西区第１面 …… 16
（5）西区第２面 …… 17
3　出土遺物…… 19
（1）東区第１－１面遺構出土遺物 …… 19
（2）東区第１－２面遺構出土遺物 …… 20
（3）東区第３層出土遺物 …… 20
（4）東区第２面遺構出土遺物 …… 21
（5）西区第１面遺構出土遺物 …… 30
（6）西区第２面遺構出土遺物 …… 33

第Ⅳ章　まとめ …… 40

図版目次

巻頭図版　１．調査地遠景（調査地上空より北西方向を望む）
　　２．調査地周辺遠景（調査地上空より名神高速桂川パーキングエリア方向を望む）
図版１　調査区東壁、西壁土層断面図（１：100）
図版２　調査区南壁土層断面図（１：100）
図版３　調査区北壁土層断面図（１：100）
図版４　第１－１面　調査区全体平面図（１：250）
図版５　西区　井戸0883、土坑1180平・断面図（１：50）
図版６　第１－２面　調査区全体平面図（１：250）
図版７　東区　溝0100平・断面図（１：80）
図版８　第２面　調査区全体平面図（１：250）
図版９　東区　竪穴建物0250平・断面図（１：50）
図版10　東区　竪穴建物0251平・断面図（１：50）
図版11　東区　竪穴建物0252平・断面図（１：50）
図版12　東区　竪穴建物0253平・断面図（１：50）
図版13　東区　土坑0258・0277・0284・0293平・断面図（１：50）
図版14　東区　土坑0298・0688、ピット0189・0285平・断面図（１：50）
図版15　東区　ピット0294・0297・0582、溝状遺構0269平・断面図（１：50）
図版16　東区　溝状遺構0279、流路状遺構0648平・断面図（１：50）
図版17　西区　土坑0782・0790・0800・0918・0960平・断面図（１：50）
図版18　西区　土坑1069・1076・1223平・断面図（１：50）
図版19　西区　ピット0772・0932・0991・1039・1143・1197平・断面図（１：50）
図版20　出土遺物１（１：４）
図版21　出土遺物２（１：４）
図版22　出土遺物３（１：４）
図版23　出土遺物４（１：４）
図版24　出土遺物５（１：４）
図版25　出土遺物６（１：４）
図版26　出土遺物７（１：４）
図版27　出土遺物８（１：４）
図版28　第２面　弥生時代遺構変遷図（１：250）
図版29　遺構　１．東区　第１－２面全景（上が北）
　　２．東区　第１－２面　溝0100全景（南から）
図版30　遺構　１．東区　第２面全景（上が北）
　　２．東区　第２面　竪穴建物0250全景（北東から）
図版31　遺構　１．東区　第２面　竪穴建物0251全景（北東から）
　　２．東区　第２面　竪穴建物0252全景（北東から）

図版32　遺構　１．東区　第２面　竪穴建物0253全景（北東から）
２．東区　第２面　土坑0277遺物出土状況（北西から）
図版33　遺構　１．東区　第２面　土坑0284遺物出土状況（北東から）
２．東区　第２面　ピット0582遺物出土状況（北から）
図版34　遺構　１．西区　調査区全景（上が北）
２．西区　第１面　井戸0883半裁断面（北から）
図版35　遺物　１．東区　第１－１面　素掘り溝群出土遺物
２．東区　第１－２面　溝0100出土遺物
図版36　遺物　１．東区　第３層　出土遺物
２．東区　第２面　竪穴建物0250出土遺物
図版37　遺物　１．東区　第２面　竪穴建物0251出土遺物
２．東区　第２面　竪穴建物0252出土遺物
図版38　遺物　１．東区　第２面　竪穴建物0253出土遺物
２．東区　第２面　土坑0258・0277出土遺物
図版39　遺物　１．東区　第２面　土坑0284出土遺物
２．東区　第２面　土坑0672・0688出土遺物
図版40　遺物　１．東区　第２面　ピット群出土遺物
２．東区　第２面　溝状遺構0269・0279出土遺物
図版41　遺物　１．東区　第２面　流路状遺構0648出土遺物
２．西区　第１面　素掘り溝群出土遺物
図版42　遺物　１．西区　第１面　井戸0883出土遺物
２．西区　第２面　土坑0782出土遺物
図版43　遺物　１．西区　第２面　土坑0790出土遺物
２．西区　第２面　土坑0800・0918出土遺物
図版44　遺物　１．西区　第２面　土坑0960・1069出土遺物
２．西区　第２面　土坑1076出土遺物
図版45　遺物　１．西区　第２面　土坑1223出土遺物
２．西区　第２面　ピット群出土遺物

挿図目次

図１　調査位置図１（１：2,500）…… 1
図２　調査経過写真 …… 2
図３　調査区地区割り・基準点配置図（１：250）…… 4
図４　調査位置図２（１：80,000）…… 5
図５　既往調査位置図（１：5,000）…… 6

表目次

表１　既往調査一覧表 …… 8
表２　遺構概要表 …… 12
表３　遺物概要表 …… 19
表４　遺物観察表 …… 43

第Ⅰ章　調査の経緯

１　調査に至る経緯（図１）

京都府京都市南区久世東土川町350番地10において、株式会社日産電機製作所による開発事業が計画された。開発予定地は長岡京左京一条四坊四町跡・東土川遺跡の範囲内にあたる。そのため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が実施された。その結果、弥生時代から中世までの遺構および遺物の存在が確認され、発掘調査を実施することとなった。調査は、株式会社日産電機製作所から株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

２　調査の経過（図２）

発掘調査は、令和５年３月22日から現地作業に着手し、令和５年７月４日に現地における全ての工程を完了した。調査区は、文化財保護課の指導により、東西48.0ｍ、東辺南北19.0ｍ、西辺南北14.0ｍのＬ字形に設定し、面積は717.0㎡である。また、掘削残土の仮置き場を確保するため、調査区を東区と西区に二分割し、東区から調査に着手した。

近現代盛土および耕作土を重機掘削で除去したところ、東区において10YR4/3にぶい黄褐色を呈する極細粒砂からなる遺物包含層に達し、その上面で中世の遺構を確認した。そのため、当該面において人力によって精査を行い、遺構検出を実施した。その結果、中世の素掘り溝に加え、長岡京左京東四坊坊間西小路の西側溝とみられる溝を検出した。当該遺物包含層の層厚は0.1～0.2ｍで、これを除去すると調査地における基盤層である10YR6/6明黄褐色極細粒砂が露出し、その上面で弥生時代の遺物を包含する竪穴建物４棟と多数のピットを検出した。西区においては、近現代盛土および耕作土を除去した時点で基盤層に達し、その上面で中世の耕作溝および弥生時代のピットを検出した。これらの遺構の検出状況を記録後、遺構掘削および完掘状況の記録を行った。最後に

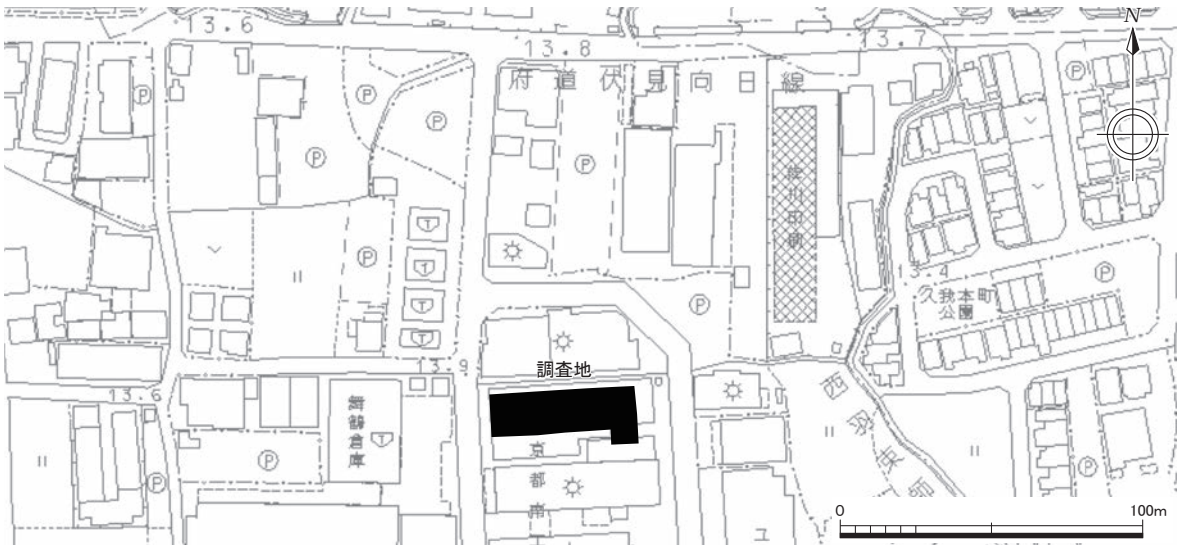


図１　調査位置図１（１：2,500）

1．調査前（北西から）

2．調査区設定状況（南西から）

3．東区重機掘削作業（南東から）

4．東区遺構掘削作業（北西から）

5．調査区反転作業（南東から）

6．西区遺構掘削作業（南東から）

7．西区埋め戻し作業（南西から）

8．調査完了後（北西から）

図２　調査経過写真

調査区の南壁際に重機によって断割を行い、下層確認を行った。

なお、写真撮影機材は、35㎜フルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35㎜白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、遺構掘削段階において、文化財保護課が設立した本調査の検証審査委員である國下多美樹氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

３　測量基準点の設置と地区割り（図３）

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にT.　１、T.　２を設置し、その２点からトータルステーションによりT.　３、T.　４を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

T.　1	X = -116,830.623 m	Y = -25,361.605 m	H = 13.678 m
T.　2	X = -116,837.870 m	Y = -25,414.376 m	H = 13.715 m
T.　3	X = -116,821.282 m	Y = -25,415.907 m	H = 13.590 m
T.　4	X = -116,820.087 m	Y = -25,395.527 m	H = 13.588 m

調査に当たっては、検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して３ｍグリッドを設定した。Ｙ軸にアルファベットを西から東に、Ｘ軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした。

４　整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した辰巳、編集作業は吉川、中西が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

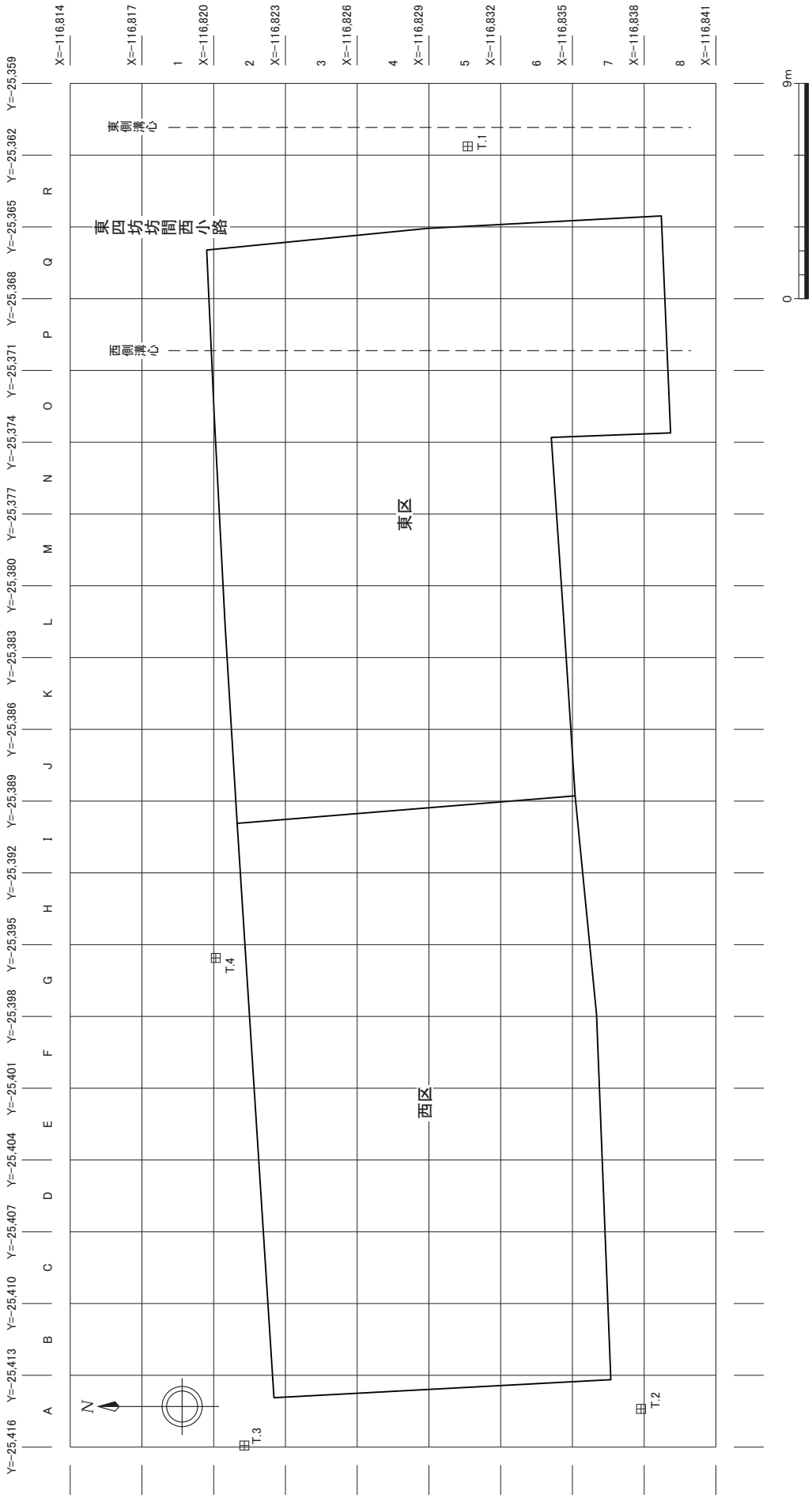


図３　調査区地区割り・基準点配置図（１：250）

第Ⅱ章　位置と環境

１　位置と環境（図１・４）

調査地が所在する乙訓地域は、東を桂川が南流し、木津川と合流して山崎から淀川となって大阪方面へ流下する。このことから、古来から水運の発達した地域である。また、京都盆地南西に位置する西山丘陵の東に向日丘陵が南東方向へ張り出し、桂川の氾濫によって形成された沖積平野が広がる。本調査地は桂川右岸から西へ約1.2kmの地点に位置し、長岡京の条坊復元では、左京一条四坊四町および東四坊坊間西小路に当たり、長岡京廃都後には条里制地割に取り込まれる。『和名類聚抄』に桂川右岸一帯の郷名として「訓世郷」とあり、調査地は久世荘の一部であったと考えられる。本調査地が所在する東土川に関しては、応永７（1400）年の「西山参鈷寺当知行山城国寺領目録」（『三鈷寺文書』）に「土川名田四段」、「久我領幷諸散在田数指出帳」（『久我家文書』）に「東土河分」として30筆８町１反270歩の田地が記載されている。これらのことから、調査地周辺一帯は中世には水稲耕作地であり、その土地利用の在り方を著しく変化させることなく近現代に至ったものと考えられる。

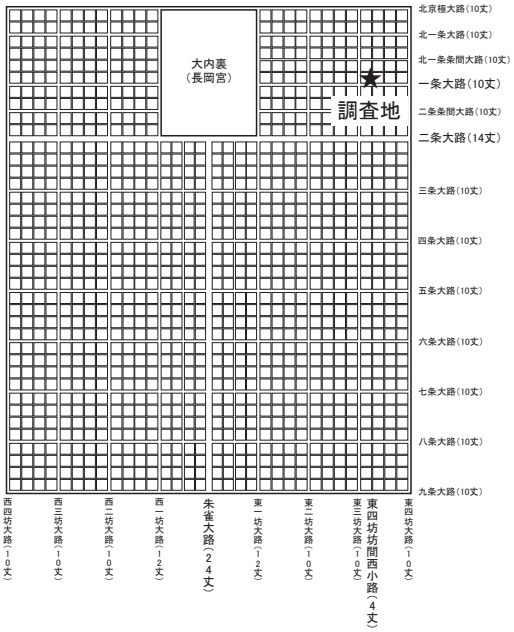


図４　調査位置図２（1：80,000）
出典：山中章『長岡京研究序説』塙書房 2001年

参考文献

『長岡京跡左京一条三坊十・十一町　発掘調査報告書』　株式会社文化財サービス　2018年

「長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡」『京都府遺跡調査報告書　第28冊』　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000年

２　既往の調査（図５）

調査地周辺は長岡京左京域の北部に相当するが、その他に東土川城跡、鶏冠井遺跡、当調査地が帰属する東土川遺跡等の遺跡が分布する。

弥生時代の遺跡として東土川遺跡、鶏冠井遺跡がある。東土川遺跡においては、長岡京左京第434次調査（13）、2018年に実施された左京二条四坊一町・東土川遺跡の調査（22）、名神高速桂川パーキングエリア建設に伴い実施された調査（23）、第304次調査（26）、第177次調査（27）、第267次調査（30）、第314次調査（31）が実施されている。中でも最も大規模な調査となった名神高速桂川パーキングエリア建設に伴う調査では、1993年度から1997年度にかけて調査が実施され、弥生時代中期の方形周溝墓群、水田遺構群などが検出され、石鏃や石剣、石包丁などの石器に加えて木器

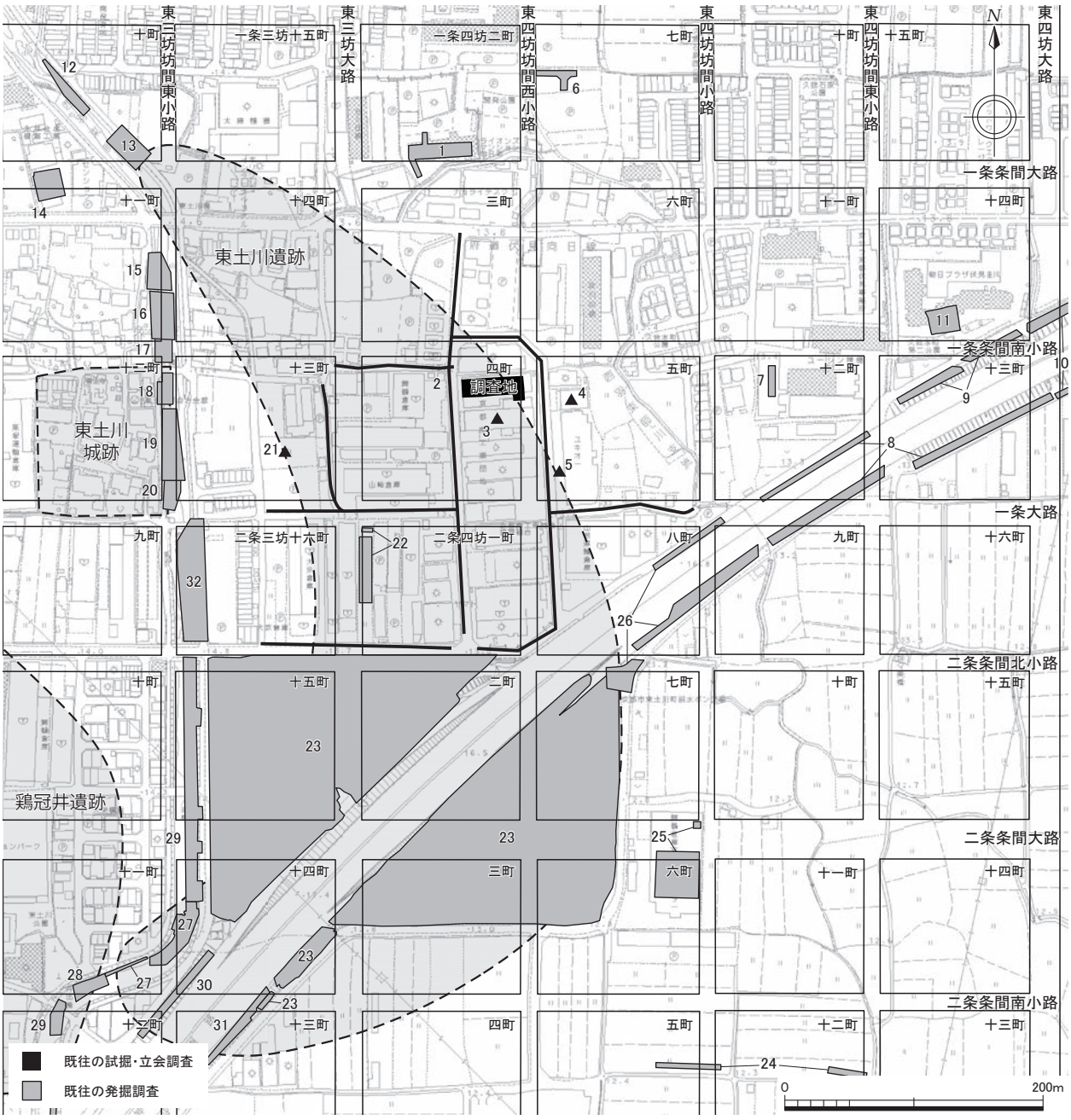


図５　既往調査位置図（１：5,000）

が多く出土している。また、第434次調査においても弥生時代の方形周溝墓が検出されている。第165次調査（28）、第139次調査（29）は鶏冠井遺跡の範囲内に位置するが、第139次調査において弥生時代から古墳時代の湿地状堆積および溝が検出されている。東土川遺跡の範囲外ではあるが、第604次調査（14）では弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている。

長岡京期では、第286次調査（８）で一条大路南北側溝・東四坊坊間東小路西側溝・東四坊大路西側溝・掘立柱建物・柵列、第313次調査（９）で掘立柱建物・柵列・溝、第197次調査（11）で掘立柱建物・柵列・溝、第418次調査（17）で東三坊坊間東小路西側溝、第426次調査（19）で東三坊坊間東小路東西側溝、第401次調査（20）で一条大路北側溝、第528次調査（25）で二条条間大路側溝と内溝・掘立柱建物、第177次調査（27）で東三坊坊間東小路路面・側溝、第139次調

査（29）で二条条間北小路路面・側溝・二条条間大路路面・側溝・掘立柱建物・柵列、第267次調査（30）で東三坊坊間東小路東西側溝・二条条間南小路南北側溝・掘立柱建物・柵列・井戸、第401次調査（32）で一条大路南側溝・内溝・掘立柱建物・柵列・土坑が検出されている。名神高速桂川パーキングエリア建設に伴う調査では、二条三坊十三町および十四町域内で小規模な掘立柱建物が検出された。十四町域内では東西中央に南北溝が検出されたことから、宅地が東西二分の一に分割されていたことが想定される。また、二条三坊十五町域内では二条条間大路に面した外郭築地と門が検出され、一町を占有する規模の宅地が確認された。二条四坊二町域内では掘立柱建物や区画溝が検出され、掘立柱を持つ柵あるいは塀によって南北二分の一町ずつに分割されていたことが判明した。二条四坊三町域内では宅地外郭築地や門、掘立柱建物が検出され、二条四坊六町域内では西半二分の一町が宅地として利用されていたことが確認された。二条四坊七町域内では掘立柱建物に加え、水路として利用されたと思われる溝、その護岸施設や船着き場の可能性のある方形土坑が検出されている。これら宅地内の遺構に加え、二条条間大路、二条条間北小路、二条条間南小路、東三坊大路、東四坊坊間西小路などに加え、二条条間大路と東三坊大路の交差地点における側溝排水施設が検出されている。

参考文献

「Ｖ－７　長岡京左京一条四坊・五町跡・東土川遺跡　No.112」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成18年度』京都市文化市民局　2007年

『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書　第28冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000年

『長岡京左京二条四坊一町跡・東土川遺跡　埋蔵文化財発掘調査報告書』　国際文化財株式会社　2018年

『長岡京跡左京一条三坊十・十一町　発掘調査報告書』　株式会社文化財サービス　2018年

表１　既往調査一覧表

	調査位置	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	一条四坊二町	L230	発掘	弥生時代の溝・落込、弥生時代～古墳時代の流路、長岡京期～平安時代の流路、時期不明の掘立柱建物を検出。	「25 長岡京左京一条四坊」『平成２年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1994 年
2	一条四坊三・四・五町、一条三坊十三町、二条四坊一・八町、二条三坊十六町、東土川遺跡	－	立会	弥生時代中～後期の竪穴建物・柱穴・溝を検出。	「７ 長岡京左京南一条四坊・東土川遺跡」『平成２年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1994 年
3	一条四坊四町、東土川遺跡	－	試掘	弥生時代後期の竪穴建物・溝・柱穴・ピットを検出。	「Ｖ－７ 長岡京左京一条四坊四・五町跡・東土川遺跡 No.112」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 18 年度』文化市民局 2007 年
4	一条四坊五町	－	立会	弥生時代中期の土坑・ピット・湿地状堆積、弥生時代～古墳時代の遺物包含層、中世の遺物包含層を検出。	「１ 長岡京跡 (00NG259)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成 13 年度』文化市民局　2002 年
5	一条四坊五町、東土川遺跡	－	試掘	弥生時代中～後期の溝・ピット・湿地状堆積を検出。	「Ｖ－９ 長岡京左京一条四坊五町跡・東土川遺跡 No.121」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 24 年度』文化市民局 2013 年
6	一条四坊七町	L600	発掘	弥生時代中期の方形周溝墓・ピット、長岡京期～平安時代の掘立柱建物・土坑、中世の耕作溝・ピットを検出。	『長岡京左京一条四坊七町跡 600 次発掘調査報告書』株式会社地域文化財研究所　2018 年
7	一条四坊十二町	L515	発掘	弥生時代末期～古墳時代初頭の流路、長岡京期の遺物包含層を検出。	『長岡京左京一条四坊十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006 － 16　埋文研　2006 年
8	一条四坊十二・十三町、二条四坊九町	L286	発掘	縄文時代後期の土坑・焼土跡・ピット、弥生時代～古墳時代の流路・溝・湿地状堆積、長岡京期の一条大路南北側溝・東四坊坊間東小路西側溝・東四坊大路西側溝・掘立柱建物・柵列・土坑、中世の耕作溝・ピット群を検出。	「(1) 長岡京跡左京第 286・304・313・317 次」『京都府遺跡調査概報 第 61 冊』㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 年
9	一条四坊十三・十四町	L313	発掘	縄文時代晩期～古墳時代後期の流路・土坑、長岡京期の掘立柱建物・柵列・溝、中～近世の耕作溝・土坑を検出。	「(1) 長岡京跡左京第 286・304・313・317 次」『京都府遺跡調査概報 第 61 冊』㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 年
10	一条四坊十四町	L317	発掘	弥生時代の溝、飛鳥時代の流路、中世の土坑・耕作溝を検出。	「(1) 長岡京跡左京第 286・304・313・317 次」『京都府遺跡調査概報 第 61 冊』㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 年
11	一条四坊十四町	L197	発掘	弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の溝、長岡京期の掘立柱建物・柵列・溝、中～近世の耕作溝を検出。	「第Ⅱ章 長岡京左京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』文化観光局 1988 年
12	一条三坊十町	－	発掘	弥生時代から中世の流路、近代の耕作溝を検出。	「19 長岡京左京一条三坊・東土川遺跡」『平成５年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1996 年
13	一条三坊十町、東土川遺跡	L434	発掘	弥生時代の方形周溝墓、長岡京期の集石遺構・流路、近世の耕作溝を検出。	「13 長岡京左京一条三坊１」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2002 年
14	一条三坊十一町	L604	発掘	弥生時代中期の方形周溝墓・土坑、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物・柵列・柱穴・土坑、江戸時代以降の耕作溝・ピット・土坑を検出。	『長岡京跡左京一条三坊十・十一町発掘調査報告書』株式会社文化財サービス　2018 年
15	一条三坊十一町	L418	発掘	弥生時代の土坑、室町時代から江戸時代初期の柱穴・井戸・土坑・溝・河川、江戸時代後期のトイレ状遺構・溝・土坑・柱穴、近代の池・流路を検出。	「17 長岡京左京一条三坊１」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2000 年
16	一条三坊十一・十四町	L426	発掘	弥生時代の方形周溝墓・柱穴、平安時代後期のピット、室町時代前半のピット、室町時代後半～江戸時代初頭の井戸・土坑・溝・ピット群、江戸時代中～後期の井戸・土坑を検出。	「14 長岡京左京一条三坊２」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2002 年

	調査位置	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
17	一条三坊十一・十二町	L418	発掘	弥生時代の溝・落込、長岡京期の東三坊坊間東小路西側溝・一条条間南小路を繋ぐL字溝、平安時代のピット、室町時代～江戸時代前半の土坑・ピット・井戸・溝を検出。	「18 長岡京左京一条三坊２」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2000 年
18	一条三坊十二町、東土川城跡	L418	発掘	弥生時代の溝・落込、鎌倉時代後期～室町時代前期の溝・ピット、室町時代後期～江戸時代前半のピット・井戸・溝を検出。	「19 長岡京左京一条三坊３」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2000 年
19	一条三坊十二・十三町、東土川城跡	L426	発掘	古墳時代の土坑、長岡京期の東三坊坊間東小路東西側溝、戦国期の溝・土坑・柱穴、近世の溝・井戸を検出。	「15 長岡京左京一条三坊３」『平成 11 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2002 年
20	一条三坊十二・十三町、東土川城跡	L401	発掘	弥生時代～古墳時代の土坑・柱穴、長岡京期の一条大路北側溝、平安時代の土坑・柱穴、中世の土坑・柱穴・溝、江戸時代の溝・土坑を検出。	「20 長岡京左京一条三坊４」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　2000 年
21	一条三坊十三町、東土川遺跡	－	試掘	弥生時代中期の土坑を検出。	「V － 6 長岡京左京一条三坊十三町跡 , 東土川遺跡 No.115 (19NG830)」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和２年度』文化市民局　2021 年
22	二条四坊一町、東土川遺跡	－	発掘	弥生時代の流路、古墳時代～奈良時代の柱穴・流路、長岡京期の柱列・溝・土坑・溝状遺構、鎌倉時代～江戸時代の耕作溝・柱穴・土坑を検出。	『長岡京左京二条四坊一町跡・東土川遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』国際文化財株式会社　2018 年
23	二条四坊二・三・六・七町、二条三坊十三・十四・十五町、東土川遺跡	L333, 334, 336, 337, 361 ～ 363, 384, 385, 399	発掘	弥生時代の環濠・溝・流路・方形周溝墓・土坑・落込・道状遺構・水田畦畔、古墳時代の溝・流路・土坑、長岡京期の二条条間大路に伴う路面・南北側溝・路面土坑・埋甕遺構、東三坊大路に伴う路面・東西側溝・路面土坑・地鎮土坑、二条条間北小路に伴う路面・南北側溝・柵列・路面土坑、二条条間南小路に伴う路面・南北側溝東四坊坊間西小路の路面・東西側溝、二条三坊十三町内にて掘立柱建物、二条三坊十四町内にて掘立柱建物・塀・井戸・門跡・小径、二条三坊十五町内にて掘立柱建物・門跡・宅地内溝・築地地業・暗渠・土坑、二条四坊二町内にて掘立柱建物・塀・橋跡・土坑・落込、二条四坊三町内にて掘立柱建物・塀・門跡・井戸・土坑・溝、二条四坊六町内にて掘立柱建物・井戸・東西水路・橋跡、二条四坊七町内にて掘立柱建物・柵・井戸・門跡・護岸施設・船着場遺構 (土坑)、平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・条里遺構 (溝・畦畔) を検出。	『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』京都府遺跡調査報告書第 28 冊　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000 年
24	二条四坊五・十二町	L572	発掘	古墳時代の流路・溝・土坑、長岡京期の溝・柱穴、平安時代～中世の耕作溝を検出。	『長岡京左京二条四坊五・十二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014 － 5　埋文研　2014 年
25	二条四坊六・七町	L528	発掘	縄文時代後期～弥生時代の焼土跡・土坑・流路、長岡京期の二条条間大路に伴う南北側溝・内溝、掘立柱建物、中～近世の耕作溝を検出。	『長岡京左京二条四坊六・七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008 － 13 埋文研　2009 年
26	二条四坊七・八・九町、東土川遺跡	L304	発掘	弥生時代～鎌倉時代の流路、室町時代の溝・土坑を検出。流路より長岡京期の祭祀遺物が多数出土。	「(1) 長岡京跡左京第 286・304・313・317 次」『京都府遺跡調査概報 第 61 冊』㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 年
27	二条三坊十一・十四町、東土川遺跡	L177	発掘	縄文時代晩期の遺物包含層、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代～古墳時代の湿地状堆積、長岡京期の東三坊坊間東小路に伴う路面・側溝、土坑、中世の耕作溝、中～近世の用水路を検出。	「39 長岡京左京二条三坊」『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1991 年
28	二条三坊十一町、東土川遺跡、鶏冠井遺跡	L165	発掘	長岡京期の溝、鎌倉時代の耕作溝を検出。	「23 長岡京左京南一条三坊・二条三坊」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1989 年
29	二条三坊十二・十四・十五町、東土川遺跡、鶏冠井遺跡	L139	発掘	弥生時代から古墳時代の湿地状堆積・溝、長岡京期の二条条間北小路に伴う路面・南北側溝、二条条間大路に伴う路面・南北側溝、掘立柱建物・柵、中世の耕作溝を検出。	「33 長岡京左京一条三坊・二条三坊」『昭和 60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1988 年

	調査位置	調査次数	調査法	調査成果概要	掲載文献
30	二条三坊十二・十四町、東土川遺跡	L267	発掘	長岡京期の東三坊坊間東小路東西側溝・二条条間南小路南北側溝・掘立柱建物・柵・溝・井戸、中世の耕作溝を検出。	「(1) 長岡京跡左京第 241・267・268 次」『京都府遺跡調査概報第 51 冊』㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992 年
31	二条三坊十三・十四町、東土川遺跡	L314	発掘	平安時代の掘立柱建物・土坑・流路、中世の耕作溝を検出。	「(2) 長岡京跡左京第 303・314・315 次」『京都府遺跡調査概報第 61 冊』㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995 年
32	二条三坊十六町	L401	発掘	縄文時代晩期の流路、奈良時代～長岡京期の溝、長岡京期の一条大路南側溝・宅地内溝・掘立柱建物・柵列・土坑、中～近世の耕作溝を検出。	「21 長岡京左京二条三坊」『平成 9 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研　1999 年

埋文研→公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　文化観光局→京都市文化観光局　文化市民局→京都市文化市民局

第Ⅲ章　調査成果

１　基本層序（図版１～３）

（１）東区

現地表面の標高値は東区の北東部で13.5ｍ、南東部で13.7ｍ、北西部で13.6ｍ、南西部で13.7ｍを測る。現地表面から最小で0.48ｍ、最大で1.72ｍは近現代盛土層で、その直下に近現代耕作土が堆積する。当該層は二層に細分することができ、上層が5BG4/1暗青灰色を呈する細粒砂（第１層）、下層が5Y6/2灰オリーブ色を呈する細粒砂（第２層）からなる。第１層の層厚は最小0.08ｍ、最大0.26ｍ、第２層の層厚は最小0.08ｍ、最大0.17ｍを測る。これらの堆積土を除去した時点で10YR6/6明黄褐色を呈する極細粒砂に達する。この堆積土は無遺物層で、当調査地における基盤層をなす。但し、調査区東端から西へ約15.0ｍの範囲においては、この基盤層直上に層厚0.1～0.2ｍを測る10YR4/3にぶい黄褐色を呈する極細粒砂（第３層）が堆積しており、その上面で長岡京期以降の耕作溝とみられる素掘り溝を確認した。このため、第３層が分布する範囲についてはその上面、分布しない範囲については基盤層上面を第１面として遺構面精査および遺構検出、掘削、記録を行った。第１面では上述の通り長岡京期以降の素掘り溝群に加え、長岡京東四坊坊間西小路西側溝とみられる南北方向の溝を検出した。このため、各時期毎に第１－１面、第１－２面として遺構掘削および記録作業を実施した。その後、第３層を除去して第２面として再度、遺構面精査および遺構検出、掘削、記録を行った。第２面においては、埋土中に弥生時代の遺物を包含する竪穴建物、土坑、ピット等を検出した。したがって、第３層が分布する範囲については２面調査、分布しない範囲については１面調査となった。

（２）西区

現地表面の標高値は西区の北東部で13.6ｍ、南東部で13.7ｍ、北西部で13.6ｍ、南西部で13.7ｍを測る。現地表面から最小で0.46ｍ、最大で1.36ｍは近現代盛土層で、その直下に近現代耕作土層（第１層、第２層）が堆積する。第１層の層厚は0.05～0.22ｍ、第２層の層厚は0.02～0.1ｍを測る。これらを除去した時点で当調査地における基盤層である10YR6/6明黄褐色を呈する極細粒砂が露出し、東区東部に分布していた10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂の堆積（第３層）は確認できなかった。また、遺構は基盤層上面で検出された。このため、当調査区は東区西部と同じく１面調査となったが、東区の一部が２面調査となったことと、長岡京期以降の遺構と弥生時代の遺構が検出されたことから、便宜的に第１面（東区の第１－１面に相当）、第２面の２遺構面に分けて記述する。また、西区南西角部において、表土掘削時に遺構面ベース層を成す基盤層が不明瞭であったため、遺構検出面以下まで掘削してしまったために、一部の遺構について壁面での確認に留まることになってしまった。

２　検出遺構

表２　遺構概要表

時代	遺構	備考
鎌倉時代	素掘り溝群、井戸 0883、土坑 1180	
長岡京期	溝 0100	
弥生時代中期	竪穴建物 0250・0251・0252・0253、土坑 0258・0277・0284・0293・0298・0688・0776・0782・0790・0800・0918・0960・1069・1223、ピット 0189・0285・0294・0297・0582・0772・0932・0991・1039・1143・1197、溝状遺構 0269・0279、流路状遺構 0648	

（１）東区第１－１面（図版４、図版29－１）

〔素掘り溝群〕

東区の第１面では、東西方向および南北方向の素掘り溝を多数検出した。東西方向の溝群は西で北に1.0°前後振るが、南北方向のものはほぼ正方位に乗るものと北で東に約8.0°振るものが検出された。切り合い関係では東西方向のものが最も先行し、南北方向の溝は正方位に走るものがより新しいと考えられる。東西溝は幅0.36～0.5ｍ、深さ0.12～0.15ｍ、南北溝は正方位のものが幅0.22～0.48ｍ、深さ0.1～0.15ｍ、その他は幅0.23～0.47ｍ、深さ0.1～0.13ｍを測る。遺構埋土には中世に属すると考えられる土師器片、瓦器片が主に包含されていた。

（２）東区第１－２面（図版６）

〔溝〕

溝0100（図版７、図版29－２）

調査区東端部から西へ約4.7ｍの地点で幅0.84ｍを測る南北方向の溝を検出した。検出した大部分で上記の長岡京期以降の素掘り溝に東肩部を切られているが、調査区を南北に縦断するように16.4ｍにわたって検出された。検出面から遺構底部までの深さは0.05～0.12ｍと非常に浅い。当遺構が掘り込まれた第３層の上面が削平されたことによって、遺構の残存深度が浅くなったものと考えられる。当調査地から約300ｍ南に位置する名神高速桂川パーキングエリア建設に伴う発掘調査において検出された長岡京東四坊坊間西小路西側溝の溝心を北に延長した場合、当遺構の軸線から東に約0.4ｍに位置する。このことから、当遺構は長岡京東四坊坊間西小路西側溝と看做すことが可能と考えられる。また、遺構埋土中からは、長岡京期に属すると考えられる須恵器片が出土している。

（３）東区第２面（図版８、図版30－１）

東区の第２面では、竪穴建物４棟に加え、土坑、溝状遺構、多数のピットが検出された。また、調査区南東角部で流路状遺構が検出された。竪穴建物は、調査区東端部に集中しており、ピットは主に調査区中央部以西に分布する。これらの遺構埋土には弥生時代の所産と考えられる遺物が包含されていた。

〔竪穴建物〕

竪穴建物0250（図版９、図版30－２）

調査区北東部で検出された。平面形はほぼ円形で、規模は直径4.0ｍを測るが、南西部および南東部が既存建物の基礎解体時に撹乱を受けている。検出面から床面までの深さは0.1～0.14ｍを測る。貼床は部分的に残存しており、層厚は0.04～0.06ｍである。壁際に壁溝が巡り、その幅は0.22ｍ、検出面からの深さは0.2ｍである。中央部で土坑0667、0669を検出したが、土坑0669は竪穴建物の埋土を上層から切っている。また、土坑0667の北端部を切るピット1398も竪穴建物埋土を上層から切っており、建物埋没後に切り込まれた遺構と考えられる。一方で土坑0667は竪穴建物埋土を切っていないことに加え、竪穴建物の埋土が近似することから、同時期に埋没した可能性が考えられる。主柱穴は検出されなかった。弥生時代中期中葉から後葉の遺物が出土している。

竪穴建物0251（図版10、図版31－１）

調査区東部、竪穴建物0250の南西部で検出された。平面形は東西4.5ｍ、南北3.8ｍを測る横長方形を呈し、長軸の方位は北で西へ27°振る。検出面から床面までの深さは0.15～0.18ｍを測る。部分的に貼床の痕跡が認められ、その厚さは0.08mである。壁際に壁溝が巡り、その幅は0.25～0.33ｍ、深さは検出面から0.22ｍである。埋土を除去したところ、遺構のほぼ中央部で土坑0671を検出した。その埋土は、基盤層に由来すると考えられる10YR6/6明黄褐色ブロックの混入量が多くなるものの、竪穴建物0251の埋土とほぼ同じである。また、土坑0671の東側で検出した土坑0672は竪穴建物0251の壁溝を切っており、埋土は土坑0671と同様に竪穴建物0251のものとほぼ同一である。土坑0671の南で検出した土坑0647についても、竪穴建物0251の壁溝を切っているが、埋土は0671、0672と同様である。土坑0647の北東に位置する土坑0673についても埋土は上記の３遺構と同様であった。これらのことから、土坑0671、0672、0673、0647は当遺構構築時あるいは構築後に掘り込まれ、同時期に埋没したことが考えられる。主柱穴は検出されなかった。弥生時代中期中葉から後葉の遺物が出土している。

竪穴建物0252（図版11、図版31－２）

調査区東壁際、竪穴建物0250の南東で検出された。東半が調査区外になるため、全体の平面形および規模は不明であるが、直径7.8ｍ以上の円形プランを採ると想定される。検出面から床面までの深さは0.05～0.09mを測る。部分的に貼床の痕跡が認められ、その厚さは0.08～0.09mである。壁際に壁溝が巡り、その幅は0.28～0.38ｍ、深さは検出面から0.22～0.32ｍである。主柱穴は検出されなかった。弥生時代中期後葉の遺物が出土している。

竪穴建物0253（図版12、図版32－１）

調査区南東角で検出された。平面形は方形と考えられるが、南辺の東半、南東角部、北東角部および東辺が調査区外に出る。そのため、全体規模は不明であるが、南北5.7ｍを測り、東西4.4ｍ以

上と考えられる。また、方位は北で東へ32°振る。検出面から床面までの深さは0.06～0.34ｍを測る。部分的に貼床の痕跡が認められ、その厚さは0.06～0.14ｍである。壁際に壁溝が巡り、その幅は0.3～0.4ｍ、深さは0.2～0.3ｍである。また、埋土を除去したところで土坑0649、0658を検出した。これらの遺構は中央部が直径0.4～0.5ｍ、深さ0.4～0.5ｍのピット状に深くなって柱穴状を呈し、竪穴建物0253埋土と近似した堆積土によって埋没している。このことから、土坑0649、0658は竪穴建物と同時期に埋没した可能性が考えられる。竪穴建物の北西角部、南西角部に位置することと、柱穴状の遺構であることから、主柱穴の可能性が考えられる。弥生時代中期後葉の遺物が出土している。

〔土坑〕

土坑0258（図版13）

調査区北東部で検出した。全長2.3ｍ、幅0.5ｍを測る南北に長い平面形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.18ｍである。弥生時代中期の遺物が出土している。

土坑0277（図版13、図版32－２）

竪穴建物0251の西で検出した。東半が竪穴建物0251に切られる。短辺1.3ｍ、長辺1.9ｍを測る縦長方形に近い平面形を呈し、検出面から底部までの深さは0.3ｍを測る。東半については竪穴建物0251の埋土を除去した段階で輪郭を確認した。また、当遺構の埋土上で竪穴建物0251の壁溝を検出したことから、当遺構は竪穴建物0251に先行し、建物構築時に埋没したものと考えられる。しかし、遺構埋土中には竪穴建物0251埋土中から出土している遺物と同時期のものが包含されており、両遺構の時期差は大きなものではないことが考えられる。

土坑0284（図版13、図版33－１）

調査区東西中央部の南壁近くで検出した。東部の一部を溝状遺構0279に切られる。東西1.2ｍ以上、南北1.9ｍの不定形な平面形を呈し、検出面から底部までの深さは0.42ｍを測る。弥生時代中期の遺物が出土している。

土坑0293（図版13）

調査区中央部からやや北西の位置で検出した。東西0.6ｍ、南北0.5ｍの方形に近い平面形を呈し、検出面から底部までの深さは0.3ｍである。弥生時代中期の遺物が出土している。

土坑0298（図版14）

ピット0297の南1.4ｍの位置で検出した。平面形は短径0.6ｍ、長径0.76ｍの楕円形を呈し、検出面から底部までの深さは0.32ｍである。

土坑0688（図版14）

調査区南東部で検出した。平面形は縦長方形で、東西2.2ｍ、南北1.2ｍを測り、検出面から底部までの深さは0.26ｍを測る。弥生時代中期の遺物が出土している。

〔ピット〕

主に調査区西半で多数のピットを検出した。これらの遺構埋土中からは極小片が主体ではあるが、弥生土器が出土している。多くが直径0.2～0.3ｍ前後の円形平面を持つものであるが、それらよりも規模が大きいものも検出されている。中でも、とりわけ大型の遺構がピット0189、0285、0294、0297である。これらの遺構は平面、検出面から遺構底部までの深さ共に掘立柱建物の柱穴である可能性が考えられる。これらのうちピット0189、0285、0297を一纏まりと看做すことは不可能ではないが、その場合、ピット0189と0297間の柱間が6.8ｍ、ピット0189と0285間の柱間が6.7ｍを測る。ピット0297の南に位置する土坑0298をピットと看做して加えたとしても、ピット0298と0297間の柱間は1.3ｍであるが、ピット0189と0298間の柱間が5.5ｍを測る。これらの柱間間距離は柱間一間分としては広すぎると考えられ、また、これらを掘立柱建物として復元しようとした場合、北東角の柱穴に当たる遺構としてピット0294あるいは土坑0293を想定することになるが、ピット0298と0189間、ピット0189と0285間、ピット0285とピット0294あるいは土坑0293間に同規模の柱穴遺構を見出し難い。加えて、ピット0294あるいは土坑0293とピット0285間の軸線はピット0189と0297間の軸線に対して北で西に大きく振れる。これらのことから、上記の遺構群を掘立柱建物として復元し難いと思われる。一方で、大半を占める小規模なピット群については、平地式建物に伴う遺構である可能性も残存する。また、遺構埋土中には弥生時代以降の所産とみられる遺物は包含されていなかった。

ピット0189（図版14）

調査区南西部で検出した。平面形は一辺0.6ｍの方形で、検出面から底部までの深さは0.55ｍである。

ピット0285（図版14）

調査区東西中央部の南壁近くで検出した。平面形は東西0.5～0.6ｍ、長径0.6ｍの不定形で、検出面から底部までの深さは0.52ｍである。

ピット0294（図版15）

ピット0293の北西0.8ｍで検出した。短径0.6ｍ、長径0.8ｍの楕円形平面を呈し、検出面から底部までの深さは0.25ｍである。

ピット0297（図版15）

調査区北西部で検出した。平面形は東西0.8ｍ、南北0.9ｍの方形で、検出面から底部までの深さ

は0.73ｍである。

ピット0582（図版15、図版33－２）

調査区南西部で検出した。短径0.25ｍ、長径0.45ｍの楕円形平面を呈し、検出面から底部までの深さは0.67ｍである。壺の頸部が出土している。

〔溝状遺構〕

溝状遺構0269（図版15）

調査区南北中央部東端部、竪穴建物0251の南東角部から竪穴建物0253の北西角部の間で検出した。北西から南東に向かって伸びる溝状遺構で、北で西へ31°振れる。検出長4.9ｍ、幅0.58ｍ、検出面から遺構底部までの深さ0.25ｍである。南端部は竪穴建物0253に切られており、当遺構が先行すると考えられる。弥生時代中期の遺物が出土しており、竪穴建物0253のものとほぼ同時期の所産とみられる。このことから、両者の時期差は比較的小さいものと考えられる。

溝状遺構0279（図版16）

調査区東西中央南壁近くで検出した、北西から南東に向かって伸びる溝状遺構で、北で西へ28°振れる。検出長1.9ｍ、幅0.6ｍ、検出面から遺構底部までの深さ0.32ｍである。弥生時代中期の遺物が出土している。

〔流路状遺構〕

流路状遺構0648（図版16）

調査区南東隅部で検出した。竪穴建物0253を切る。検出した肩部から東へ向かって急峻に深く落ち込むことから、流路状遺構の西肩を検出したものと考えられる。検出長3.1ｍ、検出幅1.5ｍ、検出面から底部までの深さは0.75ｍを測る。東肩は調査区外になるため、全幅は不明である。竪穴建物0253の埋土および床面を切っていることに加え、遺構埋土中に弥生時代後期の遺物を包含していたことから、竪穴建物0253埋没後に成立したものと考えられる。

（４）西区第１面（図版４）

西区第１面では、東区と同様の素掘り溝に加え、井戸および土坑が検出された。

〔素掘り溝〕

東区と同じく、東西方向および南北方向に走る素掘り溝が多数検出された。東西溝は西で北に1.0°前後振り、南北溝が正方位に乗るものと北で東に約8.0°振るものに分類される点も東区と同様である。東西溝の幅は0.37～0.6ｍ、深さ0.1ｍ前後、ほぼ正方位の南北溝は幅0.22～0.46ｍ、深さ0.1～0.13ｍ、角度が振れる南北溝は幅0.36～0.57ｍ、深さ0.1ｍ前後を測る。これらの遺構埋土中には中世の所産と考えられる土師器片、瓦器片、瓦質土器片を主とした遺物が包含されていた。

〔井戸〕

井戸0883（図版５、図版34－２）

調査区中央部で検出された。掘方の平面形は東西1.3ｍ、南北1.45ｍの方形で、検出面から底部までの深さは1.7ｍを測る。遺構の平面形状や深さから井戸の可能性が考えられるが、井戸枠は残存していなかった。また、裏込土などの、井戸枠が構築された痕跡も認められなかった。これらのことから、当遺構は素掘りの井戸であった可能性が高い。遺構埋土から土師器片、須恵器片、瓦器片、瓦質土器片を主とした中世の所産と考えられる遺物が出土した。

〔土坑〕

土坑1180（図版５）

井戸0883の北約3.0ｍで検出された。東部および西部を南北方向の素掘り溝に切られているため、全体の平面形状と規模は不明である。東西0.8ｍ以上、南北0.76ｍの平面方形を呈する土坑で、検出面から遺構底部までの深さは0.1ｍである。遺構埋土から土師器片、瓦質土器片を主とした中世の所産と考えられる遺物が出土した。

（５）西区第２面（図版８、図版34－１）

〔土坑〕

土坑0782（図版17）

調査区南東部で検出した。平面形は長辺1.9ｍ、短辺0.8ｍを測る縦長方形で、検出面から遺構底部までの深さは0.5ｍである。弥生時代中期の遺物が出土した。

土坑0790（図版17）

調査区北東部で検出した。南西端部を土坑0791に切られる。平面形は長辺2.2ｍ、短辺0.9ｍを測る縦長方形で、検出面から遺構底部までの深さは0.28ｍである。弥生時代中期の遺物が出土した。

土坑0800（図版17）

調査区南東部で検出した。長軸1.08ｍ、短軸0.7ｍの楕円形平面を有する土坑で、検出面から遺構底部までの深さは0.2ｍを測る。弥生時代中期の遺物が出土した。

土坑0918（図版17）

調査区中央部の南壁際で検出した。全長3.56ｍ、幅0.62ｍを測る溝状の土坑で、検出面から遺構底部までの深さは0.44ｍである。弥生時代中期の遺物が出土した。

土坑0960（図版17）

調査区中央部より西寄りで検出した。東西1.24ｍ、南北1.72ｍの不定形な平面形を呈し、検出面

から遺構底部までの深さは0.6ｍである。弥生時代中期の遺物が出土した。

土坑1069（図版18）

調査区西壁際北部で検出した。遺構の西部が調査区外に出るため、全体の平面形および規模は不明であるが、東西1.5ｍ以上、南北1.0ｍを測る不定形な平面形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.5ｍである。弥生時代中期の遺物が出土した。

土坑1076（図版18）

調査区西壁際中央部で検出した。遺構の西部が調査区外に出るため、全体の平面形および規模は不明であるが、東西2.0ｍ以上、南北2.1ｍを測り、検出面から遺構底部までの深さは0.55ｍである。弥生時代中期の遺物が出土した。

土坑1223（図版18）

調査区北東で検出した。長軸1.07ｍ、短軸0.74ｍの楕円形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.35ｍを測る。弥生時代中期の遺物が出土した。

〔ピット〕

西区においても東区西部と同様に、多数のピットを検出した。これらのピットは調査区全域で検出されたが、東半に比して西半の方にやや多く分布する。多くは直径0.2～0.3ｍ前後の平面規模を有し、東区で検出されたピット0189、0285、0294、0297、土坑0293、0298と同規模以上の遺構は見出し難い。一方で、これらの小規模なピット群については、東区と同様、平地式建物に伴う遺構である可能性も残存する。これらの遺構は埋土中に弥生時代の所産とみられる遺物を包含していたが、極細片が多く実測できたものは多くない。以下、実測することができた遺物が出土した遺構について記述する。

ピット0772（図版19）

調査区西端の南北中央部で検出した。平面形は長軸0.22ｍ、短軸0.18ｍの楕円形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.25ｍを測る。弥生時代中期の所産と考えられる遺物が出土している。

ピット0932（図版19）

調査区北西部で検出した。平面形は長軸0.3ｍ、短軸0.25ｍの楕円形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.3ｍを測る。粘板岩製の石製品と考えられる遺物が出土している。

ピット0991（図版19）

調査区北西部で検出した。長軸0.33ｍ、短軸0.3ｍを測る不定形な平面形を呈し、検出面から遺

構底部までの深さは0.2ｍである。弥生土器壺の底部と考えられる遺物が出土している。

ピット1039（図版19）

調査区南西部で検出した。平面形は長軸0.26ｍ、短軸0.23ｍの楕円形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.32ｍを測る。弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる遺物が出土している。

ピット1143（図版19）

調査区北部の中央東寄りで検出した。平面形は長軸0.2ｍ、短軸0.16ｍの楕円形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.1ｍを測る。弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる遺物が出土している。

ピット1197（図版19）

調査区南東部で検出した。平面形は長軸0.35ｍ、短軸0.27ｍの楕円形を呈し、検出面から遺構底部までの深さは0.53ｍを測る。弥生時代中期の所産と考えられる甕が出土している。

３　出土遺物

表３　遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Ａランク点数	Ｂランク点数	Ｃランク箱数
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、木製品		土師器10点、須恵器１点、瓦器13点、瓦質土器８点、木製品１点		
平安時代	須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器		須恵器１点、緑釉陶器１点、灰釉陶器２点		
長岡京期	須恵器		須恵器６点		
弥生時代	弥生土器、石器、石製品		弥生土器131点、石器10点、石製品５点		
合計		36箱	189点（７箱）	０点	29箱

＊コンテナ箱数は、整理段階で７箱増加した。

（１）東区第１－１面遺構出土遺物

東区第１面で検出した素掘り溝群から、瓦器を主体として長岡京期以降の遺物が少量ながら出土している。また、溝0100からは極少量ながら須恵器片が出土している。

〔素掘り溝群〕（図版20－１～８、図版35－１）

素掘り溝群からは12世紀後半から13世紀の所産と考えられる土師器片および瓦器片が主に出土している。これらに加えて灰釉陶器や緑釉陶器の小片、石器があるが、これらは上記の土器類と共伴していることから、混入品と考えられる。

１は溝0066から出土した土師器皿で、復元口径8.0㎝、器高1.5㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。底部外面から体部外面にオサエ、口縁部外面から底部内面に横方向のナデが施される。６Ａ段階に属すると考えられる。

２～４は瓦器椀である。２は溝0092から出土した。復元口径13.2㎝、残存器高4.2㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁部は直立気味で、口縁端部に沈線が施される。体部外面にオサエの痕跡が見られ、口縁部および口縁端部に横ナデ、内面にヘラミガキが施される。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。３は溝0085から出土した。復元口径13.2㎝、残存器高3.9㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾しながら外方へ立ち上がり、口縁端部に沈線が施される。体部外面下半にオサエの痕跡が見られ、上半にヘラミガキ、口縁部に横ナデ、内面にはヘラミガキが施される。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。４は溝0085から出土した。底部のみ残存している。底径4.6㎝、残存器高1.0㎝を測り、焼成は良好である。底部外面は平坦で、三角形の断面形を呈する極低い高台が貼り付けられる。体部外面にはオサエの痕跡が残り、内面にヘラミガキ、１条の暗文が施される。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。

５～８は混入品と考えられる。５は溝0084から出土した灰釉陶器椀で、底部のみ残存している。復元底径6.6㎝、残存器高1.2㎝を測り、焼成は良好である。貼付け高台の端面は平坦で、台形の断面形を呈する。底部外面に回転ケズリ、内面にロクロナデが施される。10世紀末から11世紀初頭の所産と考えられる。６は溝0131から出土した灰釉陶器椀の底部で、復元底径9.6㎝、残存器高2.0㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、貼付け高台は比較的高く、端面は丸みを帯びる。底部外面に回転ケズリ、体部内外面にロクロナデが施される。11世紀初頭の所産と考えられる。７は溝0083から出土した緑釉陶器椀の底部で、復元底径7.0㎝、残存器高1.5㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に回転ケズリの痕跡が残り、高台は貼付けである。内面にはロクロナデの後に施釉される。８は粘板岩製の磨製有茎石鏃で、残存長4.3㎝、残存幅2.1㎝、厚さ0.3㎝を測る。

（２）東区第１－２面遺構出土遺物

〔溝〕

溝0100（図版20－９・10、図版35－２）

溝0100からは、僅少ではあるが須恵器小片が出土している。

９は蓋のつまみ部分と考えられる。つまみ部の最大径3.4㎝、残存器高1.6㎝を測る。10は杯Ａと考えられる。復元底径9.8㎝、残存器高2.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が内湾気味に外方へ向かって立ち上がる。体部外面および内面にロクロナデが施される。

（３）東区第３層出土遺物（図版20－11～18、図版36－１）

東区第１層からは、須恵器片に加え、下層からの混入品と考えられる石製品が出土している。

11～14は須恵器である。11は杯蓋の口縁部で、復元口径14.8㎝、残存器高1.3㎝を測り、焼成

は良好である。12は杯蓋の口縁部であるが、小片のため、口径復元はできなかった。残存器高は1.5㎝を測り、焼成は良好である。13は杯Ｂで、復元底径9.8㎝、残存器高1.8㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、外周部に高台が貼り付けられる。体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。体部内外面にロクロナデが施される。14は甕の口縁部で、復元口径17.8㎝、残存器高1.8㎝を測り、焼成は良好である。

15～18は石製品で、下層である第２面からの混入品と考えられる。15は粘板岩製の石包丁と考えられる。全長3.7㎝、残存幅6.6㎝、厚さ0.4㎝を測り、背側近くの２箇所に穿孔が施される。16～18はサヌカイト製の打製石鏃である。16は残存長3.5㎝、残存幅2.5㎝、厚さ0.6㎝を測る。17は全長3.0㎝、全幅2.4㎝、厚さ0.8㎝を測る。18は全長3.5㎝、全幅2.0㎝、厚さ0.5㎝を測る。

（４）東区第２面遺構出土遺物

第２面では、竪穴建物や土坑、溝状遺構、ピット群から弥生土器に加え少量の石器が出土している。

〔竪穴建物〕

竪穴建物0250（図版20－19～26、図版36－2）

弥生土器壺、甕、鉢、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期中葉から後葉の所産と考えられる。

19、20は壺と考えられる。19は広口壺の口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高3.0㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部は平坦面を形成し、下端を拡張する。内外面にナデが施され、端面下端に刻みが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。20は口縁部と考えられる。復元口径23.6㎝、残存器高6.0㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は頸部から外反して開き、更に屈曲してほぼ直立する。口縁端部は平坦面を成し、外方にやや肥厚する。内外面にヨコナデを施した後、外面に３条の凹線文を施文する。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

21～23は甕と考えられる。21は口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高5.2㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は屈曲して「く」の字状を呈し、口縁端部は丸みを帯びる。口縁部直下の外面にハケ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。22は口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高3.2㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部が上方に拡張され、内傾する。ヨコナデ、内面にハケが施される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。23は口縁部と考えられる。復元口径14.2㎝、残存器高4.5㎝を測り、焼成は良好である。体部は内傾し、口縁部が外反して開く。口縁端部は上方に拡張されて内傾する。体部外面にハケ、口縁部にヨコナデが施される。体部内面は摩滅しており、調整は不明瞭である。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

24は鉢と考えられる。復元口径38.8㎝、残存器高5.9㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立する。口縁端部は平坦面を成し、内方に拡張される。体部内外面にハケ、口縁部内外面にヨコナデが施され、口縁端部直下の外面に３条の凹線文、その直下に刺

突文が２帯施文される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

25、26は壺あるいは甕の底部と考えられる。25は復元底径4.0㎝、残存器高3.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にケズリ、内面にナデおよびオサエが施される。26は復元底径12.0㎝、残存器高3.1㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は外反気味に外方へ向かって立ち上がる。底部外面および内面にナデが施されるが、体部外面の調整は不明瞭である。

竪穴建物0251（図版20－27～32、図版37－１）

弥生土器壺、甕、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期中葉から後葉の所産と考えられる。

27～29は壺と考えられる。27は受口状口縁を有する壺の口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高3.0㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は直立し、端部は平坦面を形成する。内外面にヨコナデが施される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。28は短頸壺の口縁部と考えられる。復元口径17.0㎝、残存器高6.5㎝を測り、焼成はやや軟質である。頸部がやや内傾しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立して口縁端部は平坦面を成す。頸部内外面の調整は不明瞭で、口縁部にヨコナデの後に２条の凹線文を施す。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。29は広口壺の口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高3.0㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部が上下に拡張されて平坦面を成す。外面にハケのちヨコナデ、端部および内面にヨコナデが施され、端面は無文であるが、口縁部内面に刺突文が４帯施される。山城Ⅲ－２様式に属すると考えられる。

30、31は甕と考えられる。30は口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高3.3㎝を測り、焼成は良好である。口縁端面は平坦面を形成し、上下に拡張される。内外面にハケ、口縁端面に列点文が施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。31は口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高2.6㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部が上下に拡張されて平坦面を成す。内外面にヨコナデ、端面に凹線文が２条施される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

32は弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径6.6㎝、残存器高2.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が外反気味に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面下端部にヨコナデが施されるが、上部および内面は調整が不明瞭である。

竪穴建物0252（図版21－33～39、図版37－２）

弥生土器甕、鉢、底部、石製品と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期後葉の所産と考えられる。

33～36は甕と考えられる。33は口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高2.6㎝を測り、焼成はやや軟質である。口縁端部が上下に拡張されて平坦面を成す。内外面、

端面共にヨコナデが施されるが、無文である。34は口縁部と考えられる。復元口径15.0㎝、残存器高3.4㎝を測り、焼成は良好である。屈曲してほぼ直立する口縁部が受け口状を呈する。口縁部直下の外面に縦方向のハケ、口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、口縁部外面に櫛描波状文が施される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。35は復元口径18.0㎝、残存器高7.9㎝を測り、焼成は良好である。内傾する体部から口縁部が強く屈曲して外方へ開き、口縁端部は平坦面を成して内傾する。体部内面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、端面に凹線文が２条施される。また、口縁部直下の体部に穿孔が施される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。36は復元口径15.0㎝、残存器高4.9㎝を測り、焼成は良好である。体部が口縁に向かって内湾し、口縁直下で屈曲して口縁は外方へ開く。体部外面にタタキ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

37は鉢の口縁部と考えられる。復元口径25.4㎝、残存器高4.2㎝を測り、焼成はやや軟質である。口縁部は内湾気味であるがほぼ直立し、口縁端部が平坦面を成してやや内傾する。口縁端部付近の内外面にヨコナデ、内面にナデが施され、端部直下に３条の凹線文が施文される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

38は壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径4.6㎝、残存器高2.2㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面および内面にナデが施されるが、体部外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。

39はサヌカイト製の打製石鏃である。残存長2.5㎝、全幅2.0㎝、厚さ0.5㎝を測る。

竪穴建物0253（図版21－40～51、図版38－1）

弥生土器高杯、甕、鉢、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期後葉の所産と考えられる。

40～42は高杯と考えられる。40は水平口縁高杯の杯部と考えられるが、口縁端部を欠損している。残存器高6.4㎝を測り、焼成は良好である。杯部は内湾気味に上方へ向かって開き、比較的深い椀形状を呈する。口縁内突帯は明確に突出し、断面形は三角形である。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。41は脚部と考えられる。復元底径7.6㎝、残存器高5.9㎝を測り、焼成はやや軟質である。脚裾部に穿孔が施され、内外面とも摩滅しており、調整が不明瞭である。42は脚柱部と考えられる。脚柱部径4.4㎝、残存器高8.1㎝を測り、焼成は良好である。脚裾部および杯部を欠損しており、脚柱部は中空である。外面にミガキ、脚柱部内面にナデ、杯部内面にナデを施す。山城Ⅳ様式か。

43、44は甕と考えられる。43は口縁部と考えられる。復元口径33.8㎝、残存器高3.3㎝を測り、焼成はやや軟質である。口縁端部が上下に拡張されて平坦面を成し、やや内傾する。内外面にヨコナデが施され、端面には３条の凹線文が施文される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。44は口縁部と考えられる。復元口径16.4㎝、残存器高2.1㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は外反して開き、口縁端部が下へ拡張されて平坦面を成し、やや内傾する。内外面にヨコナデ、端面下端部に刻みが施される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

45、46は鉢と考えられる。45は口縁部と考えられるが、小片のため口径復元はできなかった。残存器高3.7㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は直線的に開き、口縁端部直下に３条の凹線文を施す。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。46は口縁部と考えられるが、小片のため口径復元はできなかった。残存器高3.8㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を内方に拡張して平坦面を成す。内外面にヨコナデが施され、外面に４条の凹線文が施文される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

47～51は壺あるいは甕の底部と考えられる。47は復元底径9.0㎝、残存器高5.1㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面を成し、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面および体部外面にナデが施され、内面にはオサエの痕跡が残る。48は復元底径3.4㎝、残存器高4.6㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が内湾気味に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデが施される。体部内外面は摩滅のため、調整が不明瞭である。49は底径3.7㎝、残存器高2.2㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面を成し、体部は内湾気味に外方へ向かって立ち上がる。底部にナデ、体部外面にハケが施される。内面は摩滅しており、調整が不明瞭である。50は復元底径4.0㎝、残存器高2.8㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや凸面を成し、体部は外反しながら外方へ向かって立ち上がる。底部外面および内面にナデが施される。体部外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。51は底径4.6㎝、残存器高3.8㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が外反気味に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にタタキが施される。内面は摩滅しており、調整が不明瞭である。

〔土坑〕

土坑0258（図版21－52・53、図版38－２）

弥生土器高杯、壺と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

52は高杯の脚部あるいは蓋と考えられ、端部が残存している。復元底径12.6㎝、残存器高2.3㎝を測り、焼成はやや軟質である。裾端部は平坦面を成す。内面にナデ、端面にヨコナデが施される。外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。裾近くに穿孔が施される。

53は壺の口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高2.7㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部は平坦面を成し、下方に拡張される。内外面ともハケ、ヨコナデが施される。端面には櫛描波状文、端面下端に刻みが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

土坑0277（図版21－54～61、図版38－２）

弥生土器壺、甕、底部、石器と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期中葉から後葉の所産と考えられる。

54、55は壺と考えられる。54は広口壺の口縁部と考えられる。復元口径27.6㎝、残存器高6.5㎝を測り、焼成は良好である。頸部から外反して開き、口縁端部は平坦面を成し、下部に拡張される。

口縁直下の頸部外面に縦方向の板ナデ、口縁部内外面にヨコナデ、頸部内面にナデが施される。頸部外面に６条の櫛描直線文、口縁端面下端に刺突文、端面に櫛描波状文、端面上端に刻み、口縁部内面に櫛描波状文を施文する。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。55は壺の底部と考えられる。底径4.2㎝、残存器高7.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面を成し、体部は外反気味に立ち上がり、直線的に外方へ向けて伸びる。底部外面にナデ、体部内外面にハケが施される。

56～58は甕と考えられる。56、57は同一個体の可能性があるが、接点がなく接合できなかったため、個別で図化を行った。56は復元口径19.0㎝、残存器高15.3㎝、57は底径5.5㎝、残存器高15.5㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は外反して開き、口縁端部は平坦面を成す。底部はやや凹面を成し、体部は外反気味に外方へ向けて立ち上がり、内湾しながら上方へ伸びる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面に縦方向のハケ、口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面に横方向のナデ、体部内面にナデが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。58は上げ底状になる甕の底部と考えられる。底径7.3㎝、残存器高9.4㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面を成し、体部は外反気味に外方へ向けて立ち上がる。底部外面の凹部にナデ、台部外面にヨコナデ、体部外面にハケ、体部内面にハケ後ナデが施され、底部外周に木の葉状の圧痕が残る。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

59、60は壺あるいは甕の底部と考えられる。59は底径7.5㎝、残存器高8.7㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや凸面を成し、体部は内湾気味に外方へ向かって立ち上がる。内外面ともに摩滅しており、調整は不明瞭である。60は底径4.6㎝、残存器高7.2㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや凹面を成し、体部は外反気味に立ち上がり、内湾しながら上方へ伸びる。底部外面にナデが施される。体部内外面とも摩滅しており、調整は不明瞭である。

61は粘板岩製の石包丁と考えられる。残存長3.4㎝、残存幅8.0㎝、厚さ0.7㎝を測り、刃部の一部が残存している。残存部の上端近くに穿孔が２箇所残存している。

土坑0284（図版22－62～69、図版39－１）

弥生土器壺、甕、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

62、63は壺と考えられる。62は広口壺と考えられる。復元口径22.8㎝、残存器高8.6㎝を測り、焼成は良好である。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は平坦面を形成する。口縁端面は下方にやや拡張されている。口縁部はヨコナデの後、口縁端面に櫛描波状文、下端部に刻みが施される。頸部外面は口縁部直下に縦方向のハケが施され、それよりも下はナデの後に櫛描直線文が施文される。櫛描直線文は３帯施されており、上の２帯が９条、残る１帯は７条である。山城Ⅲ－２様式に属すると考えられる。63は口縁部と考えられる。復元口径26.8㎝、残存器高4.3㎝を測り、焼成は良好である。口縁部が外反して開き、端部は平坦面を成し、下部を拡張する。外面に縦方向の板ナデ、端部にヨコナデ、内面にナデ、口縁端面の下端部に刻みが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

64、65は甕と考えられる。64は復元口径19.7㎝、残存器高8.3㎝で、焼成は良好である。体部は口縁部に向かって直線的に内傾し、口縁直下でほぼ直立する。口縁部は外反して外方へ開き、端部は平坦面を形成する。体部内外面は調整が不明瞭で、口縁部外面にヨコナデ、内面にハケが施される。体部は無文であるが、口縁部は端面下端に刻みが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。65は体部下半から底部が残存している。底径7.1㎝、残存器高12.8㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや凹面を成し、体部は外反気味に外方へ向けて立ち上がり、内湾しながら上方へ伸びる。底部外面および体部内外面にナデが施され、体部外面の下端部外面にオサエの痕跡が残る。

66～69は壺あるいは甕の底部と考えられる。66は復元底径4.8㎝、残存器高3.1㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや丸みを帯び、体部が外反気味に立ち上がり、直線的に上方へ伸びる。底部外面にナデが施され、内面にオサエの痕跡が残るが、体部外面は調整が不明瞭である。67は復元底径9.6㎝、残存器高3.0㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデが施されるが、体部外面の調整は不明瞭である。内面にはナデが施される。68は復元底径6.0㎝、残存器高4.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にハケ、内面にナデが施される。69は底径5.8㎝、残存器高4.4㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は外反して直線的に外方へ向けて立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にハケ、体部内面にナデが施される。

土坑0672（図版22－70・71、図版39－2）

弥生土器鉢、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期後葉の所産と考えられる。

70は鉢と考えられる。復元口径22.1㎝、残存器高4.4㎝を測り、焼成は良好である。体部から口縁にかけてほぼ直立し、口縁端部は平坦面を成す。口縁端部にヨコナデ、口縁部内外面および体部内外面にミガキを施す。口縁端部直下に１条、体部下半に３条の凹線文を施文する。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

71は壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径5.5㎝、残存器高4.8㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は外反しながら外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部内外面にハケが施される。

土坑0688（図版22－72・73、図版39－2）

弥生土器高杯、底部と考えられる遺物が出土している。

72は高杯の脚柱部と考えられる。復元径4.2㎝、残存器高8.0㎝を測り、焼成は良好である。外面に板ナデが施される。

73は壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径7.0㎝、残存器高7.1㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直上に立ち上がり、外反して外方へ伸びる。底部外面にナデ、体部内外面にハケが施される。

その他の土坑（図版22－74～79）

74は土坑0265から出土した。弥生土器鉢と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高4.8㎝を測り、焼成は良好である。体部が内湾気味に斜め上方に立ち上がり、屈曲して口縁部はほぼ直立し、口縁端部は平坦面を成す。内外面にヨコナデ、口縁部と体部の屈曲部外面に２条の凹線文が施される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

75は土坑0293から出土した。弥生土器甕と考えられる。体部上半から口縁部が残存しており、復元口径31.8㎝、残存器高13.4㎝を測り、焼成はやや軟質である。体部は内湾しながら上方に伸び、口縁部で外反して口縁端部は平坦に成形される。体部外面にハケ、口縁部外面から端面にヨコナデ、口縁部内面にハケが施される。体部内面は摩滅しており、調整が不明瞭である。山城Ⅲ－１様式に属すると考えられる。

76は土坑0260から出土した。弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる。底径5.2㎝、残存器高4.5㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面を成し、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にハケ、内面にナデが施される。

77は土坑0268から出土した。弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径9.2㎝、残存器高2.1㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が外反気味に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面に縦方向のハケ、内面にナデが施される。

78は土坑0298から出土した。弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる。底径6.2㎝、残存器高2.9㎝を測り、焼成は良好である。底部は中央部がやや窪み、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕が認められ、体部背面に縦方向のハケ、内面にナデが施される。

79は土坑0658から出土した。粘板岩製の石包丁である。残存長4.5㎝、残存幅8.3㎝、厚さ0.6㎝を測る。

〔ピット〕（図版22－80～88、図版23－89～95、図版40－１）

ピット群からは弥生土器の小片に加え石製品が少量出土しているが、図化できたものは多くない。

80はピット0604から出土した。高杯脚部と考えられる。脚柱部の直径4.2㎝、残存器高7.3㎝を測り、焼成は良好である。内面にナデ、外面下部にナデ、上部にハケが施される。81はピット0582から出土した。長頸壺の口縁部と考えられる。口径9.0㎝、残存器高13.2㎝を測り、焼成はやや軟質である。頸部は直線的に外方へ向かって立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。口縁部内外面にヨコナデが施される。頸部の内外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。山城Ⅴ様式か。82はピット0684から出土した。壺の口縁部と考えられる。復元口径12.3㎝、残存器高4.5㎝を測り、焼成は良好である。頸部で外反して外に開き、口縁端部は平坦面を成す。口縁部にヨコナデが施される。頸部内外面は摩滅しており、調整は不明瞭である。山城Ⅳ様式か。83はピット0689から出土した。壺の口縁部と考えられる。復元口径26.0㎝、残存器高9.8㎝を測り、焼成はやや軟質である。頸部が外反して開き、屈曲して口縁部が直立し、口縁端部は平坦面を成す。口縁部内外面にヨコナデ、端面の外端部に刻みを施す。頸部内外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。山城Ⅳ様式

に属すると考えられる。84はピット0686から出土した。壺と考えられる。復元底径5.2㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや凹面を成し、体部は外反気味に外方へ向けて立ち上がり、内湾しながら上方へ伸びる。底部外面にナデ、体部外面にハケが施される。体部内面は摩滅しており、調整は不明瞭である。85はピット0150から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径10.0㎝、残存器高4.7㎝を測る。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。内外面共に摩滅が激しく、調整は不明。86はピット0333から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径4.6㎝、残存器高2.4㎝を測り、焼成はやや軟質である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部内外面にナデが施される。底部中央に穿孔が施される。87はピット0439から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径5.8㎝、残存器高4.6㎝を測り、焼成は良好である。底部は中央部がやや窪み、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にオサエ、体部内外面にハケが施される。88はピット0450から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径8.0㎝、残存器高3.5㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部内外面にハケが施される。89はピット0609から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径7.2㎝、残存器高2.6㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にオサエ後ナデ、体部内外面にナデが施される。90はピット0623から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径6.8㎝、残存器高5.9㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は外反気味に外方へ向かって立ち上がり、やや内湾しながら上方へ伸びる。底部外面にナデ、体部内外面にハケが施される。91はピット0669から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径7.0㎝、残存器高4.1㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや凹面を成し、体部は外反しながら立ち上がり、底部外面および体部内面にナデが施されるが、体部外面は摩滅しており、調整は不明瞭である。92はピット0684から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。底径3.7㎝、残存器高4.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は凸面を成し、体部は直上に向かって立ち上がり、外反して外方へ伸びる。底部外面にナデ、体部内外面にハケが施される。

93、94は砥石と考えられる。93はピット0167から出土した。チャート製で、幅4.2㎝、残存長5.7㎝、厚さ1.3㎝を測り、表裏両面に使用痕跡を確認することができる。94はピット0208から出土した。砂岩製で、幅3.5㎝、全長7.1㎝、厚さ2.4㎝を測り、表裏面および両側面に使用痕跡が認められる。

95はピット0167から出土したサヌカイト製の打製石鏃である。残存長3.9㎝、幅1.9㎝、厚さ0.6㎝を測る。

〔溝状遺構〕

溝状遺構0269（図版23－96～101、図版40－2）

弥生土器高杯、壺、甕、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期後葉の所産と考えられる。

96は水平口縁高杯の杯部と考えられる。復元口径20.2㎝、残存器高6.4㎝を測り、焼成は良好である。椀状を呈する杯部が直線的に外方へ開き、口縁部で外反して水平に外方へ伸びる。口縁端部は下に垂下して平坦面を成し、口縁部内面の突帯は明確に突出する。口縁部内外面にヨコナデを施すが、杯部内外面の調整は摩滅しており、不明瞭である。山城Ⅳ－１様式に属すると考えられる。

97は有段状口縁の広口壺と考えられる。復元口径16.6㎝、残存器高4.0㎝を測り、焼成は良好である。体部は口縁部直下で外反して開き、屈曲して口縁部が直立する。口縁部直下の体部外面にハケ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施され、口縁部外面下半に列点文が施文される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

98、99は甕と考えられる。98は復元口径14.0㎝、残存器高9.8㎝を測り、焼成は良好である。体部が口縁に向かって内湾し、口縁直下で屈曲して口縁は外方へ開く。体部外面にタタキ、口縁部内外面にヨコナデが施され、体部内面にオサエの痕跡が残る。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。99は口縁部と考えられる。復元口径16.0㎝、残存器高4.7㎝を測り、焼成は良好である。内傾する体部から屈曲して口縁部が開き、口縁端部は下方に拡張されて平坦面を成す。口縁部内外面にヨコナデが施される。体部内外面は摩滅しており、調整は不明瞭である。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

100は壺あるいは甕の口縁部と考えられる。口縁端部が上下に拡張されて平坦面をなし、３条の凹線文が施される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

101は壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径6.0㎝、残存器高2.8㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が外反気味に外方へ向けて立ち上がる。内面にナデが施されるが、外面は摩滅の為、調整が不明瞭である。

溝状遺構0279（図版23－102、図版40－２）

102は無頸壺と考えられる。体部は内傾して直線的に伸び、口縁部が外方へ肥厚する。体部内外面にナデ、口縁部内外面にヨコナデが施される。体部に櫛描簾状文が３帯施文される。口縁部直下の１帯が８条、その下の２帯目が８条、３帯目が７条である。また、口縁部直下には櫛描簾状文を施文後に穿孔が二箇所施される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

〔流路状遺構〕

流路状遺構0648（図版23－103～111、図版41－１）

弥生土器器台、高杯、壺、甕、鉢、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代後期の所産と考えられる。

103は器台と考えられる。残存器高4.1㎝を測り、焼成は良好である。内面中央部に穿孔、内面にナデが施され、屈曲部外面にオサエの痕跡が認められるが、外面は摩滅しており、調整は不明瞭である。山城Ⅴ様式か。

104は高杯の杯部と考えられる。復元口径25.4㎝、残存器高3.7㎝を測り、焼成は良好である。体

部が直線的に斜め上方へ伸び、口縁部で屈曲し、外反しながら開く。内外面共にミガキが施される。山城Ｖ様式に属すると考えられる。

105は受口状口縁の広口壺と考えられる。復元口径13.1㎝、残存器高6.0㎝を測り、焼成は良好である。頸部が外反しながら開き、屈曲して口縁部は直立する。頸部外面にハケ後ヨコナデ、口縁部内外面にヨコナデ、内面に横方向のナデが施される。山城Ｖ様式か。

106、107は甕と考えられる。106は復元口径13.6㎝、残存器高5.8㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾し、屈曲して口縁部が開く。体部外面にハケ、口縁部外面にオサエ、口縁部内面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。107は復元口径18.0㎝、残存器高5.4㎝を測り、焼成はやや軟質である。内湾気味の体部から外反し、更に屈曲して口縁部がほぼ直立し、受け口状の口縁を呈する。体部外面にハケ、口縁部直下の外面にハケ後ヨコナデ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデ、口縁部下半に櫛描刺突文が施される。近江系甕の模倣品と考えられる。山城Ｖ様式に属すると考えられる。

108は鉢と考えられる。復元口径14.8㎝、残存器高4.9㎝を測り、焼成は良好である。内湾する体部から外反し、更に屈曲して口縁部がほぼ直立し、受口状の口縁を呈する。体部下半にケズリ、口縁部内外面にヨコナデが施される。体部内面は摩滅しており、調整が不明瞭である。口縁下半部に列点文、口縁直下の体部外面に３条の直線文、直線文帯の下に列点文が施される。山城Ｖ様式に属すると考えられるが、近江からの搬入品の可能性がある。

109～111は壺あるいは甕の底部と考えられる。109は底径4.7㎝、残存器高3.4㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面をなし、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にミガキ、内面にハケ後板ナデが施される。110は底径3.0㎝、残存器高3.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面の下部にハケが施され、内面にオサエの痕跡が残る。111は底部が平坦で、体部は外反しながら立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にタタキが施され、内面にオサエの痕跡が残る。

（５）西区第１面遺構出土遺物

〔素掘り溝群〕（図版24－112～124、図版41－２）

素掘り溝群からは12世紀後半から13世紀の所産と考えられる土師器片、瓦器片および瓦質土器片が主に出土している。

112～115は土師器皿Ｎと考えられる。112は溝0715から出土した。小片のため口径復元はできなかった。残存器高1.7㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は外方へ開き、口縁端部は尖り気味に成形され、断面形は三角形を呈する。体部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。113は溝0715から出土した。復元口径6.9㎝、器高1.2㎝を測り、焼成は良好である。底部は丸みを帯び、口縁部は外方へ開き、口縁端部は尖り気味に成形される。底部から体部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。114は溝0730から出土した。復元口径8.5㎝、

器高1.5㎝を測り、焼成は良好である。底部は丸みを帯び、口縁部は外方へ開き、口縁端部は丸みを帯びる。底部から体部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。115は溝0725から出土した。復元口径8.3㎝、残存器高1.6㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は外方に開き、口縁端部は尖り気味に成形される。口縁部にヨコナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。

116は溝0712から出土した。須恵器鉢の口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高4.1㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部が肥厚して玉縁状を呈する。10世紀の所産と考えられる。瓦器片と共伴することから、混入品と考えられる。

117～120は瓦器である。117は溝0746から出土した。皿と考えられる。復元口径9.8㎝、器高1.8㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がり、口縁が外反して口縁端部は尖り気味に成形される。内外面にナデが施される。13世紀の所産と考えられる。118～120は椀と考えられる。118は溝0715から出土した。口縁部を欠損しており、復元底径5.4㎝、残存器高2.8㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、断面三角形を呈する低い高台が貼り付けられる。体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がる。体部内面にミガキが施されるが、体部外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。119は溝0716から出土した。復元口径14.1㎝、底径5.0㎝、器高4.2㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや丸みを帯び、断面三角形を呈する低い高台が貼り付けられる。体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がり、口縁端部に沈線が施される。体部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部にヨコナデが施される。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。120は溝0742から出土した。復元口径14.1㎝、残存器高4.2㎝を測るが、底部を欠損しているため、底径は不明である。焼成は良好である。体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がり、口縁端部に沈線が施される。体部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部にヨコナデ、内面にミガキが施される。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。

121～124は瓦質土器の羽釜と考えられる。121は溝0725から出土した。復元口径15.0㎝、残存器高3.8㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は内傾し、口縁端部は平坦面を成す。口縁端部から下に1.5㎝の位置に鍔が貼り付けられる。口縁部にヨコナデ、体部内面にハケが施され、鍔より下の体部外面にオサエの痕跡が残る。13世紀の所産と考えられる。122は溝0742から出土した。復元口径28.0㎝、残存器高8.6㎝を測り、焼成は良好である。口縁部が内傾し、口縁端部は平坦面を成す。口縁端部から下に2.0㎝の位置に鍔が貼り付けられ、体部内面にナデが施される。体部外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。13世紀の所産と考えられる。123は溝0715から出土した。復元口径16.4㎝、残存器高4.9㎝を測り、焼成は良好である。口縁部が内方に内傾し、口縁端部は平坦面を成す。口縁端部から1.5㎝下に幅の狭い鍔を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部内面にナデが施され、鍔貼付け部より下の体部外面にオサエの痕跡が残る。13世紀の所産と考えられる。124は溝0715から出土した。三足羽釜の脚部と考えられる。残存器高11.4㎝を測り、焼成は良好である。13世紀の所産と考えられる。

〔井戸〕

井戸0883（図版24－125～138、図版42－1）

12世紀後半から13世紀の所産と考えられる土師器片、須恵器片、瓦器片、瓦質土器片および下駄が主に出土している。

125～128は土師器皿Nと考えられる。125は復元口径8.4㎝、残存器高1.3㎝を測り、焼成は良好である。底部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。126は復元口径8.3㎝、残存器高1.3㎝を測り、焼成は良好である。底部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。127は復元口径9.0㎝、残存器高1.5㎝を測り、焼成は良好である。底部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。128は復元口径14.1㎝、残存器高2.6㎝を測り、焼成は良好である。体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に成形され、断面は三角形を呈する。底部外面から体部にオサエの痕跡が残り、口縁部外面から底部内面にヨコナデが施される。６Ｂ段階に属すると考えられる。

129は東播系須恵器鉢の口縁部と考えられる。復元口径31.0㎝、残存器高4.5㎝を測り、焼成は良好である。13世紀の所産と考えられる。

130～135は瓦器で、130～132は皿、133～135は椀と考えられる。130は復元口径8.4㎝、残存器高1.6㎝を測り、焼成は良好である。底部はほぼ平坦で、口縁部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。口縁端部は尖り気味に成形され、三角形に近い断面形を呈する。底部にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面にナデおよび暗文が施される。131は口径9.1㎝、器高1.9㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、口縁端部は尖り気味に成形される。底部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、底部内面に暗文が施される。132は口径9.7㎝、器高2.6㎝を測り、焼成は良好である。底部は丸みを帯び、口縁部はやや外反し、口縁端部は丸みを帯びる。底部外面にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、暗文が施される。

133は復元口径14.5㎝、復元器高4.7㎝を測り、焼成は良好である。底部に断面三角形を呈する低い高台が貼り付けられ、体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部に沈線が施される。内面には粗いミガキが施され、底部内面に暗文が認められる。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。134は復元口径14.7㎝、器高4.7㎝を測り、焼成は良好である。底部に断面三角形を呈する低い高台が貼り付けられ、体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部に沈線が施される。体部外面の下半にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面に粗いミガキが施され、底部内面に暗文が認められる。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。135は復元口径14.0㎝、器高4.5㎝を測り、焼成は良好である。底部に断面三角形を呈する低い高台が貼り付けられ、体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部に沈線が施される。体部外面の下半にオサエの痕跡が残り、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面に粗いミガキが施され、底部内面に暗文が認められる。楠葉型Ⅲ段階に属すると考えられる。

136、137は瓦質土器の羽釜と考えられる。136は復元口径21.0㎝、残存器高6.9㎝を測り、焼成はやや軟質である。体部はほぼ直立し、口縁部が内傾して口縁端部は平坦面を成す。口縁端部から1.5㎝下に鍔が貼り付けられる。体部外面にナデが施されるが、オサエの痕跡が残り、口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面から体部内面に横方向のハケが施される。13世紀の所産と考えられる。137は三足羽釜の脚部と考えられる。残存長17.9㎝を測り、焼成は良好である。

138は木製品で、下駄と考えられる。残存幅7.7㎝、残存長8.5㎝を測る。中央部近くに穿孔が一箇所認められ、裏面には歯が残存している。穿孔は前坪を通すための眼と考えられる。

〔土坑〕

土坑1180（図版24－139～141）

12世紀後半から13世紀の所産と考えられる土師器片および瓦質土器片が主に出土している。

139は土師器皿Ｎと考えられる。復元口径9.0㎝、器高1.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がる。口縁端部は尖り気味に成形され、断面は三角形を呈する。体部外面にオサエの痕跡が認められ、口縁部にヨコナデ、体部内面にナデが施される。６Ａ～Ｂ段階に属すると考えられる。

140、141は瓦質土器羽釜と考えられる。140は復元口径19.8㎝、残存器高5.7㎝を測り、焼成はやや軟質である。体部は内湾しながら口縁部へ続き、口縁端部は平坦面を成してやや内傾し、口縁端部から1.4㎝下に鍔が貼り付けられる。体部外面に鍔部より下にオサエの痕跡が残り、口縁部にヨコナデが施される。内面は摩滅しており、調整が不明瞭である。13世紀前半の所産と考えられる。141は三足羽釜の脚部と考えられる。残存長21.5㎝を測り、焼成は良好である。

（６）西区第２面遺構出土遺物

土坑およびピットから弥生土器を主体として、石器が少量出土している。

〔土坑〕

土坑0782（図版25－142～145、図版42－２）

弥生土器壺、甕、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

142は壺の頸部～口縁部と考えられる。復元口径18.5㎝、残存器高9.1㎝を測り、焼成は良好である。頸部は直立し、口縁部が外反して開く。口縁端部は平坦面を成し、外方に拡張される。頸部外面にナデ、口縁部にヨコナデ、ナデ、頸部内面にハケが施される。頸部外面に７条の櫛描直線文が４帯、口縁端面の上端および下端に刻みが施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

143、144は甕と考えられる。143は復元口径21.4㎝、残存器高6.7㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾し、口縁部が屈曲して開き、口縁端部は平坦面を成す。体部外面に縦方向のハケ、口縁部内面に横方向のハケを施す。口縁端面に櫛描波状文および刻みを施文する。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。144は復元口径21.0㎝、残存器高17.0㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾し、

口縁部は外反して開き、口縁端部は丸みを帯びる。体部外面から口縁部外面に縦方向のハケ、口縁端部にヨコナデ、口縁部内面に横方向のハケ、体部内面に板ナデが施される。口縁端部に刻み、体部上端に７条の櫛描直線文３帯と５条の櫛描波状文２帯が交互に施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられるが、近江からの搬入品の可能性がある。

145は壺あるいは甕の底部と考えられる。底部は凹面を成し、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデおよびケズリ、体部外面に縦方向のハケが施される。

土坑0790（図版25－146～149、図版43－１）

弥生土器壺、甕と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

146～148は壺と考えられる。146は口縁部と考えられる。復元口径19.4㎝、残存器高2.4㎝を測り、焼成は良好である。外反して開き、口縁端部は平坦面を成し、下に拡張される。内面に横方向のナデが施され、端面に櫛描波状文が施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。147は口縁部と考えられる。外反して開き、口縁端部は平坦面を成し、下に拡張される。外面にハケが施されるが、全体的に摩滅しており、調整は不明瞭である。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。148は口縁部と考えられる。復元口径19.7㎝、残存器高5.4㎝を測り、焼成は良好である。口縁部が外反して開き、端部は平坦面を成す。口縁端部にヨコナデが施されるが、口縁部内外面は摩滅しており、調整は不明瞭である。口縁端面下端に刻みが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

149は甕と考えられる。復元口径21.8㎝、残存器高8.7㎝を測り、焼成は良好である。体部は内傾し、口縁部が外反して開き、口縁端部は平坦面を成してやや内傾する。体部外面から口縁部外面に縦方向のハケ、口縁部端面にヨコナデ、口縁部内面に横方向のハケが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

土坑0800（図版25－150・151、図版43－２）

弥生土器壺、甕と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

150は壺の口縁部と考えられる。復元口径11.2㎝、残存器高6.3㎝を測り、焼成は良好である。体部は内傾し、口縁部が外反して口縁端部は平坦面を成す。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面に横方向のハケ、体部内面にナデ、口縁端面に櫛描波状文が施される。体部外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

151は甕の口縁部と考えられる。復元口径13.2㎝、残存器高4.8㎝を測り、焼成は良好である。体部が内傾し、口縁部は屈曲して開き、口縁端部は平坦面を成す。内外面共に摩滅しており、調整は不明瞭である。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

土坑0918（図版25－152～155、図版43－2）

弥生土器壺、甕、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

152、153は壺と考えられる。152は復元口径27.7㎝、残存器高7.2㎝を測り、焼成は良好である。口縁部が頸部から外反して開き、口縁端部は凹面を成し、下に拡張される。頸部外面から口縁部外面に縦方向のハケ、口縁端部にヨコナデ、口縁部内面に横方向のハケ、頸部内面にミガキが施される。口縁端面に櫛描波状文、端面下端に刻み、頸部外面に４条の櫛描直線文１帯、１条の箆描直線文、７条の櫛描直線文が施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。153は頸部と考えられる。残存器高17.9㎝を測り、焼成は良好である。内傾する体部から直立し、口縁部が外反して開く。内外面とも摩滅しており、調整は不明瞭である。外面には、口縁部側から櫛描波状文１帯、７条の櫛描直線文が３帯、櫛描波状文が１帯、７条の櫛描波状文が３帯、櫛描波状文が１帯施文される。

154は甕と考えられる。復元口径18.6㎝、残存器高7.4㎝を測り、焼成は良好である。体部は内傾し、口縁部が外反して口縁端部は平坦面を成し、やや内傾する。体部外面から口縁部外面に縦方向のハケ、口縁部内面に横方向のハケが施され、体部内面にオサエの痕跡が残る。口縁部端面に刻みが施文され、２箇所に指頭圧痕が認められる。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

155は壺あるいは甕の底部と考えられる。底径5.8㎝、残存器高5.6㎝を測り、焼成は良好である。底部は上げ底状を呈し、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。体部外面に縦方向のハケが施され、底部外面、体部外面下端部、底部内面にオサエの痕跡が残る。

土坑0960（図版25－156～158、図版44－1）

弥生土器高杯、壺、甕と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

156は高杯の脚部と考えられる。復元底径11.1㎝、残存器高6.9㎝を測り、焼成は良好である。脚裾端部は平坦面を成し、２条の沈線が施される。

157は壺の口縁部と考えられる。復元口径24.0㎝、残存器高5.0㎝を測り、焼成は良好である。外反して外方に開き、口縁端部は平坦面を成し、上下方に拡張され、内傾する。口縁部外面に縦方向のハケが施されるが、内面は摩滅しており、調整が不明瞭である。口縁端面に凹線文５条、その上に縦線文、口縁部内面に櫛描波状文が施文される。山城Ⅳ－２様式に属すると考えられる。

158は甕と考えられる。復元口径13.8㎝、残存器高9.6㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾し、強く屈曲して口縁部は外方へ開き、口縁端部は丸みを帯びる。体部外面にハケ後タタキ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にハケが施される。

土坑1069（図版26－159～165、図版44－1）

弥生土器壺、甕、底部、石器と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

159、160は壺と考えられる。159は口縁部と考えられる。小片のため口径復元はできなかった。残存器高2.6㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部は平坦面を成し、下方に拡張される。また、口縁内面に一箇所穿孔が残存している。外面および端面にヨコナデ、内面に横方向のハケが施され、端面に箆描斜格子文が施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。160は口縁部と考えられる。復元口径24.0㎝、残存器高9.1㎝を測り、焼成はやや軟質である。頸部は直線的に外方へ向かって伸び、口縁部が外反して開き、口縁端部は平坦面を成す。頸部外面にナデ、口縁端部にヨコナデ、口縁部内面にナデ、頸部内面に横方向のハケが施される。口縁端面下端部に刻み、頸部に６条の櫛描直線文が３帯施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

161、162は甕と考えられる。161は復元口径13.4㎝、残存器高5.9㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾し、口縁部が外反して開き、口縁端部は平坦面を成す。体部外面に縦方向のハケ、体部内面に板ナデが施され、口縁部端面に刻み、口縁部内面に櫛描波状文１帯が施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。162は復元口径23.6㎝、残存器高14.8㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾気味で、口縁部は外反して口縁端部は丸みを帯びる。体部外面から口縁部外面に縦方向のハケ、口縁部内面に横方向のハケ、体部内面にナデが施され、口縁端部に刻みが施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

163、164は壺あるいは甕の底部と考えられる。163は底径6.5㎝、残存器高4.8㎝を測り、焼成は良好である。底部はやや丸みを帯び、中央に穿孔が施され、体部が外反気味に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面に縦方向のハケが施され、内面にオサエの痕跡が残る。底部中央の穿孔は焼成後に施されたものと考えられ、甑への転用の可能性がある。164は復元底径6.5㎝、残存器高4.9㎝を測り、焼成は良好である。底部は上げ底状を成し、体部は外反して外方へ向かって立ち上がる。体部外面下端部にヨコナデ、体部外面に縦方向のハケが施され、内面にオサエの痕跡が残る。

165は粘板岩製の石包丁と考えられる。残存長3.8㎝、残存幅8.9㎝、厚さ0.5㎝を測り、上端部近くに穿孔が１箇所に施される。

土坑1076（図版26－166～172、図版44－２）

弥生土器高杯、壺、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

166は高杯の脚部と考えられる。残存器高6.2㎝を測り、焼成は良好である。脚部外面から杯部外面にミガキ、杯部内面にナデが施される。

167、168は壺と考えられる。167は復元口径20.4㎝、残存器高12.3㎝を測り、焼成は良好である。頸部から口縁部が外反して開き、口縁端部は平坦面を成し、下方に拡張される。外面にナデ、口縁部にヨコナデ、口縁部内面に横方向のハケ、頸部内面にナデ、頸部に７条の櫛描直線文が４帯施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。168は口縁部と考えられる。復元口径18.3㎝、残存器高5.4㎝を測り、焼成は良好である。頸部は直線的に外方に向かって伸び、屈曲して口縁部が開く。口

縁端部は平坦面を成し、下方に拡張され、内傾する。頸部外面に縦方向のハケ、口縁部内外面にヨコナデ、頸部内面にナデが施され、口縁端面には篦描斜格子文が施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

169～172は壺あるいは甕の底部と考えられる。169は復元底径7.0㎝、残存器高8.2㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面を成し、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面にミガキ、体部内面に縦方向の板ナデが施される。170は底径8.1㎝、残存器高4.5㎝を測り、焼成は良好である。底部は凹面を成し、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面にハケ後ナデ、体部内面にナデが施される。171は底径5.8㎝、残存器高8.4㎝を測り、焼成はやや軟質である。底部はほぼ平坦で、中央に穿孔が施され、体部が直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面に縦方向のハケ、体部内面にナデが施される。底部中央の穿孔は焼成後に施されたものと考えられ、甑への転用の可能性がある。172は底径6.3㎝、残存器高3.7㎝を測り、焼成は良好である。底部は上げ底状を成し、体部は外反して直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にケズリ、体部外面に縦方向のハケが施される。

土坑1223（図版26－173～176、図版45－1）

弥生土器壺、甕、底部と考えられる遺物が出土している。これらの遺物は弥生時代中期の所産と考えられる。

173は壺の口縁部と考えられる。残存器高2.2㎝を測り、焼成は良好である。口縁端部が平坦面を成し、下に拡張される。口縁部内外面にハケ、口縁端部にヨコナデが施される。口縁端部の下端に刻み、端面に櫛描波状文が施文される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

174は甕の口縁部と考えられる。復元口径26.6㎝、残存器高5.4㎝を測り、焼成は良好である。体部は内傾し、口縁部は外反して口縁端部は平坦面を成し、やや内傾する。口縁部外面に縦方向のハケ、口縁端部にヨコナデ、口縁部内面にハケが施される。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

175、176は壺あるいは甕の底部と考えられる。175は底径4.8㎝、残存器高3.4㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部が外反気味に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面にミガキ、体部内面にハケが施される。176は底径6.0㎝、残存器高10.5㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は外反しながら外方へ向かって立ち上がり、内湾気味に上方へ伸びる。底部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面にハケ、体部内面にナデが施される。

その他の土坑（図版27－177～183）

177は土坑0872から出土した。弥生土器高杯と考えられる。残存器高7.4㎝を測り、焼成は良好である。脚部外面および杯部内面にミガキが施される。

178は土坑0950から出土した。弥生土器広口壺と考えられる。復元口径17.2㎝、残存器高8.8㎝を測り、焼成は良好である。口縁部は外反して開き、屈曲してほぼ直立する。口縁端部は平坦面を

成し、左右に拡張される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

179は土坑0848から出土した。弥生土器甕の口縁部と考えられる。復元口径16.2㎝、残存器高6.2㎝を測り、焼成は良好である。体部は内傾し、口縁部は外反して口縁端部は平坦面を成し、下方に拡張される。口縁部にヨコナデが施される。体部内外面は摩滅しており、調整が不明瞭である。山城Ⅲ様式に属すると考えられる。

180は土坑0846から出土した。弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる。底径6.0㎝、残存器高4.7㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面に縦方向のハケが施され、内面にオサエの痕跡が残る。

181は土坑0909から出土した。弥生土器壺あるいは甕の底部と考えられる。底径4.8㎝、残存器高6.3㎝を測り、焼成は良好である。底部は上げ底状を成し、体部は外反しながら立ち上がり、外方へ向かって開く。底部外面にナデ、体部外面に縦方向のハケ、体部内面に横方向のハケが施される。

182は土坑0845から出土した砂岩製の石製品で、全長8.0㎝、残存幅4.0㎝、厚さ2.1㎝を測る。欠損しているため半円形を呈するが、元来円形であった可能性が考えられる。中央に穿孔が施されており、環状石斧の可能性が考えられる。

183は土坑0859から出土した粘板岩製の石製品で、残存長9.3㎝、残存幅3.6㎝、厚さ0.8㎝を測る。磨製石剣の可能性が考えられる。

〔ピット〕（図版27－184～189、図版45－２）

ピット群からは弥生土器の小片に加え石製品が少量出土しているが、図化できたものは多くない。

184はピット0772から出土した。鉢と考えられる。復元口径18.8㎝、残存器高5.3㎝を測り、焼成は良好である。体部は直線的に外方へ開き、口縁部は屈曲して内湾気味に内方へ伸び、口縁端部は平坦面を成す。体部内外面にミガキ、口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にナデが施され、口縁部外面に３条の凹線文が施文される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

185はピット1197から出土した。甕と考えられる。復元口径27.0㎝、残存器高16.9㎝を測り、焼成は良好である。体部は内湾し、強く屈曲して口縁部が開き、口縁端部は凹面を成し、上下方に拡張される。体部外面にタタキの後に縦方向のハケ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面に縦方向のハケが施される。山城Ⅳ様式に属すると考えられる。

186はピット0991から出土した。壺の底部と考えられる。復元底径4.6㎝、残存器高8.0㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は内湾しながら外方へ向かって立ち上がる。底部外面にナデ、体部外面にハケ、体部内面にナデが施される。

187はピット1039から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径5.6㎝、残存器高4.6㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底部外面に木の葉状の圧痕、体部下端部にオサエの痕跡が残る。体部内外面は調整が不明瞭である。

188はピット1143から出土した。壺あるいは甕の底部と考えられる。復元底径5.9㎝、残存器高3.8㎝を測り、焼成は良好である。底部は平坦で、体部は直線的に外方へ向かって立ち上がる。底

部外面に木の葉状の圧痕が残り、体部外面にハケ、体部内面にナデが施される。

189はピット0932から出土した粘板岩製の石製品である。全長5.8㎝、全幅19.7㎝、厚さ1.0㎝を測る。石包丁の未製品である可能性が考えられる。

第Ⅳ章　まとめ

当調査地は、長岡京跡左京域および弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である東土川遺跡の範囲内に位置する。また、設定した調査区の東端部に長岡京東四坊坊間西小路西側溝の推定ラインが位置し、それ以西は左京一条四坊四町の宅地であったことが想定された。これらのことから、上記の西側溝および当該期の建物等の遺構に加え、東土川遺跡に属する遺構の存在が予想された。結果として、東四坊坊間西小路西側溝および東土川遺跡に帰属する竪穴建物、土坑、ピット等を確認した。以下、今回の調査成果について纏める。

〔長岡京期以降の遺構〕

東西両調査区において、長岡京期以降の遺構として、東西および南北方向の素掘り溝を多数検出した。これらの溝群は耕作に伴う遺構と思われる。南北方向の溝は、ほぼ正方位に乗るものと東に約 8.0°振るものとに分類される。切り合い関係から東西方向のものが最も先行し、次に斜行する南北溝、ほぼ正方位に走る南北溝が最も新しいと考えられる。また、これらの溝の埋土には、主に鎌倉時代の所産と考えられる瓦器片が包含されていたが、それらの遺物に大幅な時期差は認められなかった。以上のことから、今回検出した三方向の溝には切り合い関係から時期差が認められるものの、その差は然程大きいものではなく、鎌倉時代の範囲に収まる可能性が考えられる。また、上記の素掘り溝群に加えて、西区において井戸と想定される遺構（井戸 0883）を検出した。掘方内に井戸枠は残存しておらず、その痕跡や裏込め土も認められなかったことから、素掘りの井戸であった可能性が高い。遺構埋土には、瓦器片を主とした遺物が包含されており、その帰属時期は素掘り溝から出土した遺物と同時期と考えられる。

上記の素掘り溝は調査区全体に分布していることから、当調査地周辺一帯は遅くとも鎌倉時代には耕作地になっていたものと推定される。井戸 0883 についても、耕作に関わる井戸であった可能性が考えられる。また、今回の調査においては室町時代以降の遺物を伴う遺構は検出されず、東区西半以西においては近現代耕作土直下が当調査地における基盤層になることから、室町時代以降の遺構面および遺構は削平を受けている可能性がある。

〔長岡京期の遺構〕

東区の東端から西へ約 4.7 mの地点で、調査区を南北に縦断する溝 0100 を検出した。当遺構は検出長 16.4 m、幅 0.84 m、深さ 0.05 ～ 0.12 mを測り、その中軸線の座標は北端部で Y=-25,370.936、南端部で Y=-25,371.128 に位置する。この軸線は、当調査地から約 300 m南に位置する名神高速桂川パーキングエリア建設に伴い、1993 年度から 1997 年度にかけて実施された調査において検出された東四坊坊間西小路西側溝の北延長線上から西約 0.4 mに位置する。また、上記調査において検出された東四坊坊間西小路西側溝の規模は幅 0.8 mを測り、今回検出された溝 0100 はこれに近似する規模を有する。これらのことから、名神高速桂川パーキングエリア建設に伴う調査時の検出位置か

ら推定される、当調査地における東四坊坊間西小路西側溝推定位置からは西に約 0.4 mの差が認められるものの、今回調査で検出した溝 0100 が東四坊坊間西小路西側溝に相当する可能性が高いと考えられる。

〔弥生時代の遺構〕（図版 28）

調査区東部で竪穴建物 4 棟（竪穴建物 0250、0251、0252、0253）に加えて土坑、溝状遺構、多数のピットを検出した。これらの遺構のうち竪穴建物は東端部に集中し、土坑は土坑 0277 や 0688 など竪穴建物の近辺に位置する遺構もあるが、多くは調査区西半（西区全域）に分布する。ピット群については、竪穴建物が検出された東端部で最も密度が低く、中央部（東区西半、西区東半）ではやや密度が高く、西部で最も高密度に分布する。

竪穴建物 0250 および 0251 から弥生時代中期中葉から後葉、0252 および 0253 から弥生時代中期後葉の所産と見られる土器が出土している。これらのことから、前者の 2 遺構が後者の 2 遺構に先行して中期中葉に構築され、中期後葉まで両遺構が継続して機能したことが想定される。一方、廃絶時期については、埋土中に中期後葉以降の遺物が包含されていなかったことから、当該期に求められると考えられる。竪穴建物 0252 および 0253 については、埋土中に中期後葉の遺物が包含されていたことから、当該期中に構築され、廃絶したものと考えられる。以上のことから、今回の調査で検出された竪穴建物について、0250 および 0251 は弥生時代中期中葉から後葉、0252 および 0253 は弥生時代中期後葉に存続時期を比定することができると考えられる。但し、これらの遺構に切り合い関係が認められなかったため、竪穴建物 0250 と 0251、0250 および 0251 と 0252 および 0253、0252 と 0253 の前後関係は判然とせず、弥生時代中期後葉において 4 棟の竪穴建物が併存していた可能性も考えられる。土坑は、その多くが調査区西半（西区）に位置し、竪穴建物の周辺では少なくなる。遺構埋土中に包含される遺物が弥生時代中期中葉の所産と考えられるもの主体であることから、竪穴建物に先行すると考えられる。ピット群については、多くが直径 0.2 ～ 0.3 m前後の円形平面を持つものであるが、それらよりも規模が大きいものも検出されている。中でも、とりわけ大型の遺構がピット 0189、0285、0294、0297 である。これらの遺構は平面規模、検出面から遺構底部までの深さ共に掘立柱建物の柱穴である可能性が考えられる。これらのうちピット 0189、0285、0297 を一纏まりと看做すことは不可能ではないが、その場合、ピット 0189 と 0297 間の柱間が 6.8 m、ピット 0189 と 0285 間の柱間が 6.7 mを測る。ピット 0297 の南に位置する土坑 0298 をピットと看做して加えたとしても、ピット 0298 と 0297 間の柱間は 1.3 mであるが、ピット 0189 と 0298 間の柱間が 5.5 mを測る。これらの柱間間距離は柱間一間分としては広すぎると考えられ、また、これらを掘立柱建物として復元しようとした場合、北東角の柱穴に当たる遺構としてピット 0294 あるいは土坑 0293 を想定することになるが、ピット 0298 と 0189 間、ピット 0189 と 0285 間、ピット 0285 とピット 0294 あるいは土坑 0293 間に同規模の柱穴遺構を見出し難い。加えて、ピット 0294 あるいは土坑 0293 とピット 0285 間の軸線はピット 0189 と 0297 間の軸線に対して北で西に大きく振れる。これらのことから、上記の遺構群を掘立柱建物として

復元し難いと思われる。一方で、大半を占める小規模なピット群については、平地式建物に伴う遺構である可能性も残存する。また、これらピット群の埋土に包含されていた遺物は弥生時代中期後葉の所産と見られるものが主体を成すことから、ピット群の存続期間は竪穴建物と並行していた可能性が考えられる。これらのことから、土坑群は主に調査区西部、竪穴建物は東端部、ピット群が竪穴建物以西に分布し、土坑群は主に中期中葉、竪穴建物群およびピット群は主に中期後葉にその機能時期を比定することが可能と考えられる。また、各遺構の分布および想定される機能時期から、当調査地における土地利用のあり方について、中期中葉には西半が主であり、後葉に至って東へと拡がっていったことが想定される。また、ピット群が竪穴建物の周辺は密度が低く、調査区西半に多く分布することから、竪穴建物が営まれた区域とその他の区域が区分されていたことが窺われる。

以上のように今調査では、竪穴建物を中心とした東土川遺跡に帰属すると考えられる遺構をはじめ、長岡京東四坊坊間西小路西側溝と考えられる溝 0100、鎌倉時代の遺物を埋土中に包含する素掘り溝および井戸を検出した。弥生時代中期の遺物を埋土中に包含する竪穴建物を検出したことは、東土川遺跡内での既往調査では未検出であることと併せ、当該遺跡における居住域の一端を知りうる成果であると考えられる。また、長岡京東四坊坊間西小路西側溝を検出したことにより、条坊の施工が今回調査地周辺にまで及んでいたことが明らかになったが、当該遺構以外の長岡京期の遺構は確認されなかったため、長岡京左京一条四坊四町の土地利用の在り方については不明確である。平安時代の遺構は検出されなかったが、中世の素掘り溝埋土中に極僅かではあるものの、当該期の所産と考えられる遺物が包含されていたことから、何らかの土地利用が為されていた可能性が考えられる。加えて鎌倉時代の遺物を包含する素掘り溝を検出したことは、遅くとも当該期には今回調査地が耕作地として利用されていたことを示唆する。また、室町時代以降の遺構や遺物が確認されなかったことは、鎌倉時代の遺構を検出した遺構面直上にまで近現代耕作土や盛土および撹乱が及んでいたことから、これらによって破壊されたことが考えられる。これらのことから、今調査では東土川遺跡内の居住域を検出するとともに、長岡京期から中世における調査地周辺の土地利用の在り方を知りうる成果を得ることができたと考えられる。

表４　遺物観察表

掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	厚(cm)	色調	備考
1	土師器	皿	東区	溝 0066	8.0	1.5			7.5YR8/3 浅黄橙	
2	瓦器	椀	東区	溝 0092	13.2	(4.2)			N5/ 灰	
3	瓦器	椀	東区	溝 0085	13.2	(3.9)			N3/ 暗灰	
4	瓦器	椀	東区	溝 0085		(1.0)	4.6		N4/ 灰	
5	灰釉陶器	椀	東区	溝 0084		(1.2)	6.6		N7/ 灰白	
6	灰釉陶器	椀	東区	溝 0131		(2.0)	9.6		N6/ 灰	
7	緑釉陶器	椀	東区	溝 0083		(1.5)	7.0		(釉)黄緑 (胎)N7/ 灰白	
8	石製品	石鏃	東区	溝 0083	長 (4.3)	幅 (2.1)		0.3		
9	須恵器	杯蓋	東区	溝 0100	3.4	(1.6)			10YR7/1 灰白	
10	須恵器	杯	東区	溝 0100		(2.3)	9.8		10YR8/2 灰白	
11	須恵器	杯蓋	東区	基盤層直上包含層	14.8	(1.3)			5Y5/1 灰	
12	須恵器	杯蓋	東区	基盤層直上包含層		(1.5)			N6/ 灰	
13	須恵器	杯	東区	基盤層直上包含層		(1.8)	9.8		N7/ 灰白	
14	須恵器	甕	東区	基盤層直上包含層	17.8	(1.8)			N7/ 灰白	
15	石製品	石包丁	東区	基盤層直上包含層	長 3.7	幅 (6.6)		0.4		
16	石製品	石鏃	東区	基盤層直上包含層	長 (3.5)	幅 (2.5)		0.6		
17	石製品	石鏃	東区	基盤層直上包含層	長 3.0	幅 2.4		0.8		
18	石製品	石鏃	東区	基盤層直上包含層	長 3.5	幅 2.0		0.5		
19	弥生土器	壺	東区	竪穴建物 0250 北西		(3.0)			7.5YR7/4 にぶい橙	
20	弥生土器	壺	東区	竪穴建物 0250 壁溝南東	23.6	(6.0)			5YR6/6 橙	
21	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0250 南東		(5.2)			7.5YR6/3 にぶい褐	
22	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0250 北西		(3.2)			10YR7/2 にぶい黄橙	
23	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0250 東西 sec	14.2	(4.5)			7.5YR7/4 にぶい橙	
24	弥生土器	鉢	東区	竪穴建物 0250 断割り	38.8	(5.9)			10YR7/2 にぶい橙	
25	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0250 北東		(3.3)	4.0		2.5Y3/1 黒褐	
26	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0250 北西		(3.1)	12.0		10YR8/3 浅黄橙	
27	弥生土器	壺	東区	竪穴建物 0251 北西		(3.0)			7.5YR6/4 にぶい橙	
28	弥生土器	壺	東区	竪穴建物 0251 北東	17.0	(6.5)			10YR7/4 にぶい黄橙	
29	弥生土器	壺	東区	竪穴建物 0251 北東		(3.0)			10YR6/2 灰黄褐	
30	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0251 北西		(3.3)			10YR7/3 にぶい黄橙	
31	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0251 北東		(2.6)			7.5YR7/4 にぶい橙	
32	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0251 北西		(2.3)	6.6		10YR5/2 灰黄褐	
33	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0252 中		(2.6)			7.5YR8/4 浅黄橙	
34	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0252 中	15.0	(3.4)			7.5YR7/3 にぶい橙	
35	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0252 中	18.0	(7.9)			10YR8/1 灰白	
36	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0252 南	15.0	(4.9)			7.5YR7/4 にぶい橙	
37	弥生土器	鉢	東区	竪穴建物 0252 中	25.4	(4.2)			10YR5/2 灰黄褐	
38	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0252 中		(2.2)	4.6		10YR7/3 にぶい黄橙	
39	石製品	石鏃	東区	竪穴建物 0252 北	長 (2.5)	幅 2.0		0.5		
40	弥生土器	水平口縁高杯	東区	竪穴建物 0253 南西		(6.4)			10YR7/3 にぶい黄橙	
41	弥生土器	高杯	東区	竪穴建物 0253 南西		(5.9)	7.6		(外)7.5YR8/6 浅黄橙 (内)2.5Y3/1 黒褐色	
42	弥生土器	高杯	東区	竪穴建物 0253 北西	4.4	(8.1)			7.5YR7/4 にぶい橙	
43	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0253 南西	33.8	(3.3)			5YR7/6 橙	
44	弥生土器	甕	東区	竪穴建物 0253 北西	16.4	(2.1)			10YR7/3 にぶい黄橙	
45	弥生土器	鉢	東区	竪穴建物 0253 北西		(3.7)			2.5YR6/4 にぶい橙	
46	弥生土器	鉢	東区	竪穴建物 0253 北西		(3.8)			10YR7/2 にぶい黄橙	
47	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0253 北東		(5.1)	9.0		10YR7/2 にぶい黄橙	
48	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0253 南東		(4.6)	3.4		7.5YR7/6 橙	
49	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0253 南東		(2.2)	3.7		10YR7/3 にぶい黄橙	

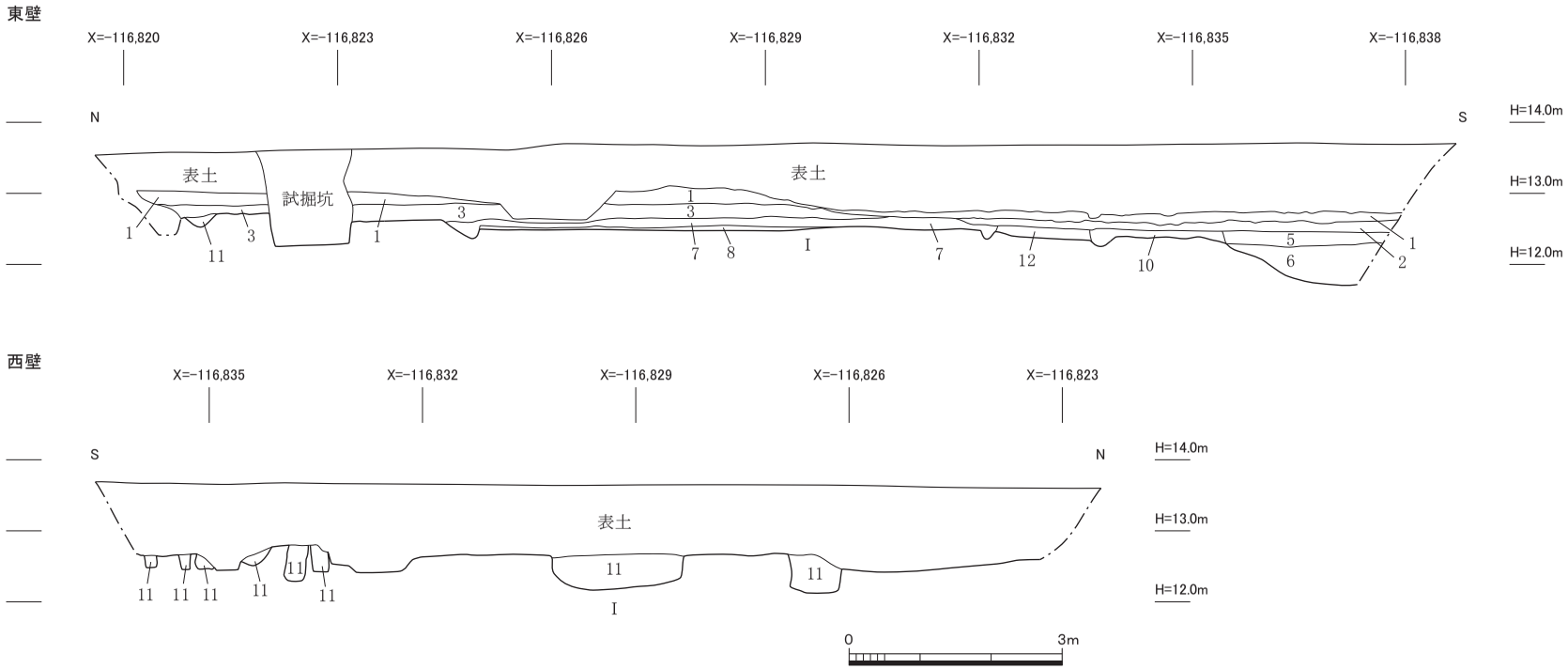
掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	厚(cm)	色調	備考
50	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0253 北西		(2.8)	4.0		7.5YR7/4 にぶい橙	
51	弥生土器	壺 or 甕	東区	竪穴建物 0253sec		(3.8)	4.6		7.5YR7/4 にぶい橙	
52	弥生土器	高杯	東区	土坑 0258		(2.3)	12.6		5YR7/4 にぶい橙	
53	弥生土器	壺	東区	土坑 0258		(2.7)			7.5YR8/3 浅黄橙	
54	弥生土器	壺	東区	土坑 0277	27.6	(6.5)			(内)5YR8/2 灰白 (外)7.5YR8/3 浅黄橙	
55	弥生土器	壺	東区	土坑 0277		(7.3)	4.2		7.5YR8/3 浅黄橙	
56	弥生土器	甕	東区	土坑 0277	19.0	(15.3)			10YR8/2 ～ 8/3 灰白～浅黄橙	
57	弥生土器	甕	東区	土坑 0277		(15.5)	5.5		10YR7/3 にぶい黄橙	
58	弥生土器	台付甕	東区	土坑 0277		(9.4)	7.3		(内)10YR7/2 にぶい黄橙 (外)10YR7/3 にぶい黄橙	
59	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0277		(8.7)	7.5		10YR8/2 灰白	
60	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0277		(7.2)	4.6		7.5YR7/4 にぶい橙	
61	石製品	石包丁	東区	土坑 0277	長 (3.4)	幅 (8.0)		0.7		
62	弥生土器	壺	東区	土坑 0284	22.8	(8.6)			10YR8/2 灰白	
63	弥生土器	壺	東区	土坑 0284	26.8	(4.3)			7.5YR8/2 灰白	
64	弥生土器	甕	東区	土坑 0284	19.7	(8.3)			7.5YR8/3 浅黄橙	
65	弥生土器	甕	東区	土坑 0284		(12.8)	7.1		10YR8/3 浅黄橙	
66	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0284		(3.1)	4.8		10YR4/1 褐灰	
67	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0284		(3.0)	9.6		10YR7/2 にぶい黄橙	
68	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0284		(4.3)	6.0		7.5YR にぶい橙	
69	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0284		(4.4)	5.8		(内)10YR8/2 灰白 (外)10YR6/2 灰黄褐	
70	弥生土器	鉢	東区	土坑 0672	22.1	(4.4)			7.5YR6/4 にぶい橙	
71	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0672		(4.8)	5.5		5YR6/6 橙	
72	弥生土器	高杯	東区	土坑 0688	4.2	(8.0)			10YR8/3 浅黄橙	
73	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0688		(7.1)	7.0		10YR8/3 浅黄橙	
74	弥生土器	鉢	東区	土坑 0265		(4.8)			7.5YR7/4 にぶい橙	
75	弥生土器	壺	東区	土坑 0293	31.8	(13.4)			7.5YR8/6 浅黄橙	
76	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0260		(4.5)	5.2		2.5Y8/2 灰白	
77	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0268		(2.1)	9.2		10YR8/1 灰白	
78	弥生土器	壺 or 甕	東区	土坑 0298		(2.9)	6.2		10YR8/3 浅黄橙	
79	石製品	石包丁	東区	土坑 0658	長 (4.5)	幅 (8.3)		0.6		
80	弥生土器	高杯	東区	ピット 0604	4.2	(7.3)			7.5YR7/4 にぶい橙	
81	弥生土器	壺	東区	ピット 0582	9.0	(13.2)			2.5Y7/1 灰白	
82	弥生土器	壺	東区	ピット 0684	12.3	(4.5)			7.5YR6/4 にぶい橙	
83	弥生土器	壺	東区	ピット 0689	26.0	(9.8)			7.5YR8/4 浅黄橙	
84	弥生土器	壺	東区	ピット 0686			5.2		(内)5YR7/6 橙 (外)7.5YR7/3 にぶい橙	
85	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0150		(4.7)	10.0		(内)7.5YR7/4 にぶい橙 (外)10YR7/2 にぶい黄橙	
86	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0333		(2.4)	4.6		(外)5YR7/6 橙 (内)N6/ 灰	
87	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0439		(4.6)	5.8		10YR6/2 灰黄褐	
88	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0450		(3.5)	8.0		10YR8/2 灰白	
89	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0609		(2.6)	7.2		10YR8/3 浅黄橙	
90	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0623		(5.9)	6.8		10YR8/2 灰白	
91	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0669		(4.1)	7.0		7.5YR7/6 橙	
92	弥生土器	壺 or 甕	東区	ピット 0684		(4.3)	3.7		7.5YR4/1 褐灰	
93	石製品	砥石	東区	ピット 0167	長 (5.7)	幅 4.2		1.3		
94	石製品	砥石	東区	ピット 0208	長 7.1	幅 3.5		2.4		
95	石製品	石鏃	東区	ピット 0167	長 (3.9)	幅 1.9		0.6		

掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	厚(cm)	色調	備考
96	弥生土器	水平口縁高杯	東区	溝 0269	20.2	(6.4)			5YR6/4 にぶい橙	
97	弥生土器	壺	東区	溝 0269	16.6	(4.0)			7.5YR8/3 浅黄橙	
98	弥生土器	甕	東区	溝 0269	14.0	(9.8)			10YR7/3 にぶい黄橙	
99	弥生土器	甕	東区	溝 0269sec	16.0	(4.7)			10YR8/1 灰白	
100	弥生土器	壺 or 甕	東区	溝 0269		(3.0)			5YR5/6 明赤褐	
101	弥生土器	壺 or 甕	東区	溝 0269		(2.8)	6.0		5YR6/6 橙	
102	弥生土器	壺	東区	溝 0279	14.2	(6.8)			7.5YR8/4 浅黄橙	
103	弥生土器	器台	東区	流路状遺構 0648		(4.1)			7.5YR7/6 橙	
104	弥生土器	高杯	東区	流路状遺構 0648	25.4	(3.7)			2.5Y8/2 灰白	
105	弥生土器	壺	東区	流路状遺構 0648	13.1	(6.0)			7.5YR8/1 ～ 8/2 灰白	
106	弥生土器	甕	東区	流路状遺構 0648	13.6	(5.8)			10YR8/2 灰白	
107	弥生土器	甕	東区	流路状遺構 0648	18.0	(5.4)			10YR8/2 灰白	
108	弥生土器	鉢	東区	流路状遺構 0648	14.8	(4.9)			10YR8/2 灰白	
109	弥生土器	壺 or 甕	東区	流路状遺構 0648		(3.4)	4.7		(外)2.5Y8/2 灰白 (内)N3/ 暗灰	
110	弥生土器	壺 or 甕	東区	流路状遺構 0648		(3.3)	3.0		(外)10YR8/1 灰白 (内)10YR4/1 褐灰	
111	弥生土器	壺 or 甕	東区	流路状遺構 0648		(3.5)	5.4		10YR5/1 褐灰	
112	土師器	皿	西区	溝 0715		(1.7)			10YR7/3	
113	土師器	皿	西区	溝 0715	6.9	1.2			7.5YR7/4 にぶい橙	
114	土師器	皿	西区	溝 0730	8.5	1.5			7.5YR8/4 浅黄橙	
115	土師器	皿	西区	溝 0725	8.3	(1.6)			N3/ 暗灰	
116	須恵器	鉢	西区	溝 0712		(4.1)			N7/ 灰白	
117	瓦器	皿	西区	溝 0746	9.8	1.8			N3/ 暗灰	
118	瓦器	椀	西区	溝 0715	5.4	(2.8)			2.5Y6/1 黄灰	
119	瓦器	椀	西区	溝 0716	14.1	4.2	5.0		2.5Y5/1 黄灰	
120	瓦器	椀	西区	溝 0742	14.1	(4.2)			N4/ 灰	
121	瓦質土器	羽釜	西区	溝 0725	15.0	(3.8)			N3/ 暗灰	
122	瓦質土器	羽釜	西区	溝 0742	28.0	(8.6)			N3/ 暗灰	
123	瓦質土器	羽釜	西区	溝 0715	16.4	(4.9)			10YR6/1 褐灰	
124	瓦質土器	羽釜	西区	溝 0715		(11.4)			10YR5/1 褐灰	
125	土師器	皿	西区	井戸 0883	8.4	(1.3)			7.5YR8/4 浅黄橙	
126	土師器	皿	西区	井戸 0883	8.3	(1.3)			10YR7/2 にぶい黄橙	
127	土師器	皿	西区	井戸 0883	9.0	(1.5)			2.5Y8/1 灰白	
128	土師器	皿	西区	井戸 0883	14.1	(2.6)			10YR8/2 灰白	
129	須恵器	鉢	西区	井戸 0883	31.0	(4.5)			N7/ 灰白	
130	瓦器	皿	西区	井戸 0883	8.4	(1.6)			N5/ 灰	
131	瓦器	皿	西区	井戸 0883	9.1	1.9			N5/ 灰	
132	瓦器	皿	西区	井戸 0883	9.7	2.6			N6/ 灰	
133	瓦器	椀	西区	井戸 0883	14.5	4.7			N4/ 灰	
134	瓦器	椀	西区	井戸 0883	14.7	4.7			N3/ 暗灰	
135	瓦器	椀	西区	井戸 0883	14.0	4.5			N5/ 灰	
136	瓦質土器	羽釜	西区	井戸 0883	21.0	(6.9)			N3/ 暗灰	
137	瓦質土器	羽釜	西区	井戸 0883	長 (17.9)				N3/ 暗灰	
138	木製品	下駄	西区	井戸 0883	長 (8.5)	幅 (7.7)				
139	土師器	皿	西区	土坑 1180	9.0	1.3			10YR8/1 ～ 8/2 灰白	
140	瓦質土器	羽釜	西区	土坑 1180	19.8	(5.7)			N3/ 暗灰	
141	瓦質土器	羽釜	西区	土坑 1180	長 (21.5)				N3/ 暗灰	
142	弥生土器	壺	西区	土坑 0782	18.5	(9.1)			10YR8/2 灰白	
143	弥生土器	甕	西区	土坑 0782	21.4	(6.7)			7.5YR7/6 橙	
144	弥生土器	甕	西区	土坑 0782	21.0	(17.0)			7.5YR7/4 にぶい橙	

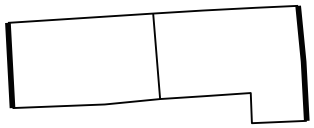
掲載No	器種	器形	地区	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	厚(cm)	色調	備考
145	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 0782		(5.3)	5.5		10YR7/3 にぶい黄橙	
146	弥生土器	壺	西区	土坑 0790	19.4	(2.4)			10YR8/3 浅黄橙	
147	弥生土器	壺	西区	土坑 0790	22.4	(3.1)			7.5YR8/2 灰白	
148	弥生土器	壺	西区	土坑 0790	19.7	(5.4)			10YR8/1 灰白	
149	弥生土器	甕	西区	土坑 0790	21.8	(8.7)			10YR8/3 浅黄橙	
150	弥生土器	壺	西区	土坑 0800	11.2	(6.3)			7.5YR7/4 にぶい橙	
151	弥生土器	甕	西区	土坑 0800	13.2	(4.8)			7.5YR6/4 にぶい橙	
152	弥生土器	壺	西区	土坑 0918	27.7	(7.2)			10YR6/2 灰黄褐	
153	弥生土器	壺	西区	土坑 0918		(17.9)			7.5YR8/2 灰白	
154	弥生土器	甕	西区	土坑 0918	18.6	(7.4)			7.5YR8/4 浅黄橙	
155	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 0918		(5.6)	5.8		10YR8/3 浅黄橙	
156	弥生土器	高杯	西区	土坑 0960		(6.9)	11.1		10YR7/2 にぶい黄橙	
157	弥生土器	壺	西区	土坑 0960	24.0	(5.0)			5YR7/3 にぶい橙	
158	弥生土器	甕	西区	土坑 0960	13.8	(9.6)			7.5YR7/4 にぶい橙	
159	弥生土器	壺	西区	土坑 1069		(2.6)			7.5YR8/4 浅黄橙	
160	弥生土器	壺	西区	土坑 1069	24.0	(9.1)			10YR8/1 灰白	
161	弥生土器	甕	西区	土坑 1069	13.4	(5.9)			7.5YR8/3 ～ 8/4 浅黄橙	
162	弥生土器	甕	西区	土坑 1069	23.6	(14.8)			2.5Y8/2 灰白	
163	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1069		(4.8)	6.5		10YR8/3 浅黄橙	
164	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1069		(4.9)	6.5		N3/ 暗灰	
165	石製品	石包丁	西区	土坑 1069	長 (3.8)	幅 (8.9)		0.5		
166	弥生土器	高杯	西区	土坑 1076		(6.2)			10YR7/2 にぶい黄橙	
167	弥生土器	壺	西区	土坑 1076	20.4	(12.3)			5YR7/6 橙	
168	弥生土器	壺	西区	土坑 1076	18.3	(5.4)			10YR8/2 灰白	
169	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1076		(8.2)	7.0		10YR8/2 灰白	
170	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1076		(4.5)	8.1		10YR8/3 浅黄橙	
171	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1076		(8.4)	5.8		10YR7/2 にぶい黄橙	
172	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1076		(3.7)	6.3		5YR8/4 淡橙	
173	弥生土器	壺	西区	土坑 1223		(2.2)			10YR8/3 浅黄橙	
174	弥生土器	甕	西区	土坑 1223	26.6	(5.4)			7.5YR8/4 浅黄橙	
175	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1223		(3.4)	4.8		10YR8/3 浅黄橙	
176	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 1223		(10.5)	6.0		7.5YR6/3 にぶい褐	
177	弥生土器	高杯	西区	土坑 0872		(7.4)			10YR7/3 にぶい黄橙	
178	弥生土器	壺	西区	土坑 0950	17.2	(8.8)			7.5YR7/2 明褐灰	
179	弥生土器	甕	西区	土坑 0848	16.2	(6.2)			10YR7/2 にぶい黄橙	
180	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 0846		(4.7)	6.0		5YR7/4 にぶい橙	
181	弥生土器	壺 or 甕	西区	土坑 0909		(6.3)	4.8		7.5YR8/2 灰白	
182	石製品		西区	土坑 0845	長 8.0	幅 (4.0)		2.1		
183	石製品	石剣	西区	土坑 0859	長 (9.3)	幅 (3.6)		0.8		
184	弥生土器	鉢	西区	ピット 0772	18.8	(5.3)			10YR6/2 灰黄褐	
185	弥生土器	甕	西区	ピット 1197	27.0	(16..9)			5YR7/4 にぶい橙	
186	弥生土器	壺	西区	ピット 0991		(8.0)	4.6		7.5YR6/6 橙	
187	弥生土器	壺 or 甕	西区	ピット 1039		(4.6)	5.6		7.5YR7/4 にぶい橙	
188	弥生土器	壺 or 甕	西区	ピット 1143		(3.8)	5.9		7.5YR7/4 にぶい橙	
189	石製品	石包丁未製品	西区	ピット 0932	長 5.8	幅 19.7		1.0		

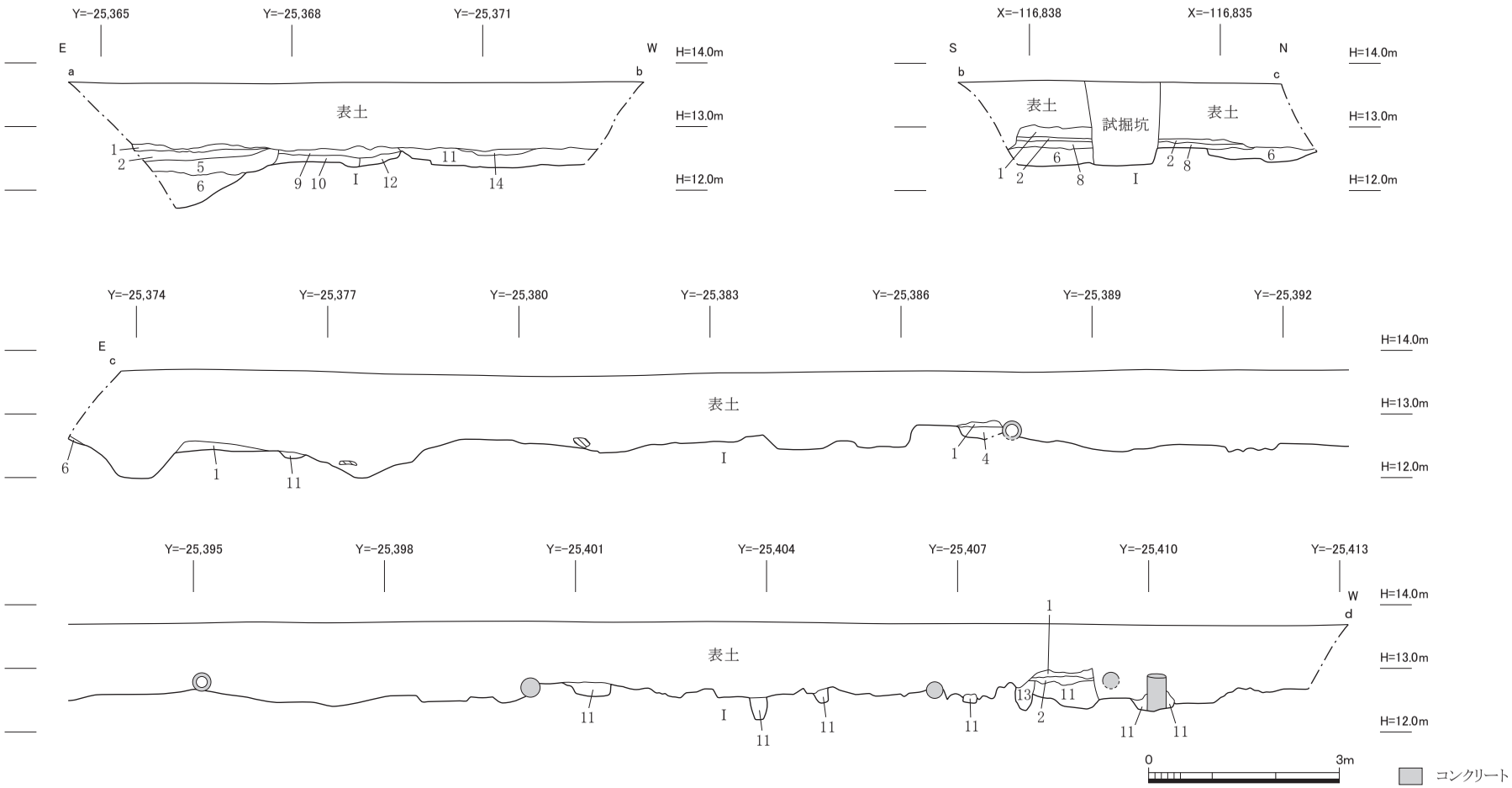
図　　版

調査区東壁、西壁土層断面図（1：100）

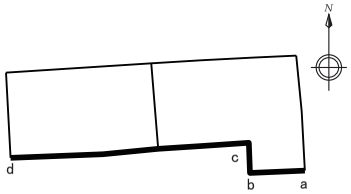


1　5BG4/1暗青灰色細粒砂［近現代耕作土(第1層)］
2　5Y6/2灰オリーブ色細粒砂［近現代耕作土(第2層)］
3　10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂［遺物包含層(第3層)］
5　5R3/1暗赤灰色極細～細粒砂
6　10YR2/2黒褐色細粒砂　小礫多量混　遺物含　［流路状遺構0648］
7　10YR3/1黒褐色極細粒砂［竪穴建物0252］
8　10YR3/1黒褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色極細粒砂ブロック混［竪穴建物0252貼床］
10　10YR3/1黒褐色極細粒砂［竪穴建物0253］
11　10YR3/1黒褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
12　10YR3/2黒褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
I　10YR6/6明黄褐色極細粒砂［基盤層］

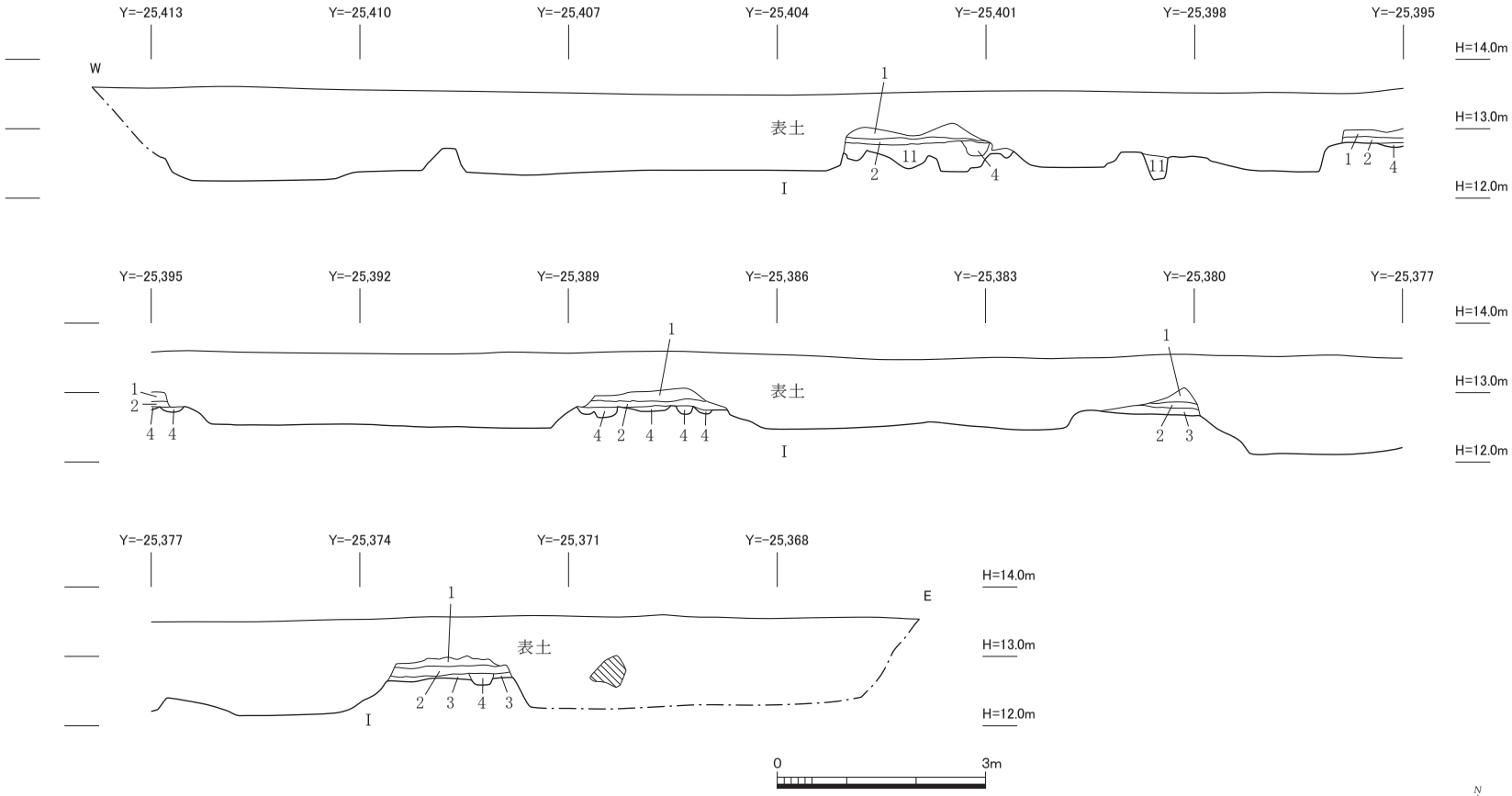




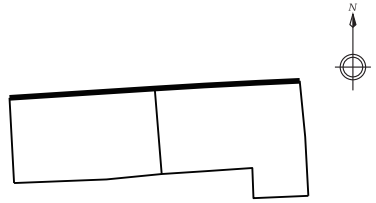
1　5BG4/1暗青灰色細粒砂 ［近現代耕作土(第1層)］
2　5Y6/2灰オリーブ色細粒砂 ［近現代耕作土(第2層)］
4　7.5YR6/1褐灰色極細粒砂 ［中世耕作溝］
5　5R3/1暗赤灰色極細～細粒砂 ］［流路状遺構0648］
6　10YR2/2黒褐色細粒砂　小礫多量混　遺物含 ］
8　10YR3/1黒褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色極細粒砂ブロック混 ［竪穴建物0252貼床］
9　10YR5/1褐灰色細粒砂　鉄分混
10　10YR3/1黒褐色極細粒砂 ［竪穴建物0253］
11　10YR3/1黒褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
12　10YR3/2黒褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
13　10YR3/3暗褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
14　10YR3/3暗褐色極細粒砂　鉄分・マンガン斑状に混　遺物含 ［溝0100］
I　10YR6/6明黄褐色極細粒砂 ［基盤層］



調査区南壁土層断面図（1：100）

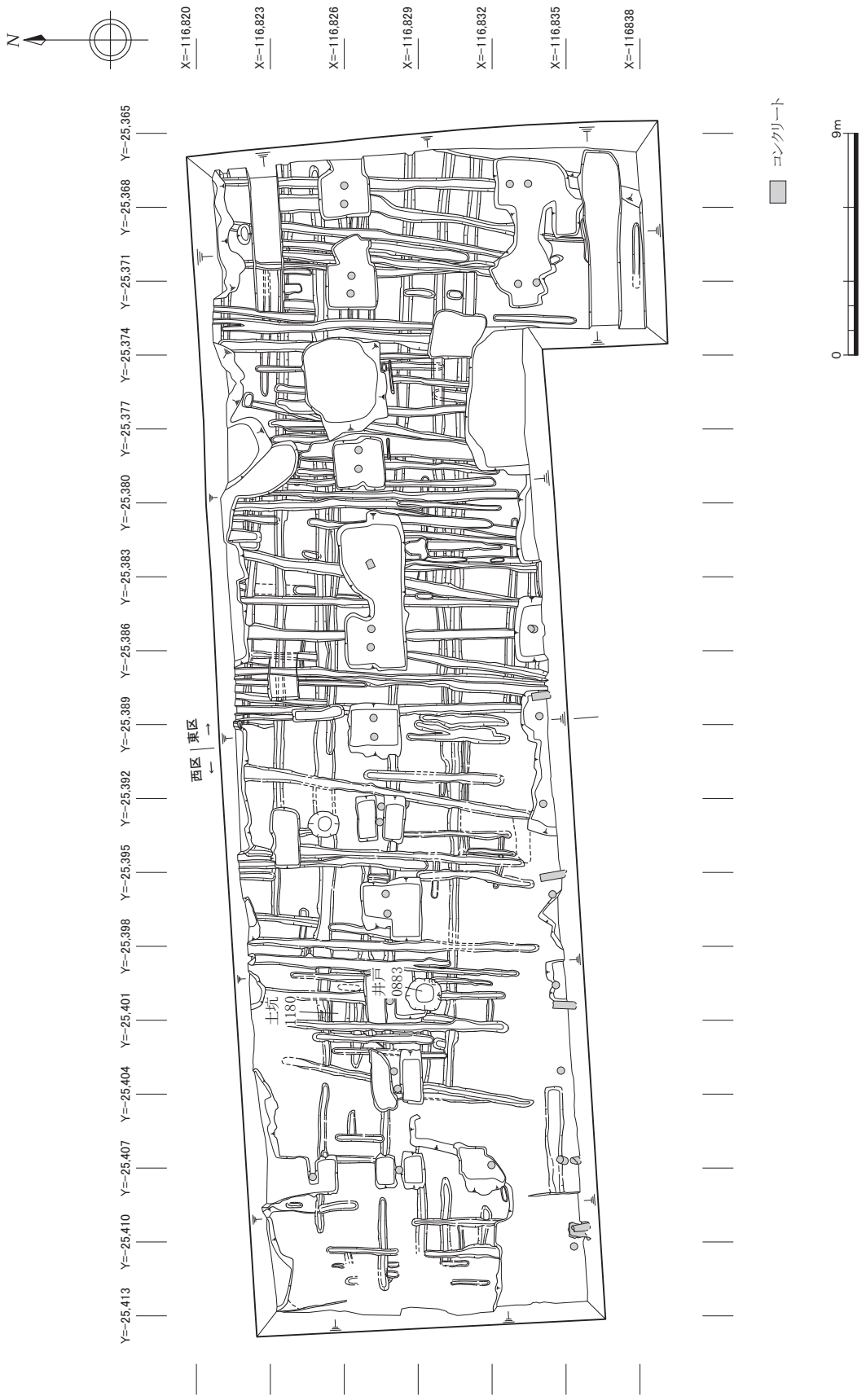


1　5BG4/1暗青灰色細粒砂［近現代耕作土(第1層)］
2　5Y6/2灰オリーブ色細粒砂［近現代耕作土(第2層)］
3　10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂［遺物包含層(第3層)］
4　7.5YR6/1褐灰色極細粒砂［中世耕作溝］
11　10YR3/1黒褐色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
I　10YR6/6明黄褐色極細粒砂［基盤層］



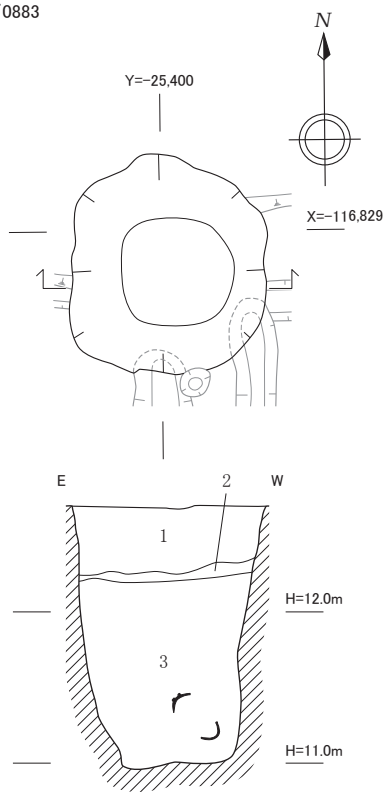
調査区北壁土層断面図（1：100）

図版3



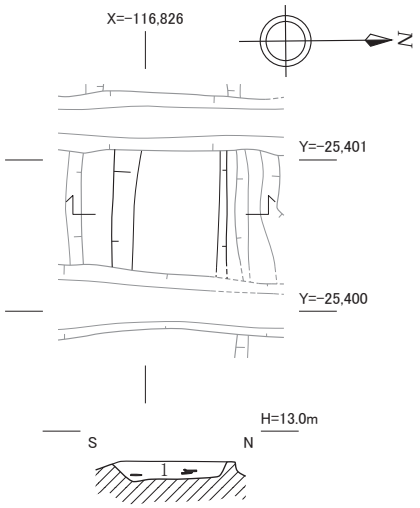
第１－１面　調査区全体平面図（１：250）

井戸0883



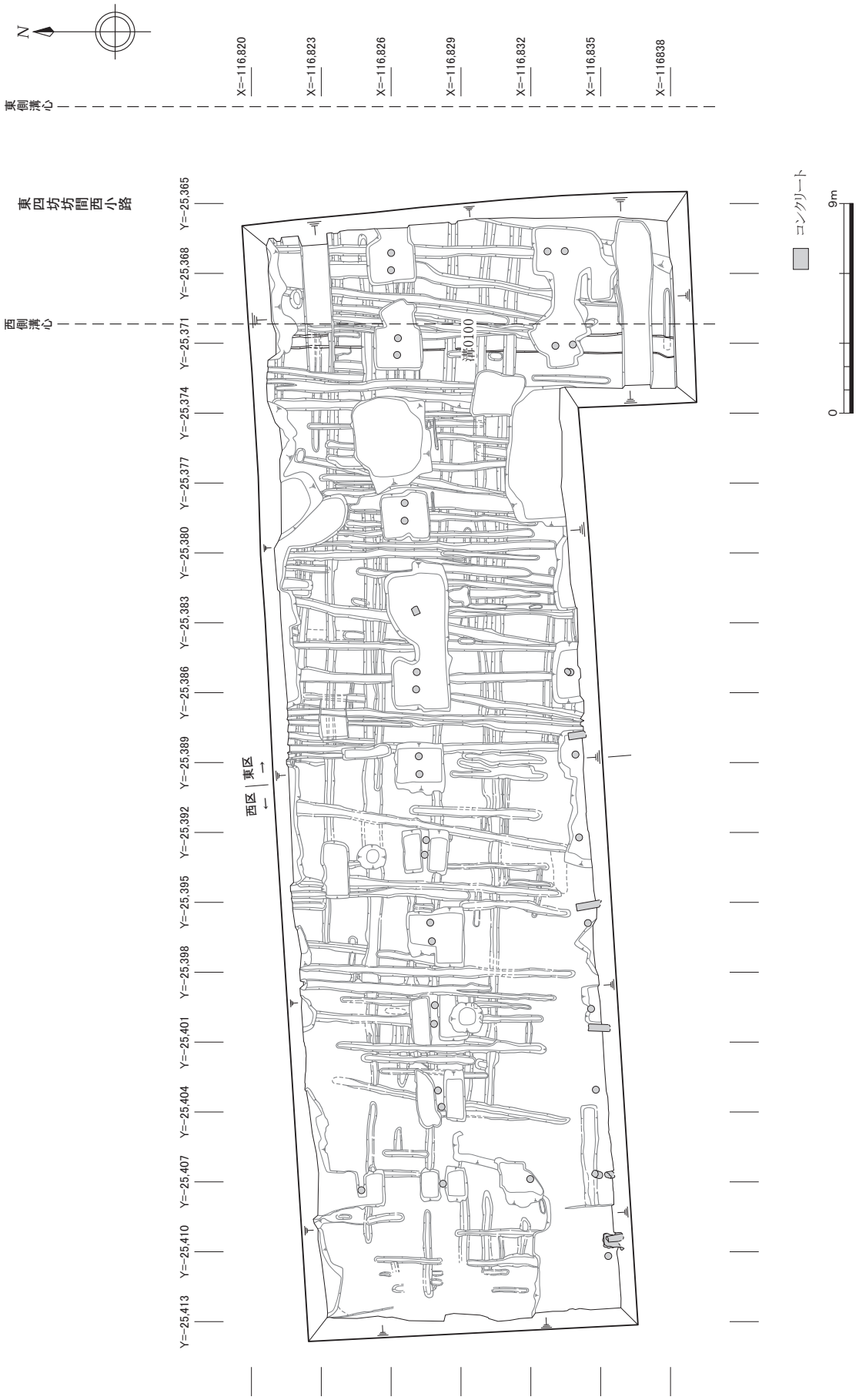
1　10YR4/1褐灰色極細～細粒砂
2　10YR7/8黄橙色粗粒砂
3　N3/暗灰色シルト～極細粒砂　5G6/1緑灰色シルト～極細粒砂混

土坑1180

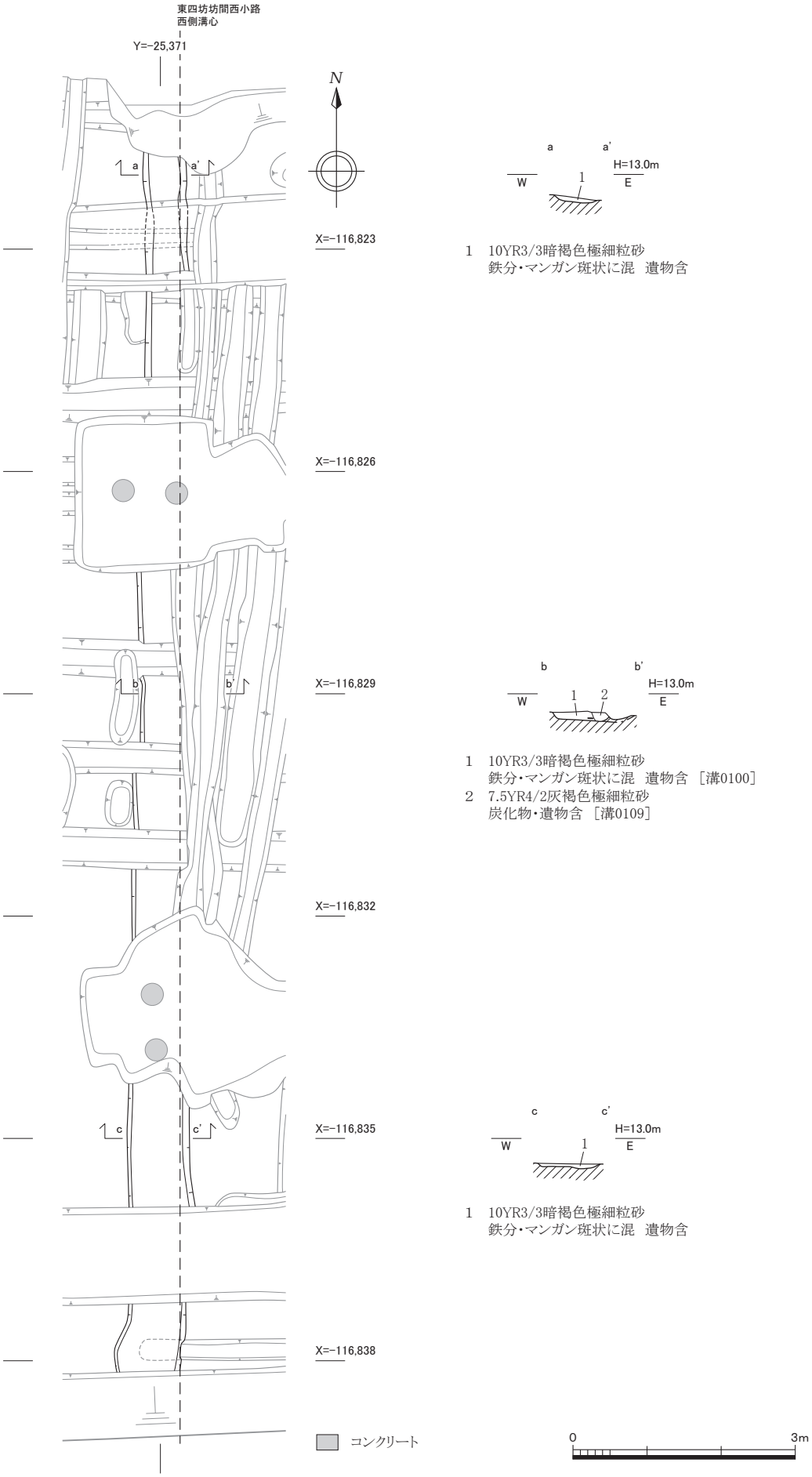


1　10YR4/1褐灰色極細～細粒砂

西区　井戸 0883、土坑 1180 平・断面図（1：50）



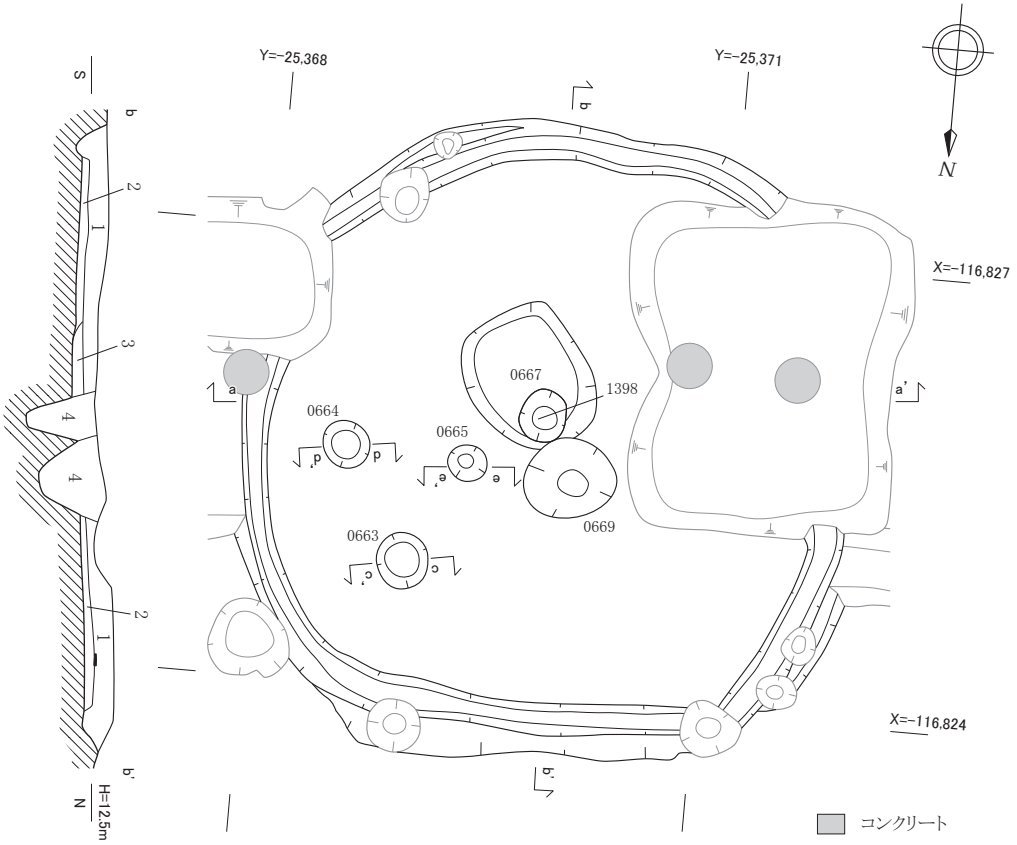
第１－２面　調査区全体平面図（１：250）

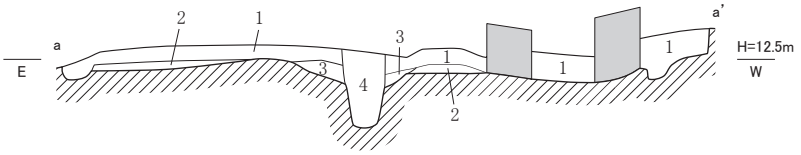


東区　溝 0100 平・断面図（1：80）

図版8

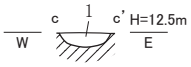
第２面　調査区全体平面図（１：250）





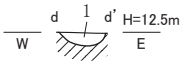
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂［竪穴建物0250埋土］
2　10YR5/1褐灰色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混［竪穴建物0250貼床］
3　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック多量混
4　10YR2/1黒色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット0663



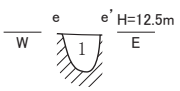
1　10YR2/1黒色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック多量混

ピット0664



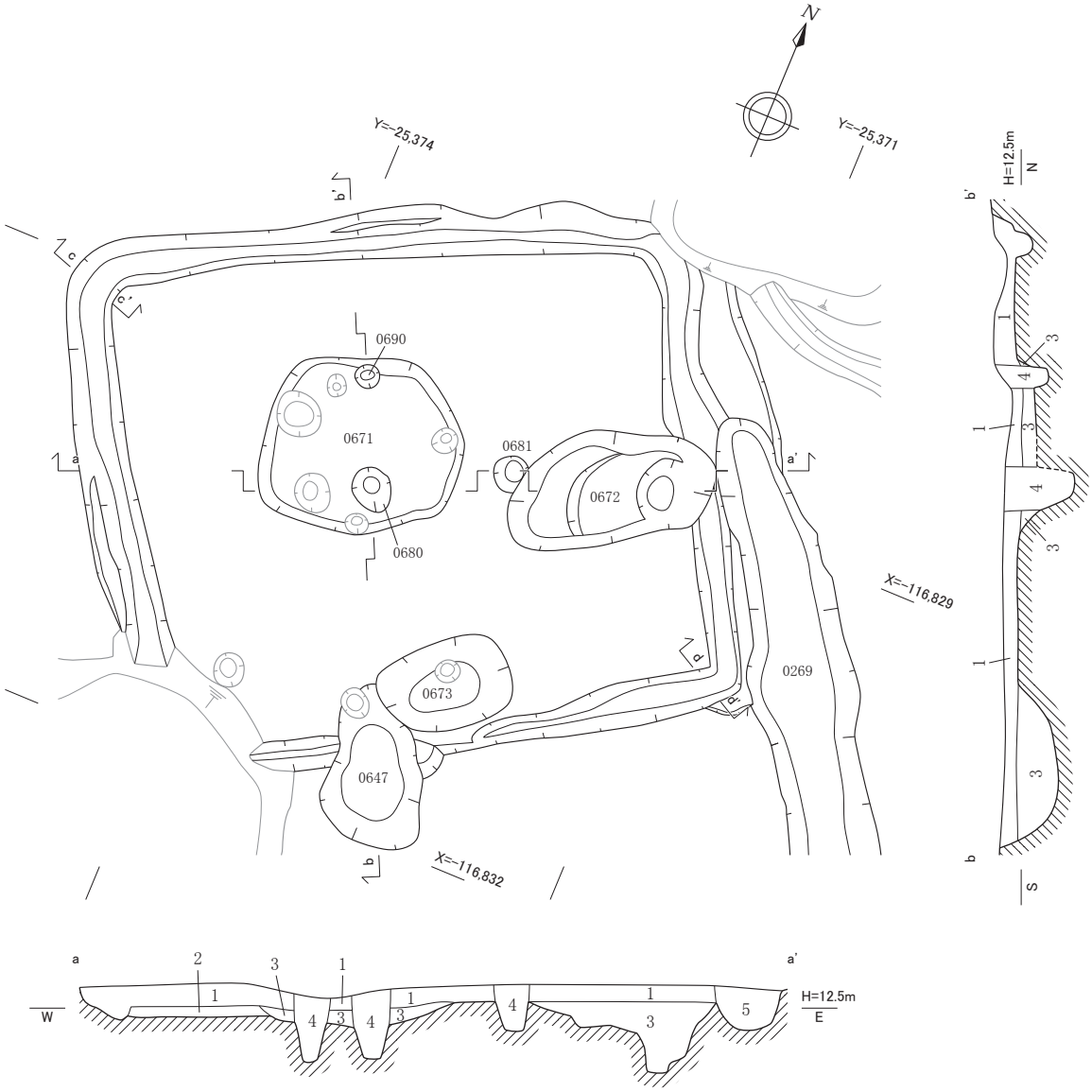
1　10YR2/1黒色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック多量混

ピット0665

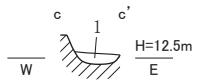


1　10YR2/1黒色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック多量混

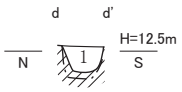
東区　竪穴建物 0250 平・断面図（1：50）



1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック少量混［竪穴建物0251埋土］
2　2.5Y4/1黄灰色極細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混［竪穴建物0251貼床］
3　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック多量混［土坑0671・0672埋土］
4　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
5　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂［溝状遺構0269埋土］



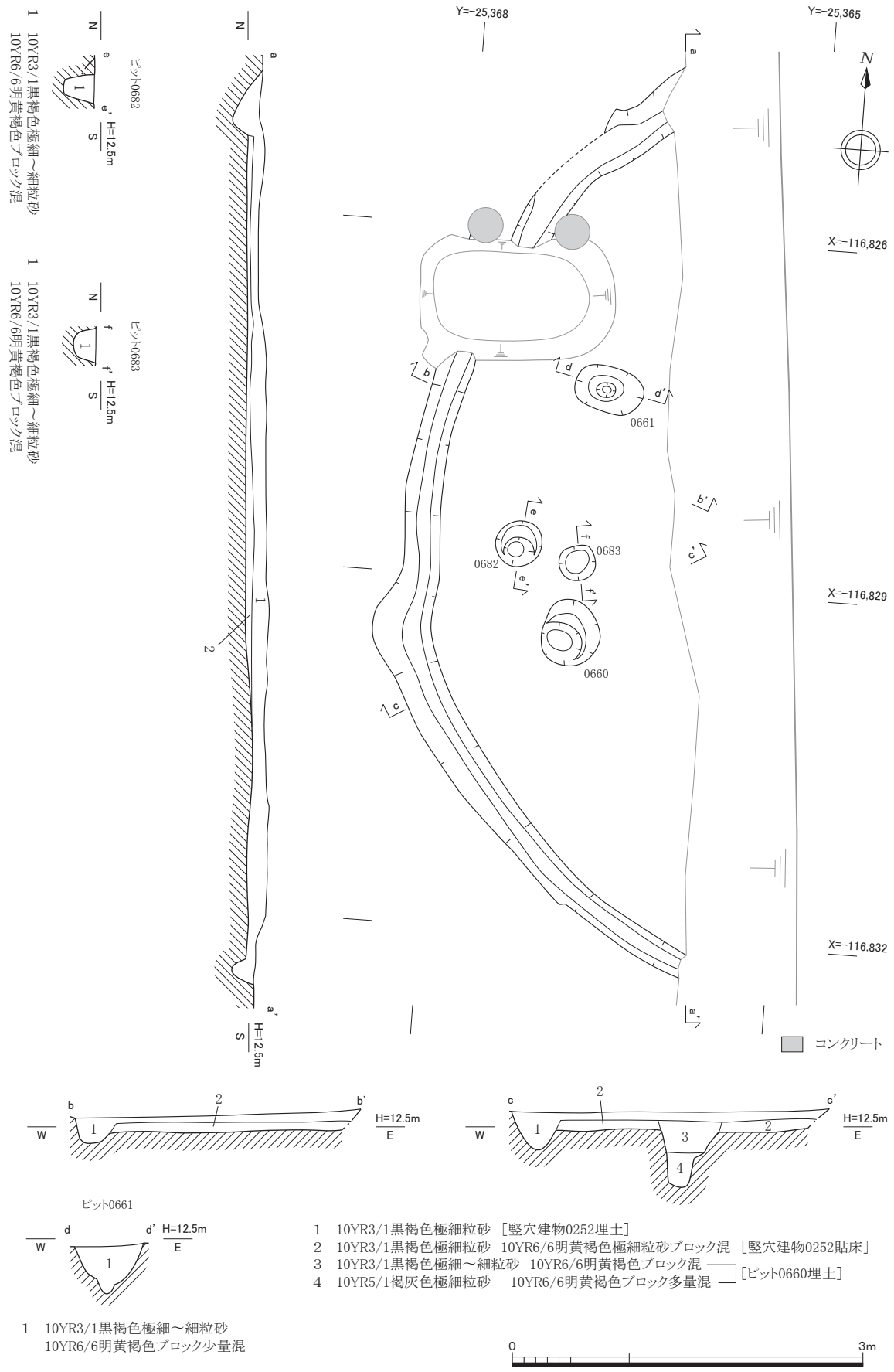
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック混



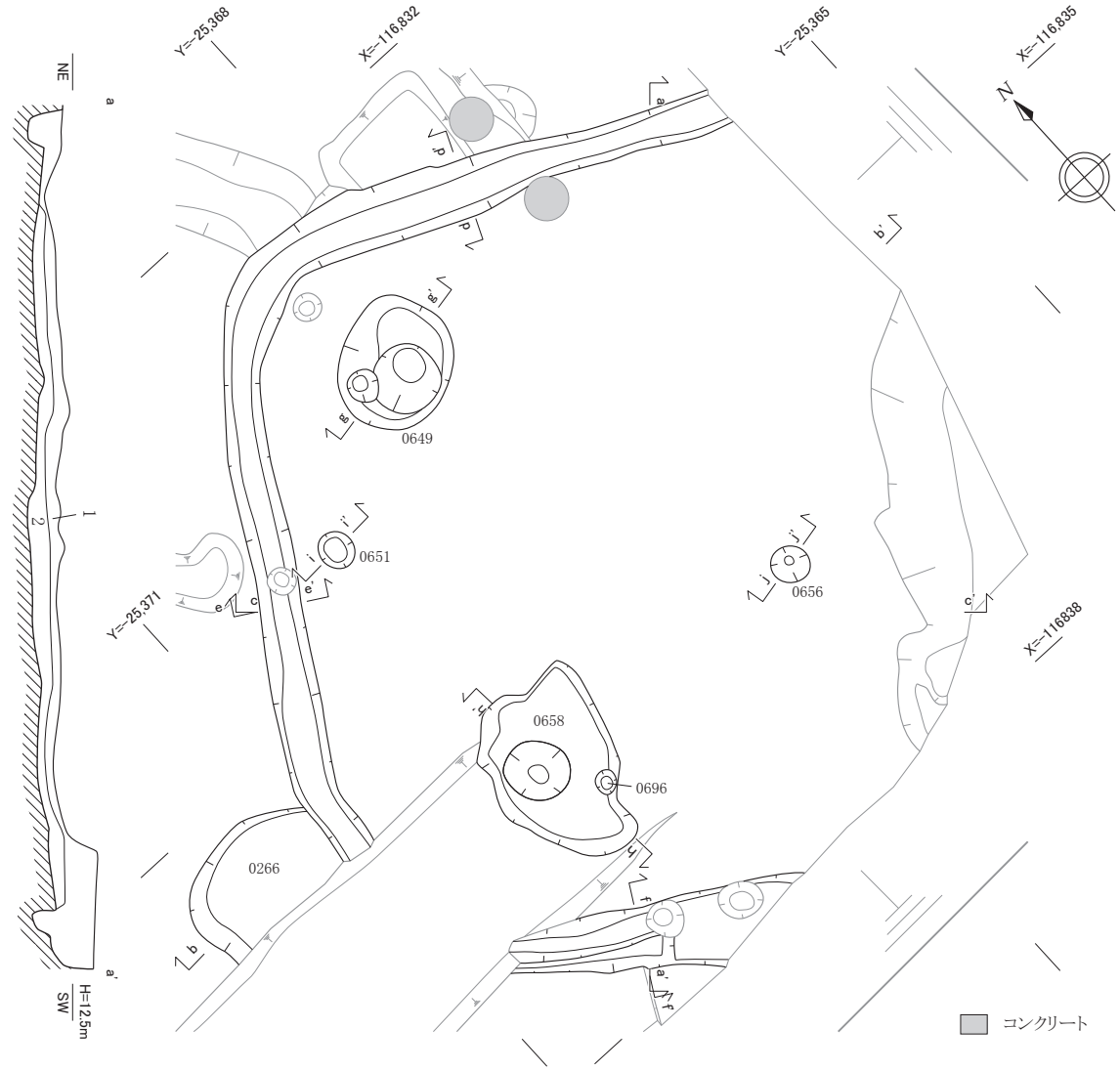
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック混

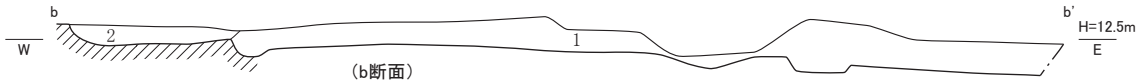
0　3m

東区　竪穴建物 0251 平・断面図（1：50）

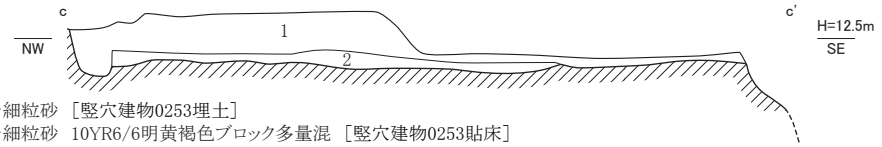


東区　竪穴建物 0252 平・断面図（1：50）

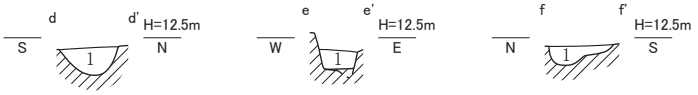




（b断面）
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
2　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混

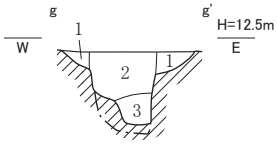


（a，c断面）
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　［竪穴建物0253埋土］
2　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック多量混　［竪穴建物0253貼床］



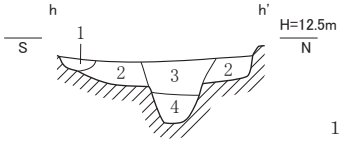
（d～f断面）
1　10YR3/1黒褐色極細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック混

土坑0649



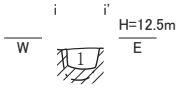
1　10YR4/1褐灰色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック混
2　10YR5/1褐灰色細粒砂　粘性あり
10YR6/6明黄褐色ブロック混
3　10YR3/1黒褐色極細粒砂　粘性強

土坑0658



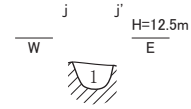
1　10YR4/1褐灰色極細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック混
2　10YR2/1黒色細～粗粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック少量、
炭化物多量に混
3　10YR3/1黒褐色極細粒砂
4　10YR3/1黒褐色極細粒砂
炭化物、10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット0651



1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック混

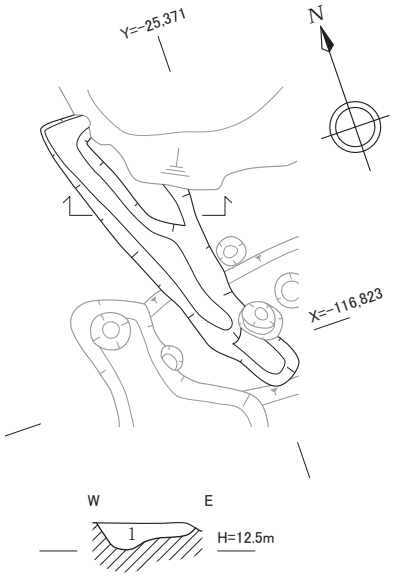
ピット0656



1　10YR4/1褐灰色極細～細粒砂
10YR6/6明黄褐色ブロック混

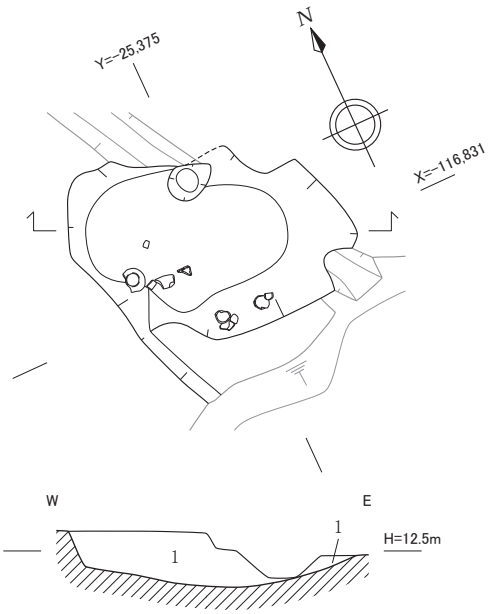
東区　竪穴建物 0253 平・断面図（1：50）

土坑0258



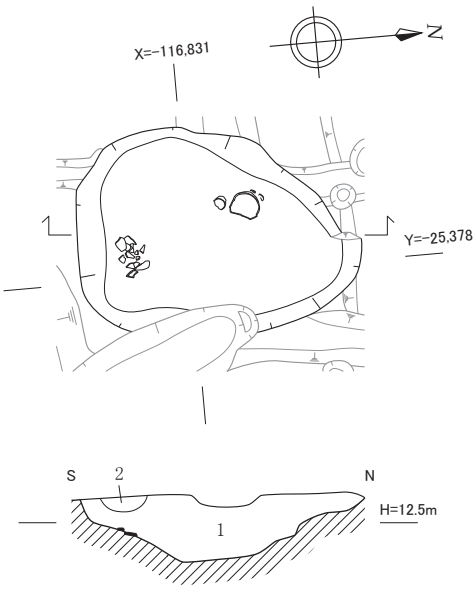
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂

土坑0277



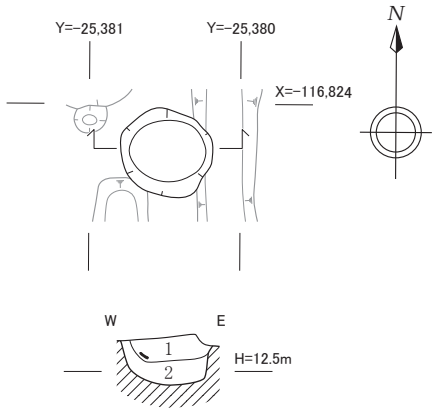
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

土坑0284



1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混
2　2.5YR6/6橙色極細～細粒砂

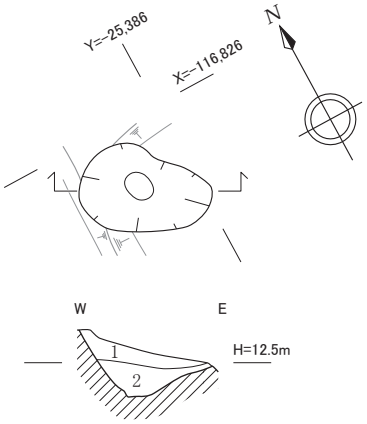
土坑0293



1　10YR4/1褐灰色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混
2　10YR2/1黒色極細～細粒砂

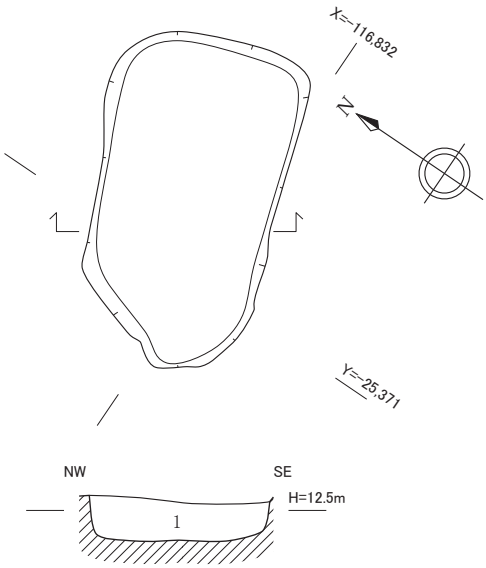
東区　土坑 0258・0277・0284・0293 平・断面図（1：50）

土坑0298



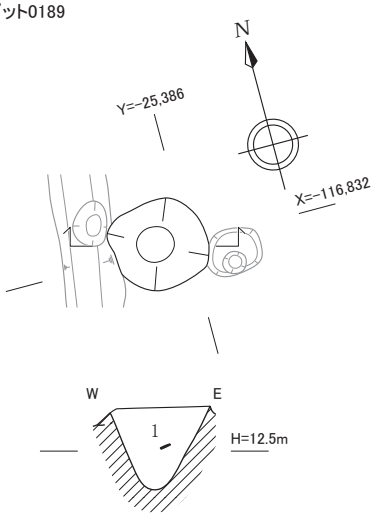
1　10YR4/1褐灰色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混
2　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

土坑0688



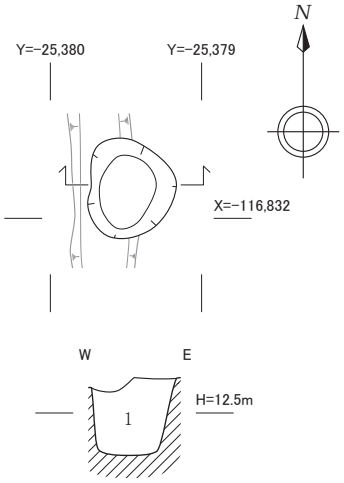
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット0189



1　10YR3/1黒褐色極細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

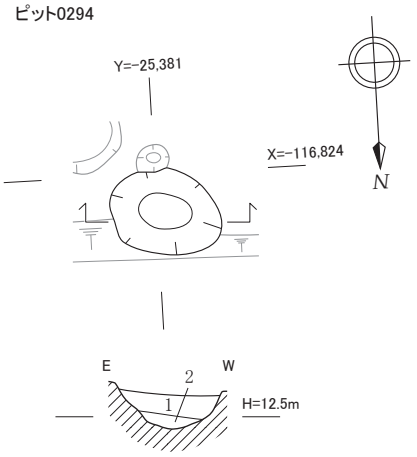
ピット0285



1　10YR3/1黒褐色極細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

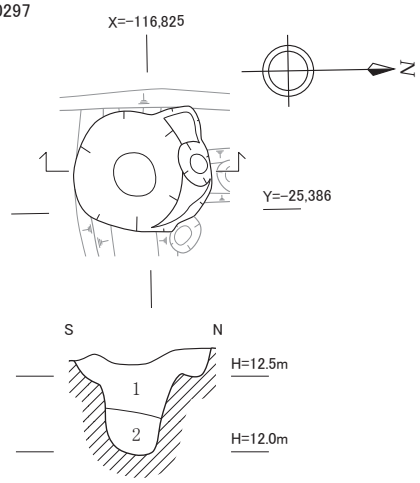
東区　土坑 0298・0688、ピット 0189・0285 平・断面図（1：50）

ピット0294



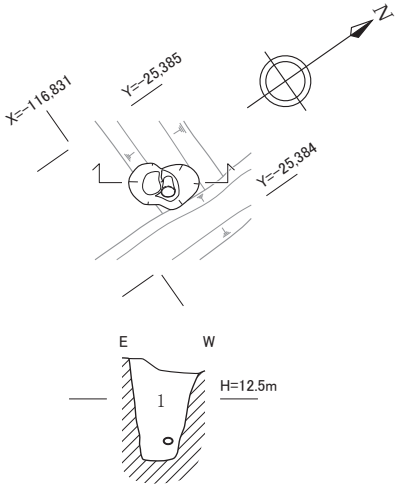
1　10YR7/6明黄褐色極細～細粒砂　鉄分混
2　10YR2/1黒色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット0297



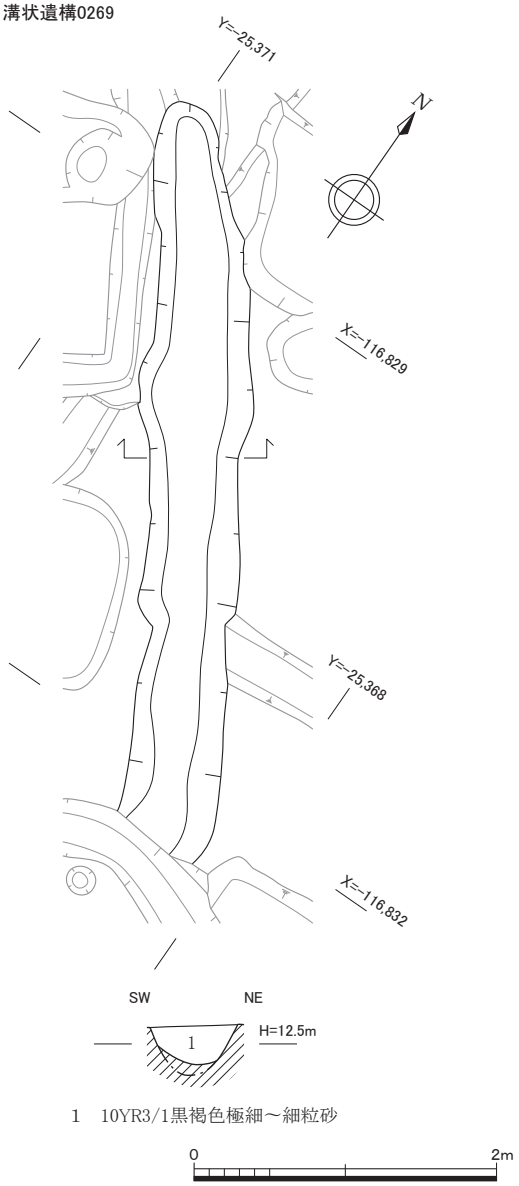
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
2　10YR2/1黒色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット0582



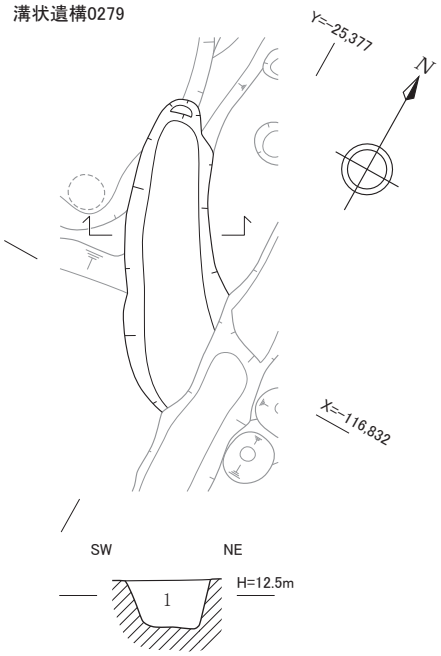
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

溝状遺構0269

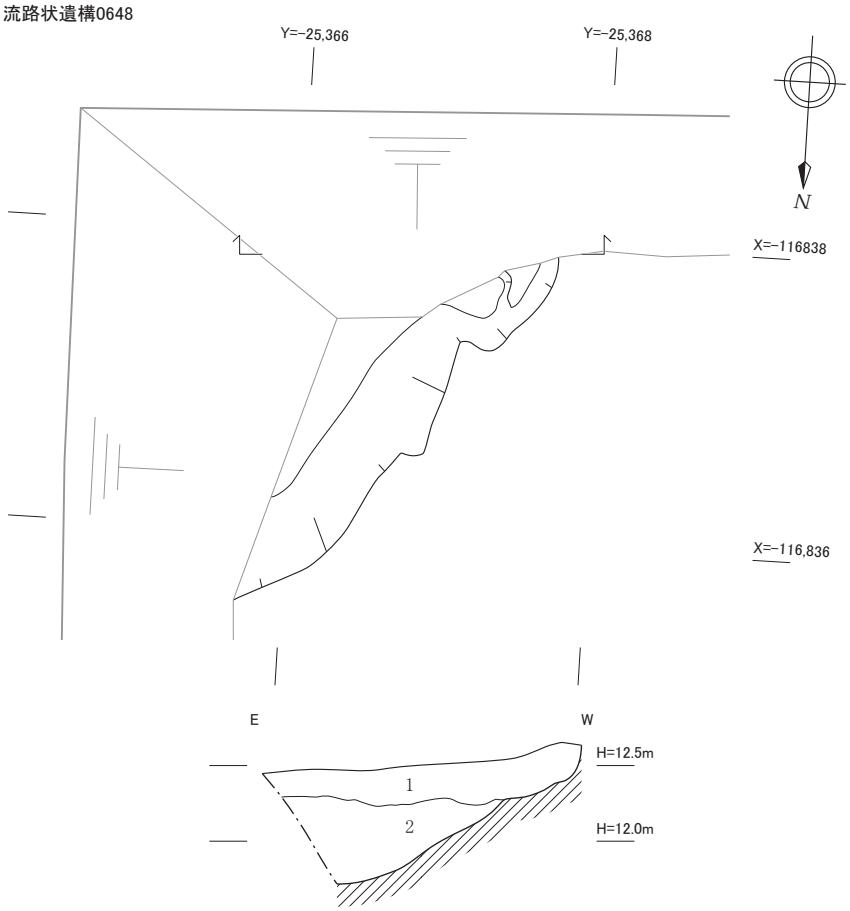


1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂

東区　ピット 0294・0297・0582、溝状遺構 0269 平・断面図（1：50）



1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂

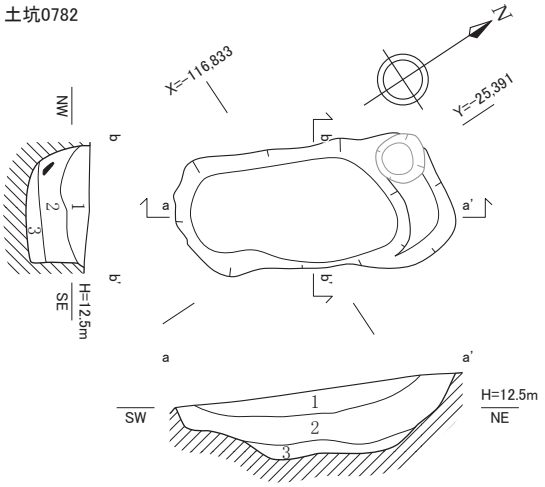


1　5R3/1暗赤灰色極細～細粒砂
2　10YR2/2黒褐色細粒砂　小礫多量混　遺物含

0　2m

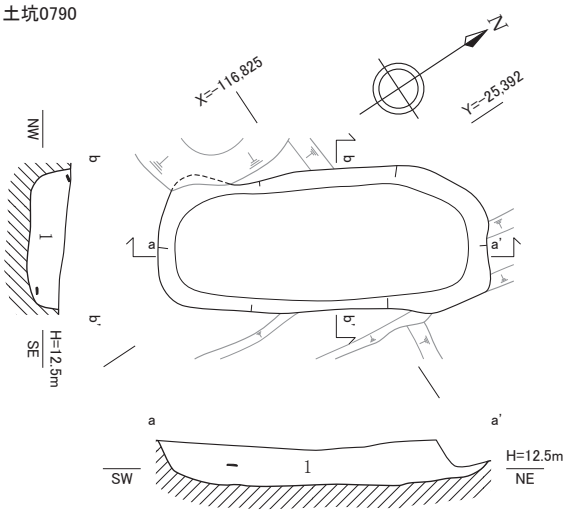
東区　溝状遺構 0279、流路状遺構 0648 平・断面図（1：50）

土坑0782



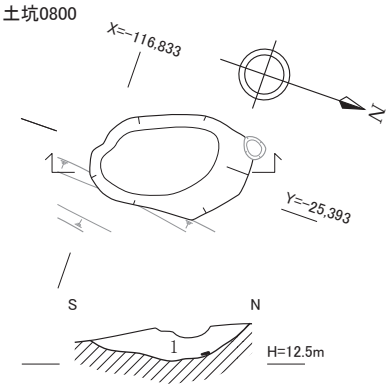
1　10YR6/6明黄褐色極細～細粒砂　炭化物含
2　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混　炭化物含
3　10YR7/8明黄褐色極細～細粒砂　炭化物含

土坑0790



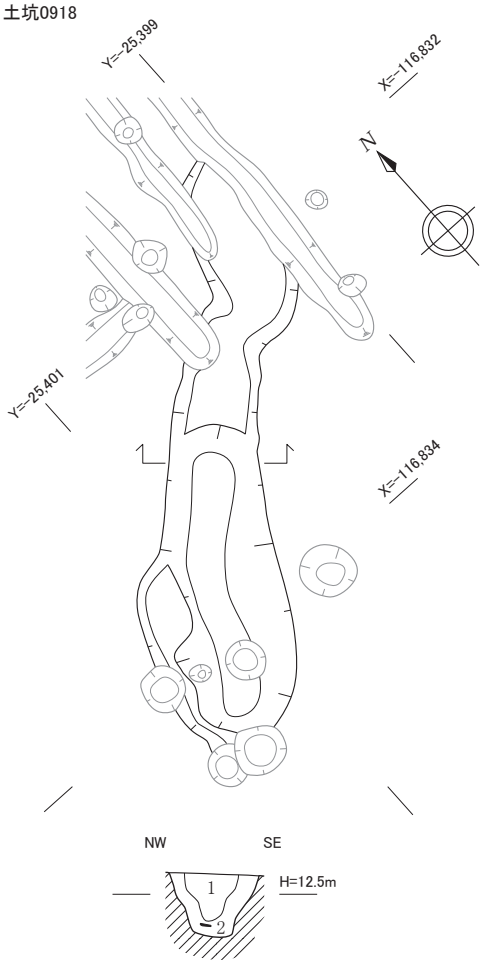
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

土坑0800



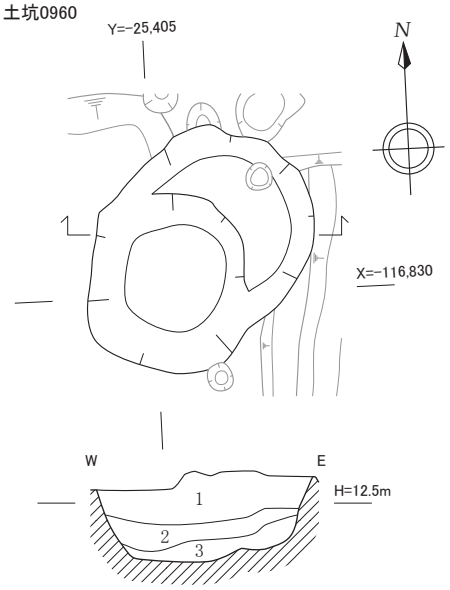
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

土坑0918



1　10YR6/6明黄褐色極細～細粒砂
2　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

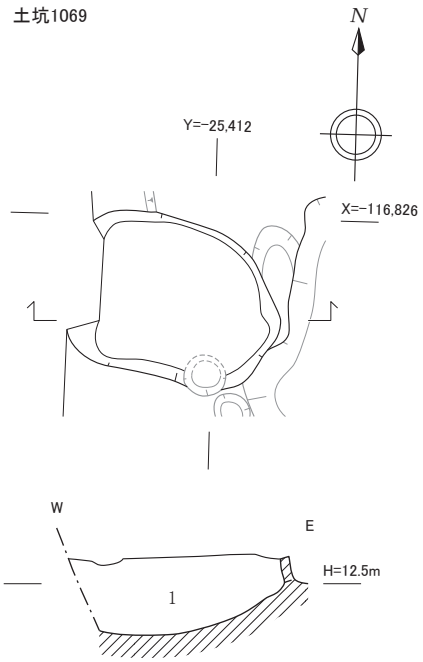
土坑0960



1　10YR5/1褐灰色細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混
2　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
3　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混

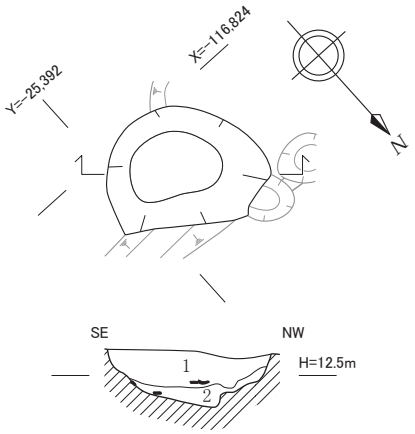
西区　土坑 0782・0790・0800・0918・0960 平・断面図（1：50）

土坑1069



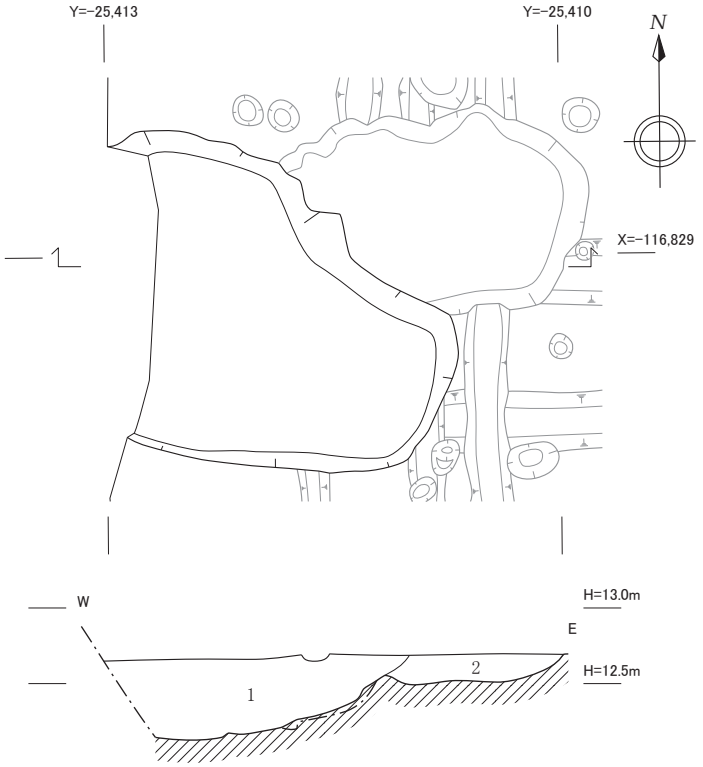
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

土坑1223



1　10YR3/1黒褐色極細粒砂
2　10YR2/1黒色細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混　炭化物含

土坑1076

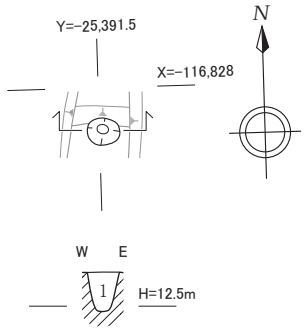


1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混　［土坑1076］
2　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂　10YR6/6明黄褐色ブロック混　［土坑1229］

0　2m

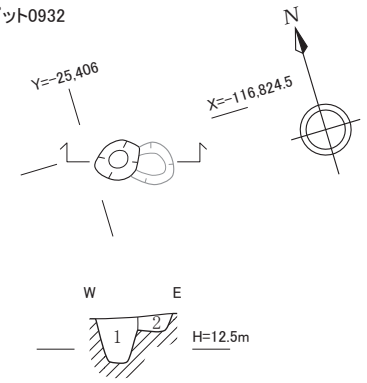
西区　土坑 1069・1076・1223 平・断面図（1：50）

ピット0772



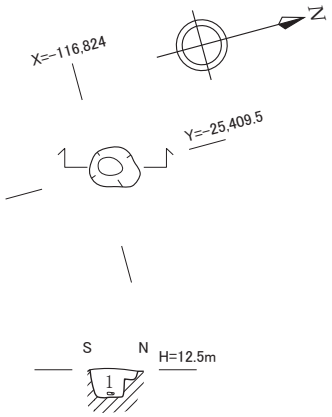
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット0932



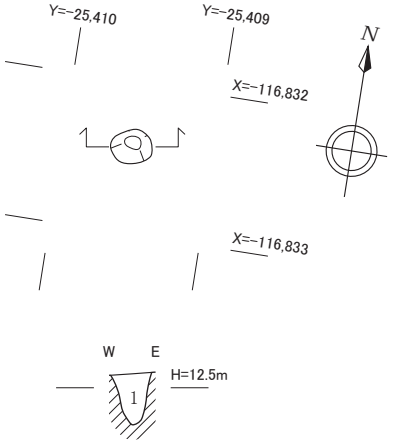
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混［ピット932］
2　10YR3/2黒褐色極細～細粒砂［ピット931］

ピット0991



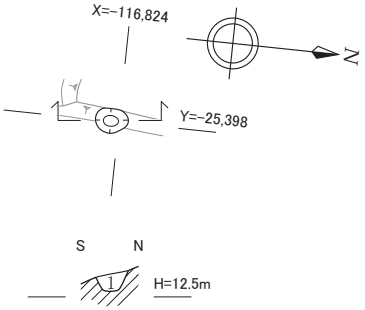
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット1039



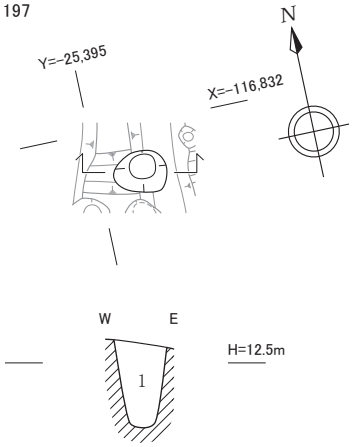
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット1143



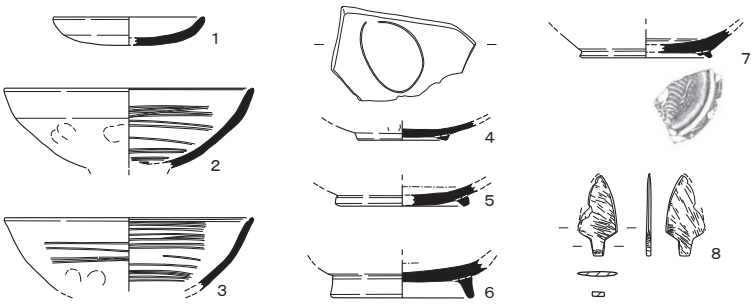
1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

ピット1197

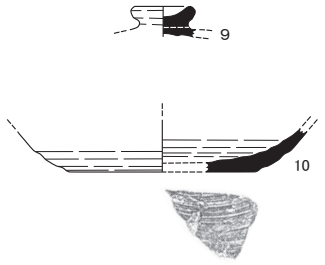


1　10YR3/1黒褐色極細～細粒砂
　　10YR6/6明黄褐色ブロック混

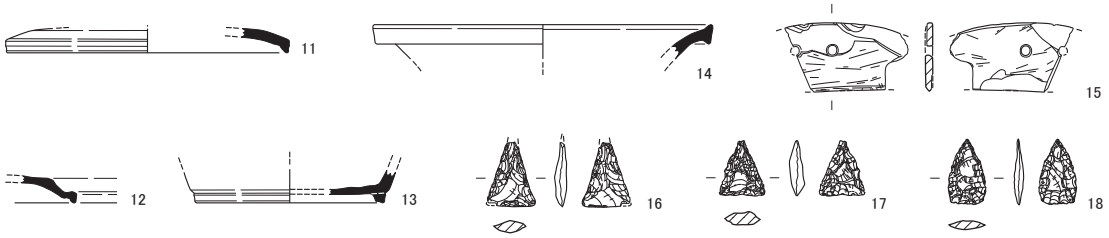
西区　ピット0772・0932・0991・1039・1143・1197平・断面図（1：50）



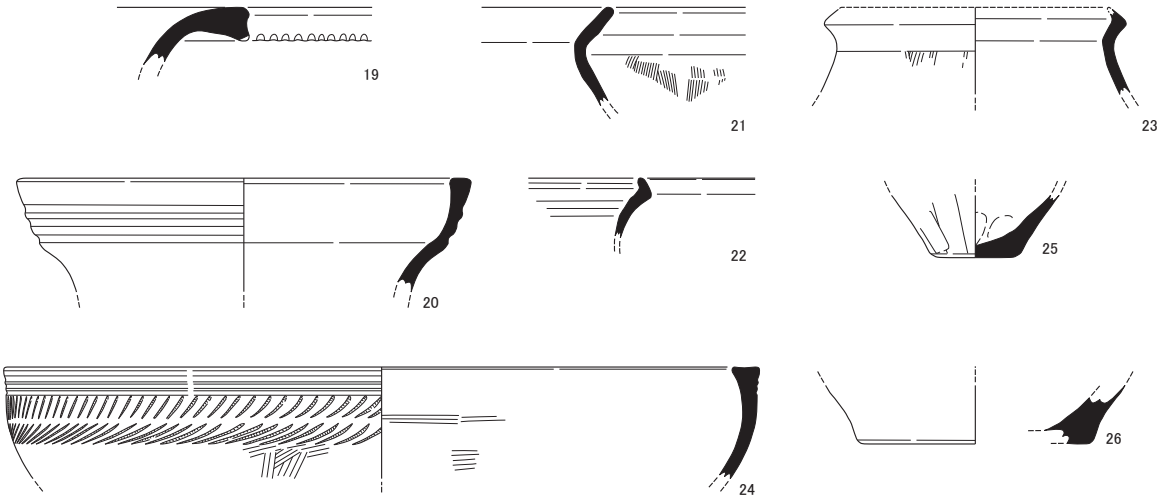
1～8 :東区第1−1面　素掘り溝群出土遺物



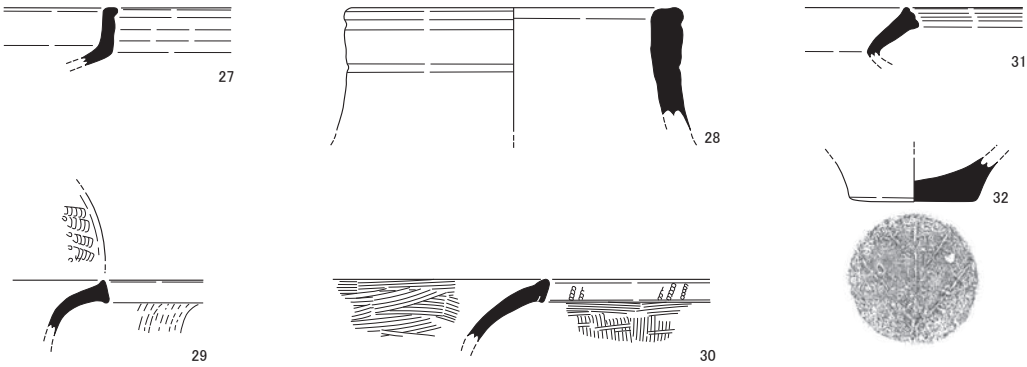
9・10 :東区第1−2面　溝0100出土遺物



11～18 :東区　第3層出土遺物

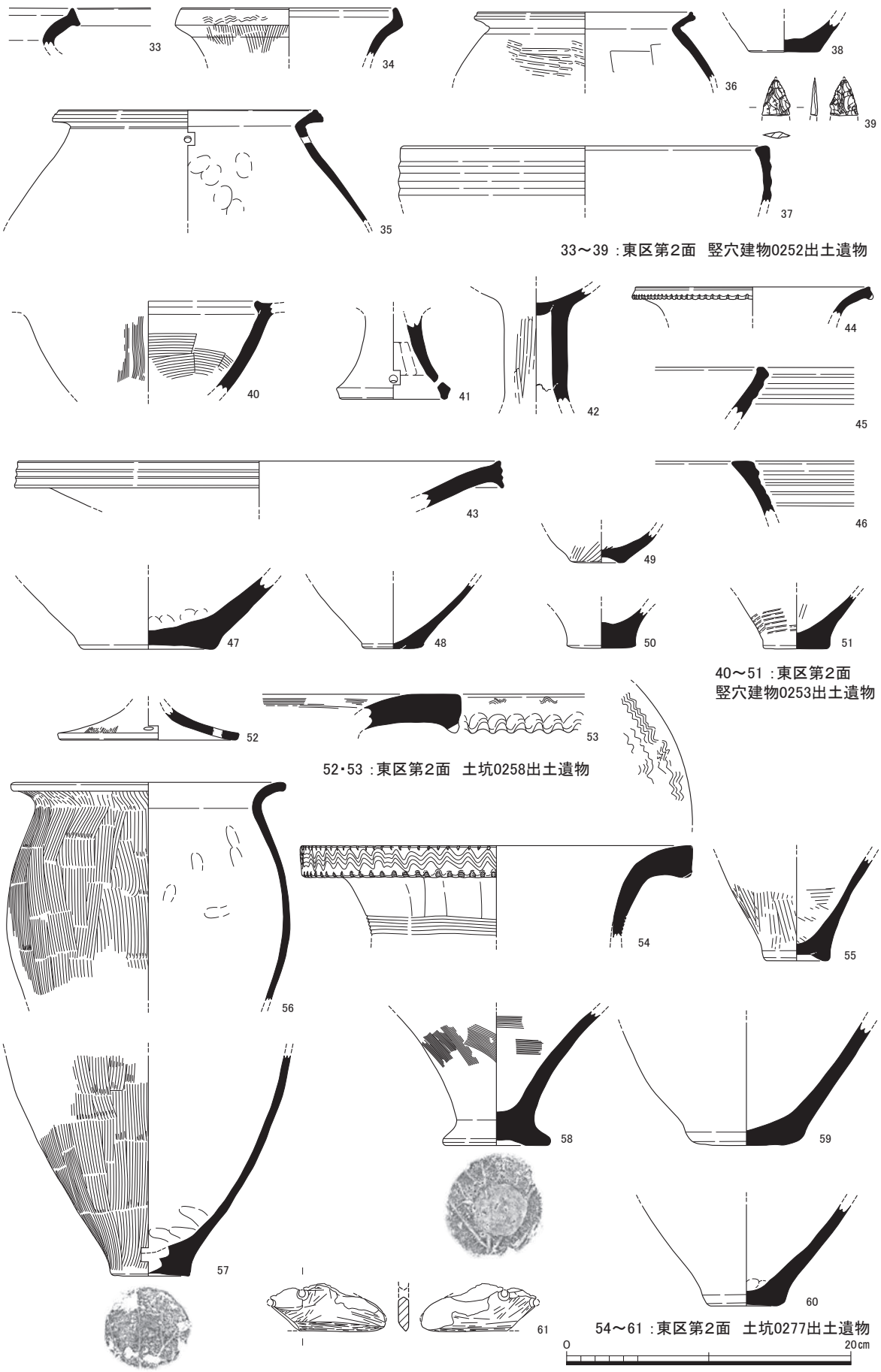


19～26 :東区第2面　竪穴建物0250出土遺物

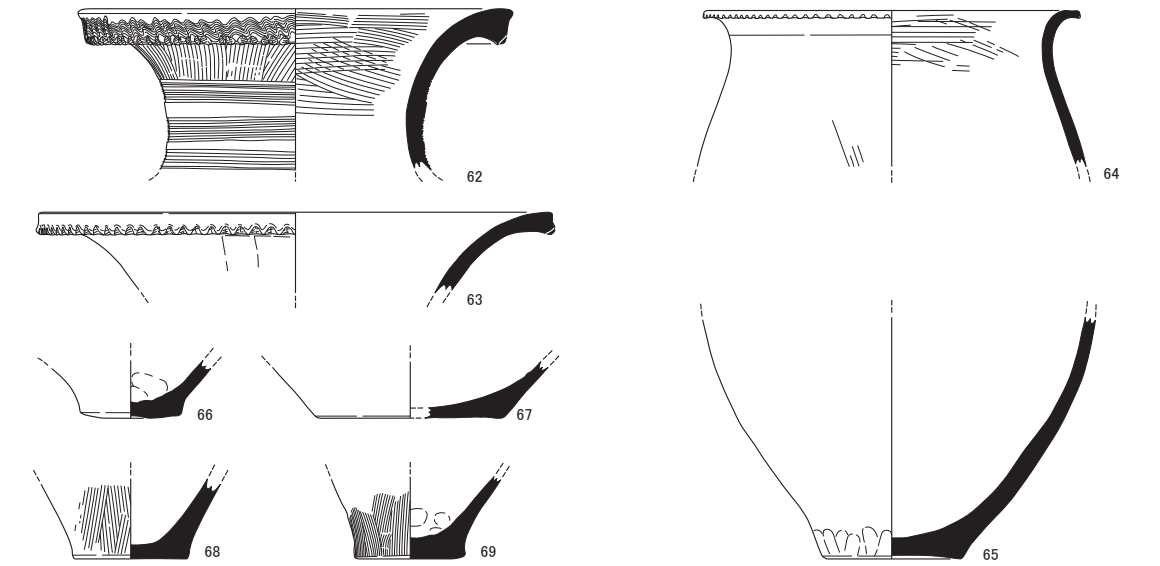


27～32 :東区第2面　竪穴建物0251出土遺物

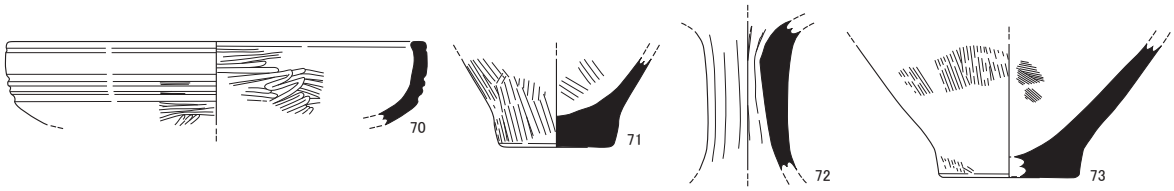
出土遺物１（１：４）


33
34
35
36
37
38
39
33～39 :東区第2面　竪穴建物0252出土遺物
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
40～51 :東区第2面
竪穴建物0253出土遺物
52
53
52・53 :東区第2面　土坑0258出土遺物
54
55
56
57
58
59
60
61
54～61 :東区第2面　土坑0277出土遺物
0
20cm

出土遺物２（１：４）

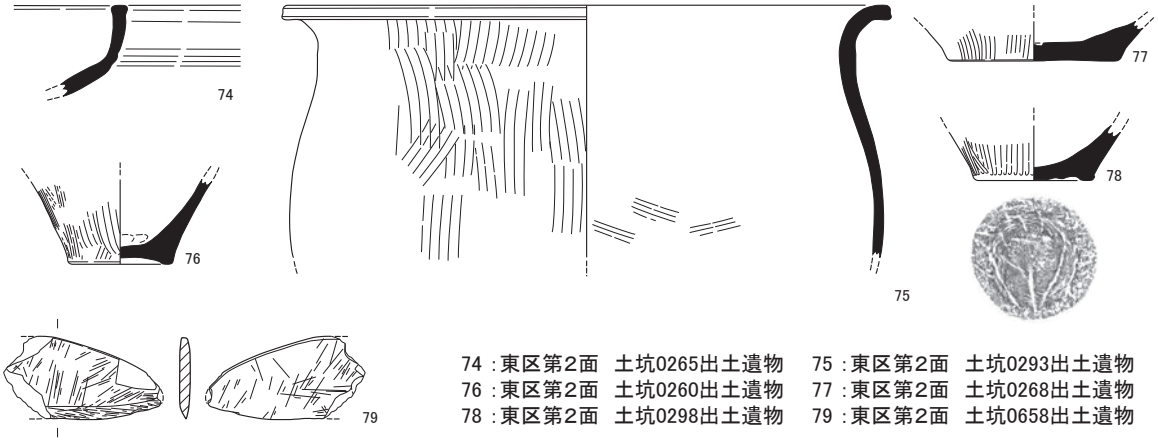


62～69 :東区第2面　土坑0284出土遺物

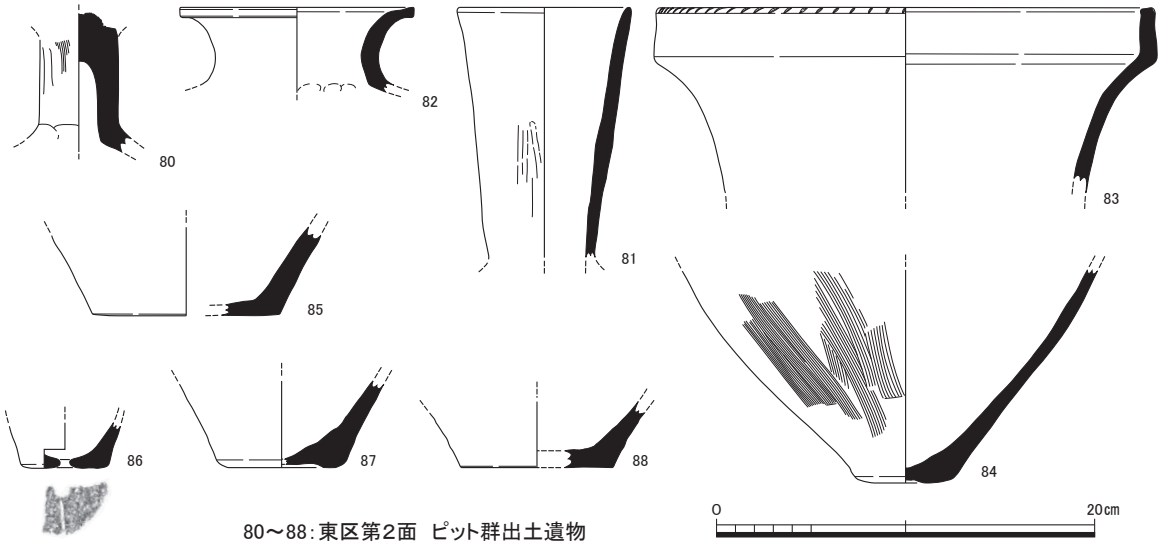


70・71 :東区第2面　土坑0672出土遺物

72・73 :東区第2面　土坑0688出土遺物

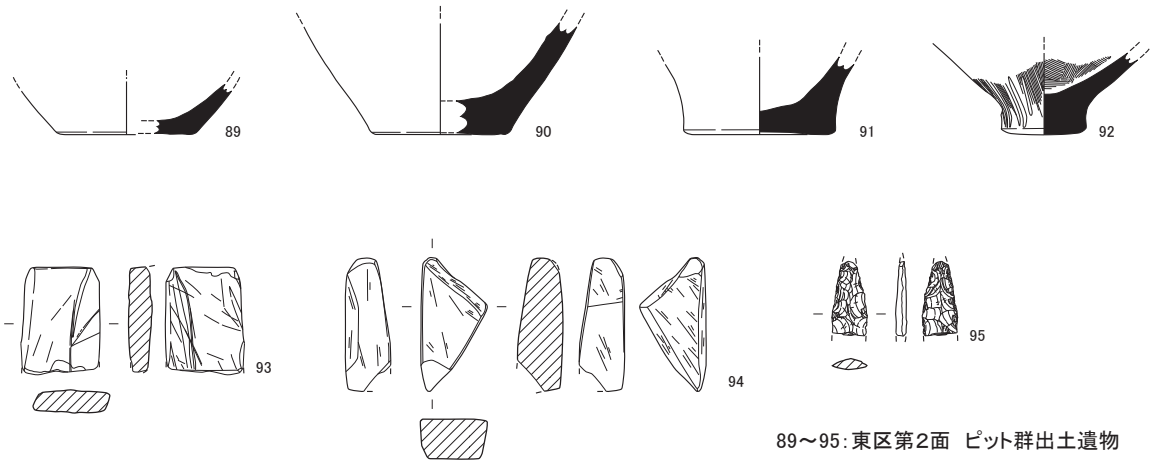


74 :東区第2面　土坑0265出土遺物　75 :東区第2面　土坑0293出土遺物
76 :東区第2面　土坑0260出土遺物　77 :東区第2面　土坑0268出土遺物
78 :東区第2面　土坑0298出土遺物　79 :東区第2面　土坑0658出土遺物

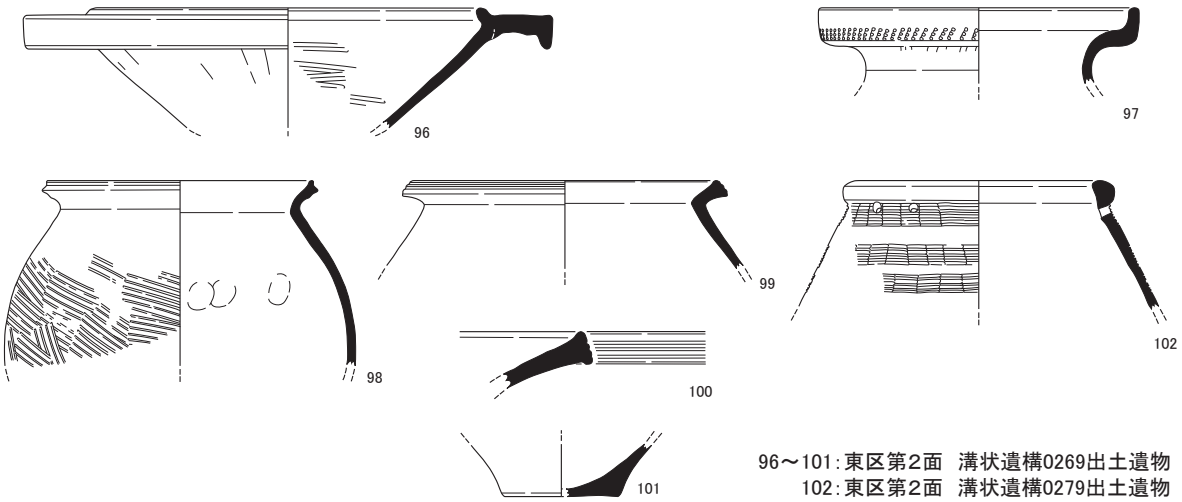


80～88:東区第2面　ピット群出土遺物

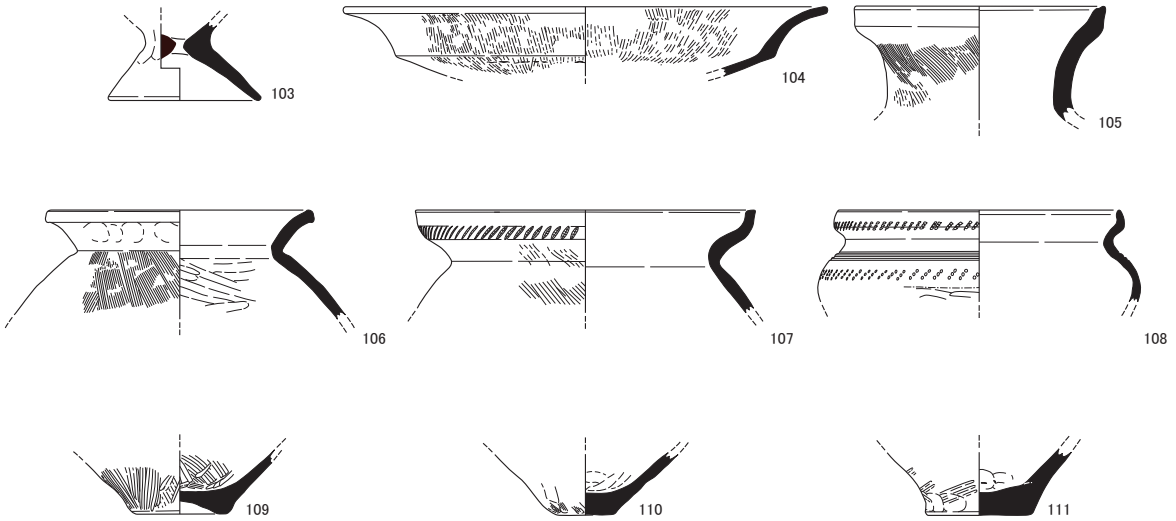
出土遺物３（１：４）



89～95：東区第2面　ピット群出土遺物



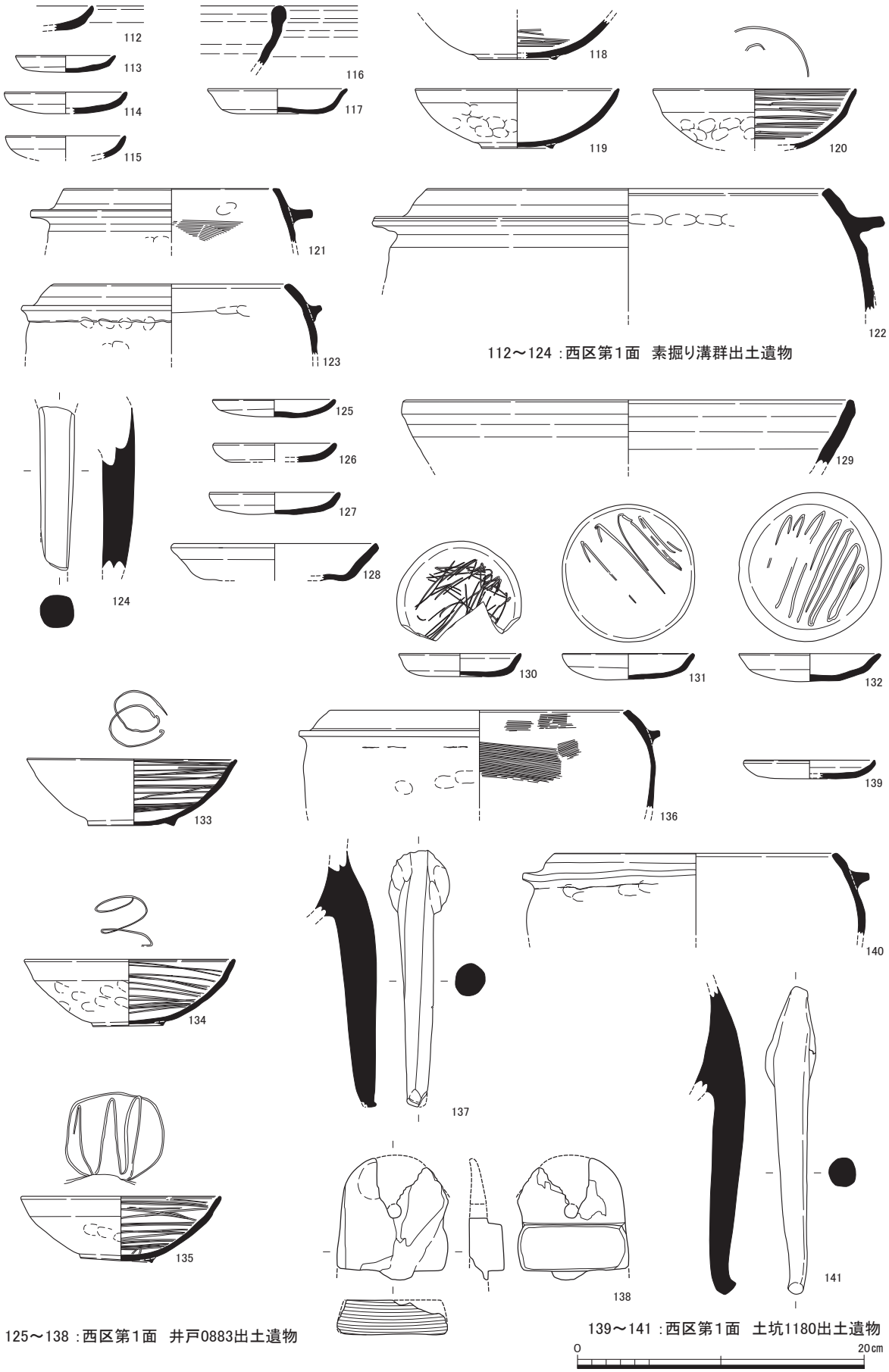
96～101：東区第2面　溝状遺構0269出土遺物
102：東区第2面　溝状遺構0279出土遺物



103～111：東区第2面　流路状遺構0648出土遺物

0　20cm

出土遺物４（１：４）

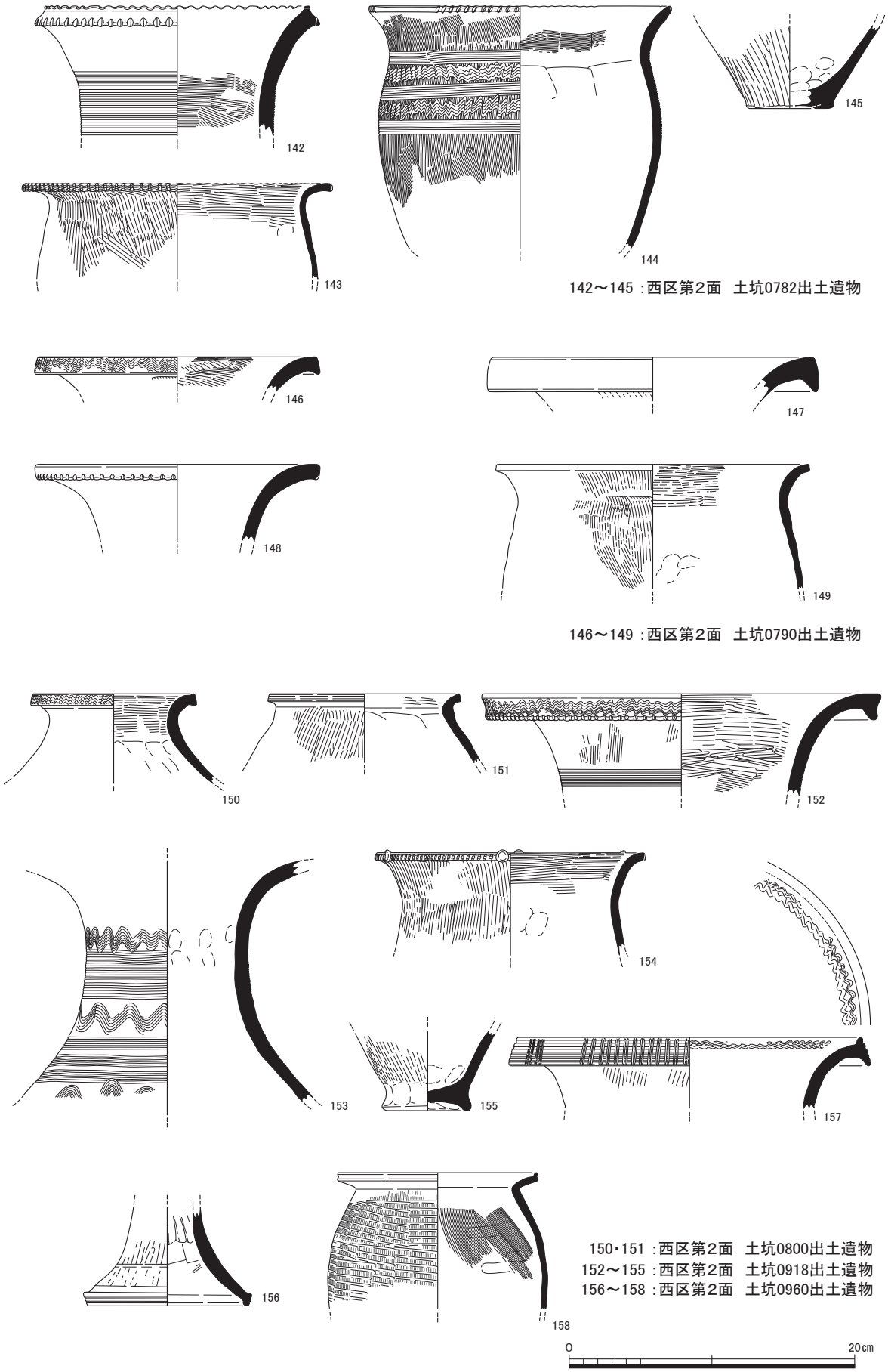


112～124 :西区第1面　素掘り溝群出土遺物

125～138 :西区第1面　井戸0883出土遺物

139～141 :西区第1面　土坑1180出土遺物

出土遺物５（１：４）

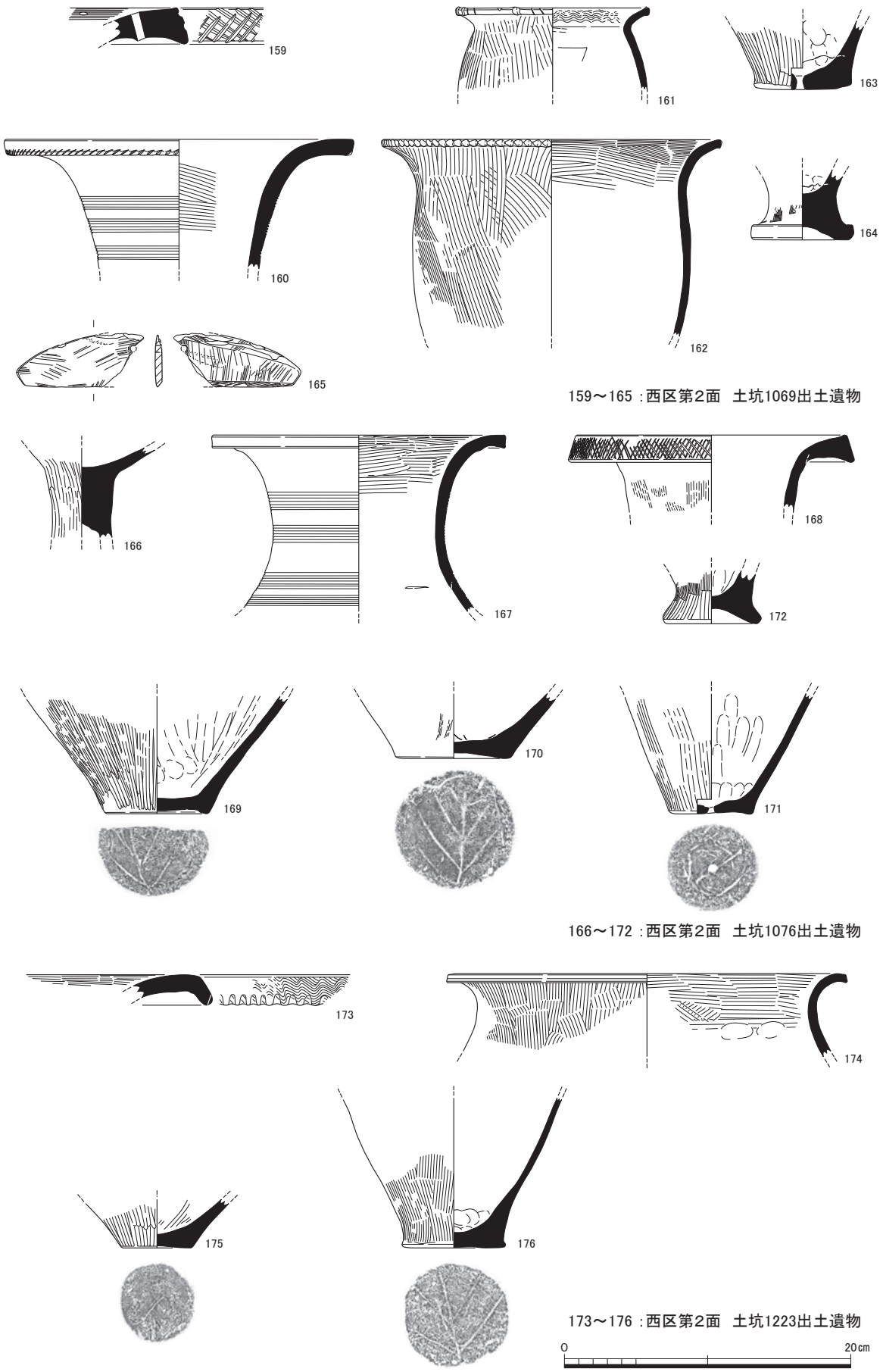


142～145 :西区第2面　土坑0782出土遺物

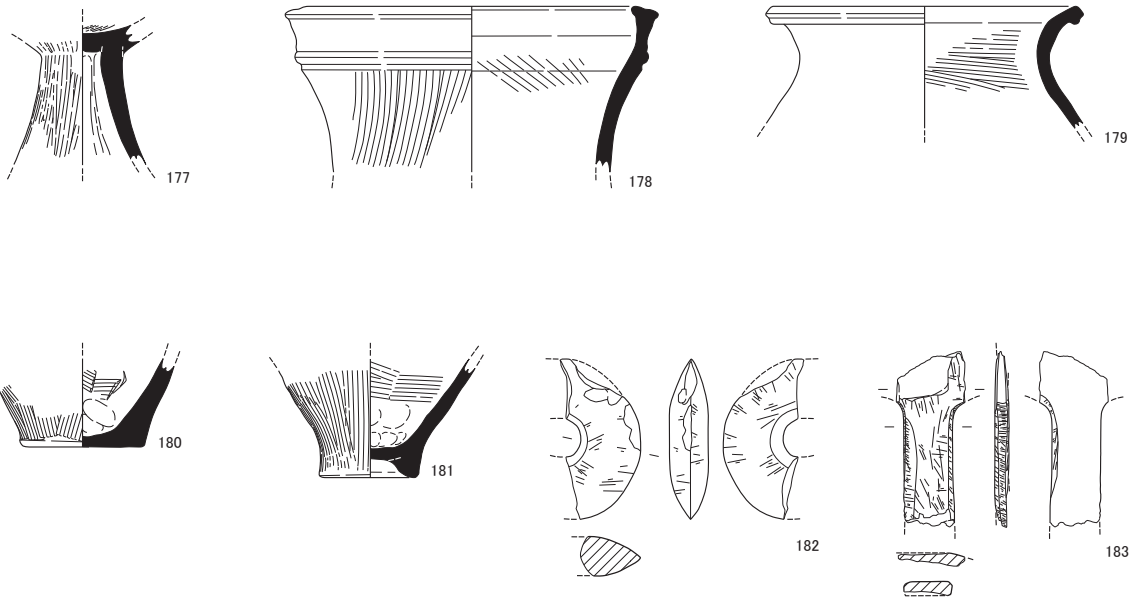
146～149 :西区第2面　土坑0790出土遺物

150･151 :西区第2面　土坑0800出土遺物
152～155 :西区第2面　土坑0918出土遺物
156～158 :西区第2面　土坑0960出土遺物

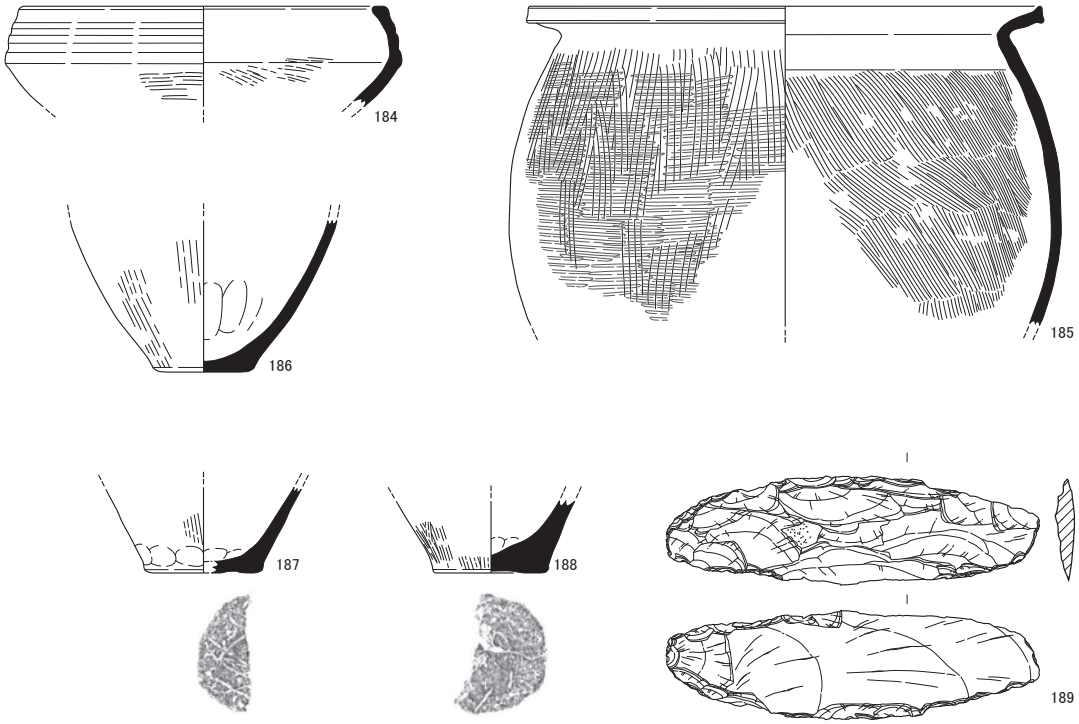
出土遺物６　（１：４）


159
161
163
160
162
164
165
159～165 :西区第2面　土坑1069出土遺物
166
167
168
172
169
170
171
166～172 :西区第2面　土坑1076出土遺物
173
174
175
176
173～176 :西区第2面　土坑1223出土遺物
0
20cm

出土遺物７（１：４）



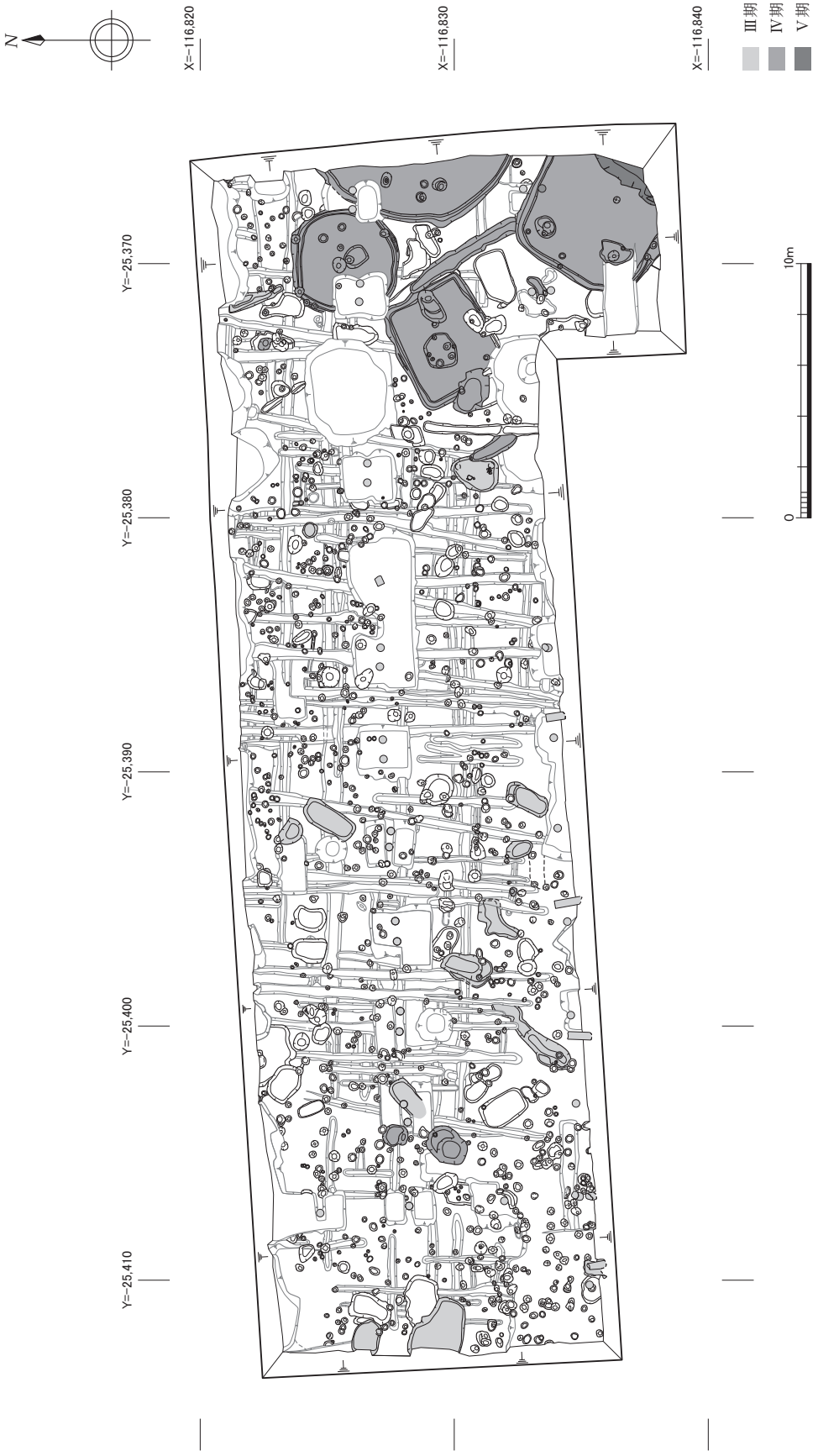
177 :西区第2面　土坑0872出土遺物　178 :西区第2面　土坑0950出土遺物　179 :西区第2面　土坑0848出土遺物
180 :西区第2面　土坑0846出土遺物　181 :西区第2面　土坑0909出土遺物　182 :西区第2面　土坑0845出土遺物
183 :西区第2面　土坑0859出土遺物



184～189 :西区第2面　ピット群出土遺物

0　20cm

出土遺物８　（１：４）



第２面　弥生時代遺構変遷図（１：250）

1．東区　第１－２面全景（上が北）

2．東区　第１－２面　溝0100全景（南から）

1．東区　第２面全景（上が北）

2．東区　第２面　竪穴建物0250全景（北東から）

1．東区　第２面　竪穴建物0251全景（北東から）

2．東区　第２面　竪穴建物0252全景（北東から）

1．東区　第２面　竪穴建物0253全景（北東から）

2．東区　第２面　土坑0277遺物出土状況（北西から）

1．東区　第２面　土坑0284遺物出土状況（北東から）

2．東区　第２面　ピット0582遺物出土状況（北から）

1．西区　調査区全景（上が北）

2．西区　第１面　井戸0883半裁断面（北から）

1．東区　第１－１面　素掘り溝群出土遺物

2．東区　第１－２面　溝0100出土遺物

1．東区　第３層　出土遺物

2．東区　第２面　竪穴建物0250出土遺物

1．東区　第２面　竪穴建物0251出土遺物

2．東区　第２面　竪穴建物0252出土遺物

1．東区　第２面　竪穴建物0253出土遺物

2．東区　第２面　土坑0258・0277出土遺物

1．東区　第２面　土坑0284出土遺物

2．東区　第２面　土坑0672・0688出土遺物

1．東区　第２面　ピット群出土遺物

2．東区　第２面　溝状遺構0269・0279出土遺物

1．東区　第２面　流路状遺構0648出土遺物

2．西区　第１面　素掘り溝群出土遺物

1．西区　第１面　井戸0883出土遺物

2．西区　第２面　土坑0782出土遺物

1．西区　第２面　土坑0790出土遺物

2．西区　第２面　土坑0800・0918出土遺物

1．西区　第２面　土坑0960・1069出土遺物

2．西区　第２面　土坑1076出土遺物

1．西区　第２面　土坑1223出土遺物

2．西区　第２面　ピット群出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうさきょういちじょうしぼうよんちょうあと・ひがしつちかわいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	長岡京左京一条四坊四町跡・東土川遺跡　発掘調査報告書
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	辰巳陽一　吉川絵里　中西佳奈江
編集機関	株式会社 文化財サービス
所在地	〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町８番地
発行所	株式会社 文化財サービス
発行年月日	2023年12月29日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京左京一条四坊四町跡・東土川遺跡（ながおかきょうさきょういちじょうしぼうよんちょうあと・ひがしつちかわいせき）	京都府京都市南区久世東土川町350番地10（きょうとふきょうとし・みなみくくぜひがしつちかわちょう・350ばんち10）	26100	3 783	34度 56分 47.7秒	135度 43分 19.3秒	2023年 3月22日 ～ 2023年 7月4日	717㎡	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京左京一条四坊四町跡・東土川遺跡	都城跡 集落跡	鎌倉時代	素掘り溝群 井戸 土坑	土師器 須恵器 瓦器 瓦質土器 木製品	・弥生時代中期中葉の土坑、中期中葉から後葉にかけての竪穴建物、ピット群を検出し、東土川遺跡における居住域の一端を確認した。 ・長岡京東四坊坊間西小路の西側溝とみられる南北方向の溝を検出し、長岡京条坊の施工が調査地周辺にまで及んでいたことを確認した。 ・鎌倉時代の遺物を埋土中に包含する素掘り溝群を検出し、調査地周辺が中世の時期には耕作地として土地利用が為されていたことを確認した。
		平安時代	なし	須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器	
		長岡京期	溝（東四坊坊間西小路西側溝）	須恵器	
		弥生時代	竪穴建物 土坑 ピット 溝状遺構 流路状遺構	弥生土器 石器 石製品	

文化財サービス発掘調査報告書 第30集

長岡京左京一条四坊四町跡・東土川遺跡発掘調査報告書

発行日　2023年12月29日

編　集　株式会社　文化財サービス
〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町８番地
TEL 075-672-6800

印　刷　三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
TEL 075-467-5151